

595
155



0001774000

3

0001774-000

595-155

順言逆語

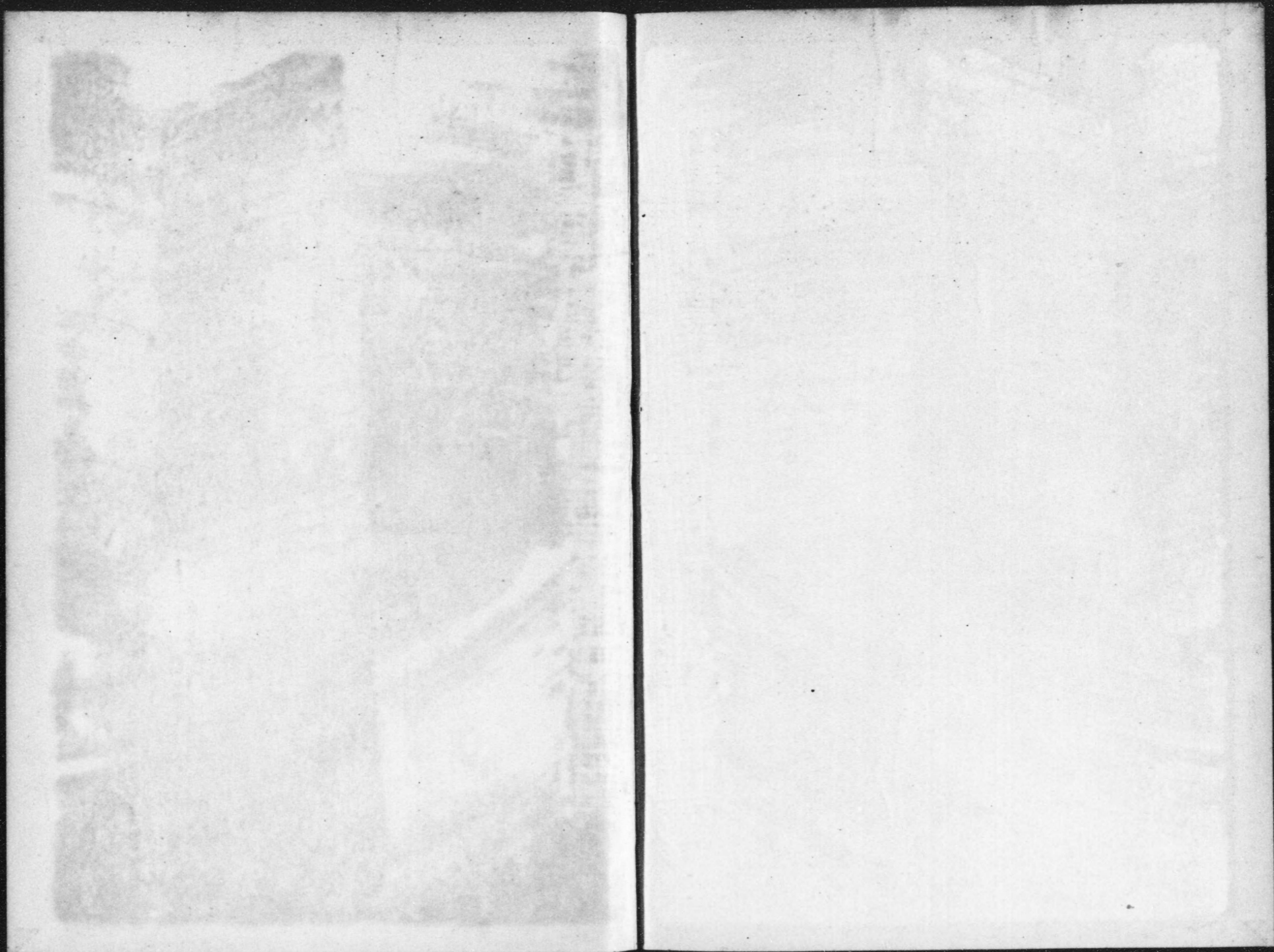
双樹学人・著

騷人社書局

昭和4

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので





順言
逆語

著者寄贈本

雙樹學人著



595-155

序

山崎林太郎君が現代の時風時俗に對し、本書を公にし世に問はんとするに當り、同君を
知れる數多の顯榮盛名の士に求めずして、故星亨先生の門下として寢食を共にし、一日の
長ある故を以て、特に余に卷首の一言を徵せられた。

回顧すれば一世の英傑星先生の幕下には、各方面に無數の逸才があつた、その中で山崎
君と故横田千之助君とは、蔽衣短袴の學生時代より、共に門下新進青年の双璧として囑目
されて居つたのである。果せる哉横田君は、後政友會に重きをなして司法大臣の榮冠を戴
き得、洋々たる前途を有して居つたが、不幸にも夭折して了つた。横田君が未だ一介の辯
護士たりし時、山崎君は星先生の左右に參し、自ら進んで東京市會書記長となり市政方面
に先生の帷幕に加はり、先生歿後一少壯の身を以て助役となり、其の識見手腕と廉直公明

山崎林太郎

著者の自筆本



とは人の知る所となつた。君の志は勿論中央政界にあつた、第一次助役を辭するや英國倫敦に遊び、更に歐洲大陸米國を視、二ヶ年餘を経て歸朝、其の志を伸ぶべき素地は成つたが、君は選舉に乗り出すべき資金が整はない、時偶胃下垂に罹つて憔悴困弊漸くにして淺草區政の職に在り得た。之が爲に君の潑刺たる英氣は振はず、市政の一隅に退隱した形となつて數年を空くし、中央政界進出の宿志を遂げず、當年の双璧、獨横田君をして名を擡にせしめた事は君を知る者の惜む所である。かく君は久しく病弱であつたが、それでも此の間再び東京市助役となり、又名古屋市紛擾の衝に當り、下關市長となり、連りに難雜なる市政に従事して屈する所はなかつた。近年痼疾大に回復したが、今は公職を退きて關東水力電氣株式會社の重役に就て居る。

君の都市問題に關する識見は、議論と實際とを兼ねたる多年の蘊蓄であるに、君は之を云爲せんとせずして、自己の社會觀人生觀を、捉へ來る雜多の題目に就て縱横に吐露して

居る。君の觀念の根據は甚だ深いものがある。此の議論學說紛々たる間に立ち、一切の學問、一切の思想を擧て、先づ自己の一心に問はんとする所、君が年來大法參修の餘響にあらざるかと思はれる。余は茲に君を紹介すると共に、世人の君の言に省察する所あらんことを、切に望む者である。

昭和四年仲秋

電氣協會にて

井上敬次郎

緒言

四

予は久しく繁劇匆忙の間に在つたが、一昨年職を轉して以來、幸に業餘の閑を得て隨想隨録し、其の一部は雑誌『日本及日本人』に登載せられたこともあるが、今回其の全部を纏めて此の小冊子を印行することとした、さなきだに言論の氾濫横溢に苦む中へ、微々たりとも此の單提獨弄を加ふるは、寧之れなきに如かぬが、時流に鑑みて、先輩知友をはじめ、廣く世人の叱教を請はんと欲して止み難きものがある。

現代の思想潮流は、非國家論、本能主義、物慾觀に對して、國體、忠孝、道德の説をなし、互に兩極に辟して反撥し、反て中間に綽々たる餘地、自ら中道に達すべきものあるを忘却してをる形がある、頃來世間時に「内觀」「反省」といふ言辭を見るに至つたが、其の内觀反省すべき主體はまだ漠然として、理窟の詮索に委ねられてある、かくては言論の

紛糾、思想の放縱は竟に終息適歸する所がない、予の志とする所は實に此の中道と中道を
得る所以とを知らんとするに在る。

予は由來文筆の徒にあらず、行文假名遣ひの如き、唯言はんとする所を記するに便なれば可なりとして拘はる所はない、題目に捉へ來りしもの六七十、稿を整へて反顧すれば、多くは題目をかりて一事を諸方面より反覆したるに過ぎざる感がある、此一事予の敢て世に問はんとする所のものである、議論を措き、思念を停め、暫く胸臆を清明にするの士あらば予の衷心自ら諒せらるゝ所あるべしと信ずる。

昭和四年十月

雙樹學人

五

目次

自分の心	一
科學の力	四
迷信と自救	六
新らしがり	八
戀愛結婚	一〇
戀愛の副産物	一三
重名輕實	一四
煩はしき變改	一七
美術	一九
洋畫の保存法	二二

專門醫科	二四
學理と神經作用	二六
運動競技	二九
水兵と選手	三一
重役の罪惡	三三
實業界と官公署	三六
社會事業	三八
デパート公營	四一
漢字整理	四四
異形文字	四六
二重生活	四七
巡査の白服	五〇

文學病	五一
藝術と人格	五四
成人教育	五六
所謂思想善導	五八
デーと時の宣傳	六一
表情	六四
頭と腹	六六
生んが爲	六九
満足	七一
親孝行	七三
一夫一婦	七五
廢娼運動	七八

カッフェー女給	八〇
婦人參政權	八二
普通選舉	八五
産兒制限論	八八
アメリカニズム	九〇
パパ、ママ	九二
現代相	九四
行き詰り	九七
學校の教科目	九九
小學教育	一〇一
訓練なき學問	一〇四
寺院と僧侶	一〇六

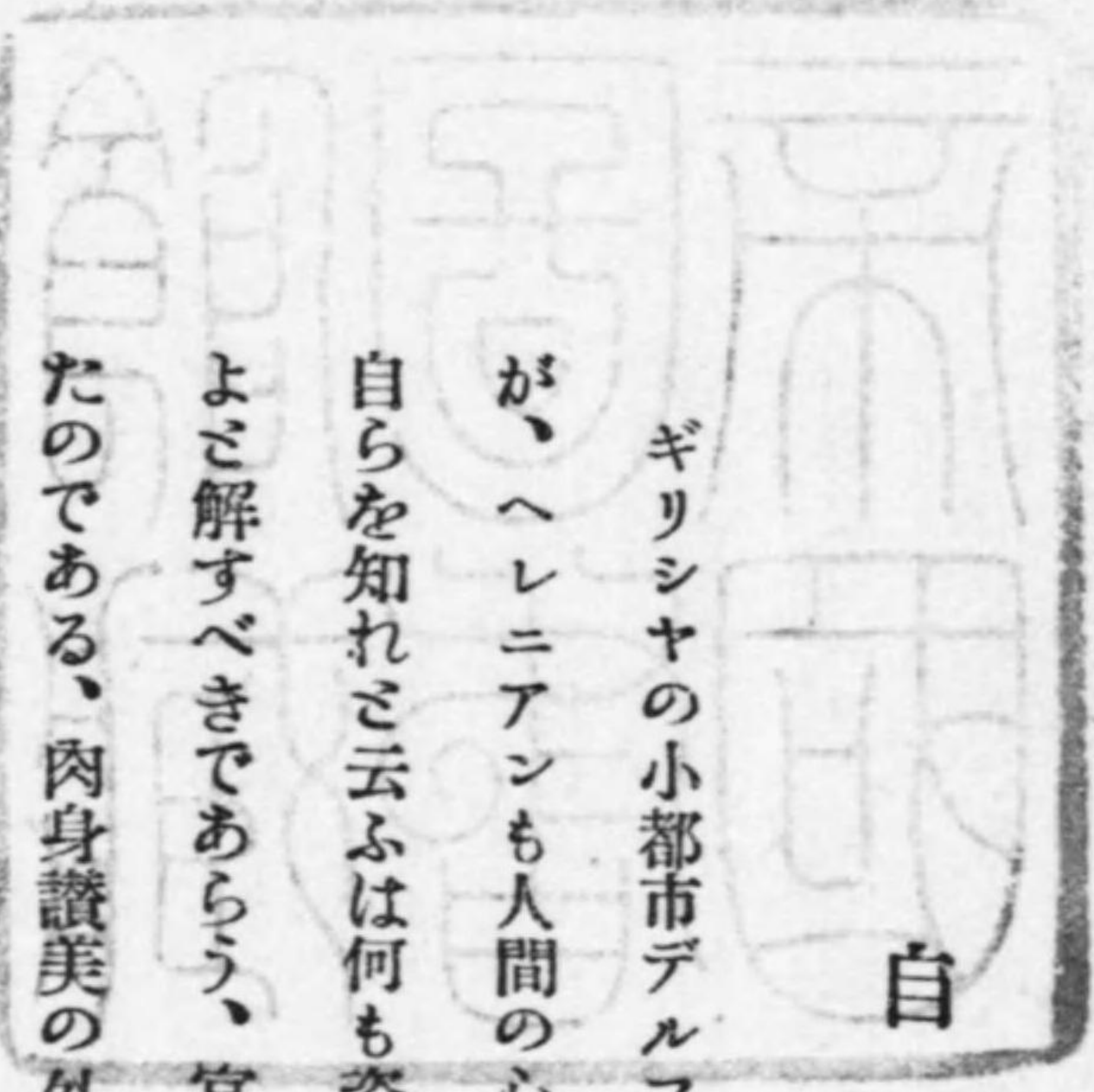
修養の研究	一〇八
學問と自己	一一一
宗教	一一三
道徳	一一六
佛教の消極的	一一九
就職難	一二一
變移と苦情	一二四
民族鬭爭	一二六
無産派	一二九
學問の獨立	一三二
社會主義の市政	一三四
學問の獨立	一三七

曲學 阿世	一三八
新聞雜誌の筆調	一三九
記者の瀆職罪	一四二
政界の議論中毒	一四四
政黨政治	一四七
地方官吏の更迭	一四九
減俸問題	一五二
挿畫の人物	一五五
個人が作る時勢	一五七
生る權利食ふ權利	一六〇
平凡になれ	一六二
都市集中	一六四

模倣人種	一六七
三段論法	一七〇
生 死	一七四
民性が時風か	一七六
亡國の文化	一七九
我等の大敵	一八一
情識と心性	一八四

順言逆語

自分の心



ギリシヤの小都市デルファイのアポロ神の神託所に Know Thyself と云ふ詞が記してあるさうだが、ヘレニアンも人間の心性といふものに自覺理解を要することを知つて居たものである、此の汝等自らを知れと云ふは何も姿や容貌を指したのでなく、つまり自己の心性其のものを知れ、内省自覺せよと解すべきであらう、官能生活、享樂、現實、知識に偏重したる彼等にも斯る貴重な大教訓はあつたのである、肉身讚美の外に精神自知の大義の存することは氣づかれて居たのである、然れども彼等は竟に官能や理智にのみ走つて宇宙や人生をメスの先で解剖する方に陥り、其の風潮が二千年以上も経た後に理智とか科學とかの衣套を着けて我國に侵入し、更に猶太民族の述作せる妄説にまで惑溺さ

れる者を見るに至つた。

學者じみた説話は暫く措き、我々は實際自ら己を不可解に放置して、煩悶苦惱しつゝある、鹿爪な顔をして威張つた事を言つて済して居ても、由來甚だ頼母しからぬ當にならぬ自己である、あんなものは見るのも嫌であつたが何時の間にか好きになり、命がけて逆上せた戀も終に其の聲を聞くさへ厭になる。徒歩で自動車に出會ふさ其の疾走危険が癪にさはるが、自分で自動車に乗つた時は徒歩者のプラク／＼邪魔になるのが腹立しくなり、金の無い時は無産黨で躍起になつたが、金を持ては譯もなく過激破壊を斥ける、憎い奴にも頭を下げられるは、時に睨みつける氣にもなれず、頭を打れても可愛い者ならニコ／＼で迎へる、之れで申分なし満足であるとしたものが不満足になる、得手勝手さ云へは得手勝手であるが、實は自分が自分を支配して居らぬ、其の相對する環境次第で自分がぐる／＼變轉して居るのである、煙草を吸ふては毒さ知り乍ら廢められず、二度と再び足向けまいと決心し乍らフラ／＼と向ふ、之れが人の人たる所以であるとしては餘りに馬鹿らしい、一體人間さ云ふ者は何處に本來の良知良能があつて、何が日常己れを支配して居るのか、喜怒哀樂好惡常に恣縱で紛亂、

學者の學説も變ずれば科學の検討も一貫せず、靜思すれば我々は眞になさけない淺學な者である。

自分自らが變轉しながら、あの時はあゝであつたからさか、今は場合が違ふからさか、勝手な言ひわけを附會して自己の過誤を覺らず、自己の本來を知らうさもせぬ、畢竟意識さか感情さか云ふ自己の官能に反影する環境の事物によつて動かさるゝものを自分さして得意で居るから、斯かる淺學なものになるので、意識感情から流出する理智は文字や口頭で尤もらしく聞かせるだけのもので、斯様な理智は年の老少で違ひ、境遇の順逆で異り、身體の強弱で變り、絶對一貫のものでない、理性さか理想さか云ふても當にならない、だから氣の弱い者は竟に自分で自分を持てあます様になるのである、而して此の人間の通有病は、醫學でも心理學でも哲學でも理化學でも乃至マルクス主義でも匡救することは出來ず、却つてより悪くすることがある。

遠いギリシヤのアポロ神の神託所の詞はかりでない、我等は手近に、克己さか、實の如く自心を知れさか、心を盡す者は性を知り性を知る者は天を知るさか、心王の主を識取せよさか、妄念に捉はれなさか、數へ難き詞をもつて居る、而して我々が肉體と精神とを世の所謂學理以外に於て現實に痛切

に自覺する方法もあると信ずる、我々は學問の進歩を讚美すると同時に其の學問を道具に使ふ我々の本體を自知することが、人間としての第一義と信ずる、其の本體を自知する能はずとも、變轉測られざる自己を自覺するだけでも現代の大疾患を救ふ所以となるであらう。

科學の力

科學萬能と妄信する人が多くあるが、今日の科學は其の闡明し到達し得たる小範圍よりも、不闡明不到達の大境域を有する中途中のものであつて、其の立脚點が能く詮議すると甚だ頼りない、知覺し得たる綜合、經驗し得たる歸納を基礎とするに過ぎない、知覺經驗に屬せざる天地は即ち科學の詮索未到の天地である、科學は闡明し得たる天地よりも、未到達の天地の大なるや小なるやすら判じ得ざるものである、科學の萬能を信じ、宇宙も人生も科學の解明に依らんとする學者が、大なる矛盾に陥りて自ら覺らざる如き事實あるも、亦科學の未だ唯一の頼とするに足らざるを自證するものである。妖怪は有る可らざるものなりと決定せる科學者が、夜陰墓地を通過して氣味悪く恐ろしく思ふたり

酒毒を以て患者を戒むる醫者が、一杯呑んで元氣をつけたり、理論上首肯す可らざる事は妄誕なりと排斥する學者が、詰らない迷信に惑ふたりするは、所謂科學なるものが到底人間を率ふる力なきを語るものである、平安無事の時、元氣充盈の時、人は能く總ての障礙を排して、思念する理智に隨順することは出来るが、一朝環境逆轉し、思念困惑するに至らば、平生の信條竟に効なく、自ら己を持てあますものである、己自らの甚だ解し難きに出會するものである、此の時に當りて科學畢竟何に値ひするものぞ、萬能は一の談話に類せしを覺るのみである、人智は終生を通じて同じきを保たず、其の理智亦年の老幼と、境遇の順逆と、身體の強弱等により、其の處に時に應じて變轉するものである、政治家も術策政略にあらざる眞面目の主張に於ても、前後一樣ならず、學者も終生不變の學說少し、吾人々類は自ら覺らずして其の懷抱を變じつゝあるを熟思せば、吾人の知覺と經驗とに立脚せる科學も百年は倍おき十年も一貫不變は保證せらるべきものでなく、甚だ頼み少きを知る。

科學が宗教を征服したと云ふも、基督教の説示する理智判斷の部分と言論の上に於て論破しただけのことにして仰々しく云ふに及ばぬ、假に征服し得たりとせしめても、言説の宗教を征服したる一事は科

學を萬能ならしむる所以にはならぬ、人類の心性さか、靈能さか、乃至人生さかの問題に至りては科學の及ぶ所殆ど無しと言ふて可なる有様である、心靈の作用と離れざる人生々存の百般の事項が、科學を頼みとして甚だ心もさなき所以は、知覺經驗の末に走りて、知覺經驗の主本たる心靈を顧みぬ爲ではないか、科學が人間の心性靈能に合致し來るに非ざれば、科學の實權は許されない、迷信さへも征服勳滅し得ざるは、人の心情を左右する力なきことを表白するものと謂ふてよい。

迷信と自救

迷信と云ふことは觀察點が違ふに従つて、定義も異ふ、科學者が迷信と斷ずる所、宗教家が迷信と斥くる所、普通人が迷信と笑ふ所、各其の判斷する根據が同じくないから、一方で迷信として、他方では眞理とし、一方で尊貴とする所も他方で愚蒙とするは珍らしくない、迷信なりや否やは之に對する人の觀念で一律にゆかない、殊に之を信する者に對しては、如何なる議論も説明も之を動かすことができないものがある、畢竟するに信するは精神内のこと、議論や説明は理智の働きに屬する、理

智と精神は同じ意識に働きながら常に離れてもをらぬが、常に一致してもをらぬ、於茲學者にも迷信があり、強いことを云ふて居ても、詰らない縁喜や御幣に氣をやむ人もある。

人はパンのみにて生きずと云ふが、我等は更に人は理智のみにて生きずと云ひたい、宇宙萬象を科學で解決すると云ふ科學者が、愛子の難病で迷ひ出し、變な御祈禱や禁壓を始めたり、理智萬能で意氣強盛、何ものも打ち負かす勢でゐた人が、失意や困惑で急に心細くなつて何か頼りをと、妙な信心を起したりするのは珍らしくない、一般普通の凡夫として、不可思議力に頼つて心の淋しさを醫せんとし、詰らない迷信に墮ちる者のあるは當然である、畢竟理智は理智以下に働く力があつても、理智以上の主本たる一心に對しては、我身で我身がわからない自分で自分の始末がつかない、竟に頼りを自己以外に求めて、其の對物に歸投して安心を得ようとする、理智も判斷もなく信じて凝り固まる、迷信はかゝる人生の弱點に存在し流行する。

人間が己と云ふものを知り得て、自己本來の心性を忘れぬならば、愚劣蒙昧な迷信も自ら用がなく弱りぬいて神頼みにうろたへる事もない筈だが、學問や理窟で己を處して行ふとして居ては、順境に

は心配なくとも、逆境には持てあまして、何か外に頼りを求めたがる、此の頼りを求める云ふ心根は、憐れなさない弱いものであるが、人生に何ものか究竟の特がほしいことを證明してをるのである、之は迷信では恐らく救はれまい、云ふて神も佛も頼んだからとて救ひには来てくれない、之を救ふは唯己あるのみ、自己一心の凝つて信得する所に無限の力が自ら己を救ふ、だから人間は自ら己を明にし、本心本性を知ることが最大要事である、如斯にして初て迷信の正邪もわかる。

新らしがり

如何なる推理法を以てしても、新らしいは即ち良い云ふロジックはない、然るに風潮云ふものは妙に輕躁な浮薄性を帯びるもので新らしい云ふと、それが優つて居り良い事である様に漠然感じて居る傾向が見ゆる、新らしい云ふ語の先驅をした青鞨社の女連も、御亭主をもつたり子を生んだりして古くなり、新らしがつて凝らした粧装も時日と共に汚れ目のたつ世の中に、不相變新を競ふ如何に新らしがるへきかに腐心して居る、冷靜に觀じ來ると馬鹿々々しい滑稽である。

ヘレニズムの蠶毒に酔ふて浮かれ狂ふ、脚下の危い連中は、之を思想界に見れば、やれトルストイだ、それモーパッサンだ、マルクスだ、アインシュタインだと年中暇なしに追かけ廻して、偕何物が果して尊重すべきか茫然として適歸する所を知らない、恰度跛足を指して是は左足が短し云へはさうかと思ひ、右足が長いのである云へは成程と感心し、兩足が揃はないのだ云へは如何にもと合點すると同じく、結局何が何やら、さうなつたやう分らずに涉獵詮索に疲れて居る、局外から見ると可笑しくもあり、馬鹿々々しくもあり、而して其の新思想さか新原理さか云ふものは、觀察の方面や、叙述の方法が變つただけで、其の根本原體は變つて居ない、要するに人生社會の演義である、八面玲瓏云はる、富士山でも見場所を違へたら形は同じでない、各自の觀察點の相違からくる議論の取捨に苦勞するより、富士山の正面背面でも考へて暇をつぶした方が愛嬌がある。

流行の風俗も亦然りで、目立つた新らしがりの女も、バラソル云ふ外來物の携帶に都合のよいものがあるに其の本案の外國人が物珍らしいからきた日本日傘を持つと、我おくれじバラソルを捨て、古昔から手許にあつた日傘——少しは形をかへてはをるが——を得意氣に持ちあるく、自國の日用

品でも改良の工夫を知らず、外國の人に持つて貰つて初めて有難がる、少しも新しいことはいない、日傘は日本で古いものた、之を持つところが新らしければ、帽子をやめて姉さんかぶりの手拭にするも新らしい筈た、頭の髪を切つたり、へたな駝鳥の足の様な踵の靴を穿たり、こんな事は外國でも昨今の新流行でない、古いこと云へは相當年月は経てをる、今の新らしいは眞似をするに云ふ意味でもあるまい、自分が今迄しなかつたから云ふて古いものは新らしくならない、新らしがるなら眞に意義のある徹底した、新らしさを考へたらどうか、併し如何に新らしがつても先祖代々譲られた此の五體は依然として舊型である、好悪悲喜の感情は少しも變化されないのである、文化尊崇で衣食住の外観外形を如何に工夫しても、目を縦にして鼻を横にする新らしさは出来ない、詰らぬ形式に苦勞するよりセメテ自分の心で自分を支配し、自分が自分に背かぬ實質本源の改良を工夫してはどうか。

戀 愛 結 婚

眞の戀愛に基き理解ある結婚と云ふことは、新らしくないが新らしがりに喜ばれる空想である、英

國あたりの女子に日本女子の配偶は父母長上の選擇によること云へは、身震ひして驚くのは正に事實である、彼等は親しく交際して、エンゲージメントの後も尙互に十分諒解する日月を経て結婚してさへ追々夫婦喧嘩が始まる、夫の道樂も、女房の我儘放埒も現れて來る、人前では夫たる者、女子は弱きものなり扶けざる可らずこの因襲を奉じて我々には従者か下男か之間違へる程、扶けること云ふより事へること云ふ風を示すが、誰も居らぬ室内では打つたり蹴つたりする、互に能く知り合つて結婚してさへ斯の如し、親や長上の選擇なんか任せたらそんな相手に配せられるか知れない、之が最も大なる恐怖であること、親や伯叔父やに迂つかり委せて置くこと、日本には少い方が、歐羅巴には多いこと云つてよい程、其の娘の財産に野心を逞ふしたり、娘を一種の喰物にしたりするを恐れることは、結婚を他に委せ得ぬ直接の原因であらう。

他に委せず自ら親しく理解して結婚すればそれで結構だが、其の理解した結婚が甚だ不成績なのが多い、離婚の方法が日本より困難なること、扶養要求權を捨て得ないことで、表面に現はれる離婚統計は多くはないが、夫婦別々に勝手なまねして居るを異にしてをるのは日本人には一寸想像つかぬ事實で

甚た少くない、理解ある結婚、聽いても、考へても、理想的であるに何故に實際の事實は斯様な反對を示すか、更に醜て考へ直してみること不思議はない、當然の事さ肯はれる。

結婚前に交際して此の人さならば婚約してもよいと云ふ意思の動きたる初は、其の人の財産か容色か才能か人格か知らないが、其意思が動く根本が結婚であるだけ、其の意中の傾くと共に戀愛が生ずる、戀愛がなければエンゲージメントも起らない。所が戀愛と云ふものは口で如何に利巧らしい説明を附加してみても、靜にして冷なる理性に出づるものでなく、あはたも笑靨に見ゆ、赤烏帽子も好きになるもので、正當な判斷などの介入する餘地のない、熱狂的、盲目的のものである、それだけければ成立存続しないものである、此の熱狂盲目は何もかも觀察が宜い方に下されて、都合のよい理窟をつけて嬉しがり、徹頭徹尾自分の選定が完全無缺と思ふが第一で、第二には結婚當座と同じく結婚前は互に厭忌を買はない様に謹慎し推譲して居る、隨て互にボロは出しあはぬ、然り而して彼等は實に無上の理想を達成し得たりとて、婚後當分は意味もなく歡樂境にあるが、倍年月が重なるに従つて謹慎も推譲もなくなり、悪い癖も出れば我儘も出る、歡樂既に薄らいで不満足に萌す、理想の結婚は

やがて夢さ化して破綻を生み來る、戀愛自由結婚の多くの場合が甚だ芽出たからぬ結果となる、之は歐羅巴の婦人はかりでない、我國の賢明を誇る婦人連にも随分實地體驗してある所であらう。

父母長上が冷靜に考査してさへ誤りは免れない、戀たの愛たのさ逆せ上つて考へた事が、偶中するさへ僥倖である、此の卑近なる事實、平凡なる思考力でも十分判斷のできる事を、神聖さか純真さか言葉ばかり立派にして覺らないのも、要するに自分と云ふもの自分の意思と云ふものを知らない結果である、媒介人の口さ一べんの見合で結婚する輕舉はかりが危険ではない。

戀愛の副産物

或る博士の妻君が、夫や子供を捨て、他の愛人に走つた時に、其の不心得を諭しても勿論聽かず、子供が可愛くはないかと云へば、アレは戀愛の副産物ですと答へて、恬然として居たさ或人から聞たことがある、此處まで常軌を脱してしまへば、是非の評も下すべき餘地がない、戀愛學の徹底實行家とでも云ふのであらう。

併し人間も一旦の考や、念想が何時迄も滄らぬよすが、一方向になつて逆せたり、狂つたりした時は、他の方面は全く忘れてゐて済むが、其の一方に安じて、逆せが下り狂ひが治りかけるよ、今迄夢寐にも思はなかつた事に念想が動き出し、中には雲霧のはれて明月が照し出したように良知さか心性さか、閃めき出すこともある、幾度も言ふが人の意識や感情は、時と處と境遇で變る、此の妻君何年間ほど戀愛の副産物で平氣で済せるか、既に情念の發作で他の愛人に走つた、又情念の發作で子供は副産物でなかつたよ、悲泣自責に苦むは知れたことである、口で何と云つても、内にある思の外に現れずしては了らぬ、人生本然の心性を没却して妄想に動いて居る間は、副産物と戀愛とが主客處を異にしても、結局副産物は、癒し難き自己の苦悶であることを覺る時あるべしと豫言する。

重名輕實

「去_レ華就_レ實」といふ語は随分古いものと思はれるが、今時新しいところでは、こんな古い語は繰返さなくてよい、華は去る可らず實も取る可し、折角綺麗な華を去るに及ぶまい、「華實併收」を改め

てはさうか。

斯く書き出してみたが、現代式のヘレニストは併收さゆかずして、取_レ華捨_レ實と間違つた方へ走つて居る、新らしいと云ふことは勿論改善の意味に限られて居らぬ、何でも從來と違ふといふこと、なるから、改悪も當然あるべき筈だから、今數歩を進めて改悪はやめて改善の新らしいのを誇りとしてはさうか、實の一つたになき山吹も美しいが、見た_レだけで味ふことが出来ぬ、花より團子も殺風景、花も實もあると云ふ方が第一感じが宜い、現實主義から云ふても、見て綺麗なたけの空花より、食つて甘味を知る果實の方がよい筈だ、實をソツチのけにして華ばかりに憧憬れて居るのは、幻にうつゝを抜して脚下の泥溝にも氣のつかぬ様な愚に陥る。

丁稚、小僧が小役員となり、何々君が何々君となり、床屋が美髮士、アーチストとなり、職工が工手、近頃交換手が事務員さかになる様子、日傭人は稱呼が見つからぬか勞働神聖さか筋肉勞働さか氣を吐いて居る、と思へばごみ掃除人は塵芥掃除夫で納まり、溝泥さらへは淤泥浚渫夫さでも云ふらしいが、また車屋さんが人車牽挽士さも稱せず、おわいやはさんは肥料汲取手さも呼はぬ様である、名

稱などはどうでもよいと云ふ人もあるが、體裁のよい稱呼があれば何も卑下した名稱を固執するには及ぶまい、改稱決して不都合なりとは思はれぬが、丁稚小僧が小職員になつたこと、其の能率や處務が向上した譯でなく、依然として丁稚小僧の實質は變らず、床屋がアーティストと云ふたこと、矢張り髪をするだけ、工手と呼んでも筋肉労働と云ふても、其の内容實質は變らない、變つたのは其の稱呼と共に各本人の氣位が高くなつて、自尊心と云ふより益もない虚榮心を満足させただけである。

實はさうでも宜い華さへよければと云ふ思潮は形式主義、外面尊重、手早く云へば中味はさうでも包紙さへよければ主義である、鴉が孔雀の羽毛を飾るイソツプのフェーブル主義、世界では随分古い諷刺話の一題材である、新らしがるに事をかいで、力齧のいれ甲斐のない様な改變に憂身をやつすは氣が利かないでないか、今時の新々思想もあまりに槽が多い、こんな風潮があるから、古い「去華就實」なんか云ふ語が引込まない、早く之を華實併收と改める様にしたいものだ、新らしければ新らし甲斐のある改善をしたい。

煩はしき變改

此の忙しい世の中に、単一で済む事を複雑にしたり、一般に分り易い事を難澁にしたりする傾向がある、之を而かする者は、自分のする事だけを思ふて居るか知らぬが、之を受け入れねばならぬ一般人は、アレもコレも一々會得せねばならぬ、繁劇雜多の社會生活には随分面倒で困められる、變りさへすれば新らし、新らしくさへあれば良いと云ふ様な、意義も理屈もない妄想から發露するのかわらぬが、甚だ感心しない事である。

鐵道省の役人連中は驛名を左書に變へよとして、一時物論を惹き起したことがあるが、今迄驛名の標示は長い年月と共に田舎の爺さん婆さんでも、旅をした者には目に慣れて、無心で標示を知り得るものを、何の必要があつて態々經費を投じて左書に變へて見慣れた目をマゴつかせよとしたか手数のかゝる下らない閑人のものすきと思つたが、近頃は又「特急」さか「何等特急」さか其の實質的約語で言ひ慣はされた列車に、懸賞募集までして、「ふじ」さか「さくら」さか名稱を附した、一二

等特急さか三等特急さか、更に列車通は何號列車と稱して少しも不便はなく紛はしいこともなかつた、之を「ふじ」さか「さくら」さか軍艦か煙草のような名稱で呼はせるには、「ふじ」さか「さくら」を取り違へぬように、正確に記憶させねはならぬ、其れだけ一般に煩雜の思をさせる。

メートル法も強行的實施で、ソロ／＼商人側から口にしたしたが、之もメートル法制定の法規が、外國語そのまゝ、ミリ、センチ、デシ、キロ等をメートルやリットル、グラムにつけ、疋糧の様な新作の文字を使つた爲、一層煩雜を増し、外國語の素養ある者でも一寸覺へ難い、一般人には其の長短輕重の差より稱呼さへも暗記するに骨が折れる、之も分寸尺や匁貫、勺合升等の邦語を割り當て、稱呼だけでも呑込みやすくすれば、舊升と新升と、舊寸尺と新寸尺との暗算比較も爲し易く、一般に普及する速度は餘程違つたであらう、稱呼が同一では新舊混亂の虞があるとしても、昔時太陰曆を太陽曆に換へた例に徴して、甚しい實地の錯誤は生じないと思ふ。

數へ舉れば限もないが、今一つ近來の英和辭典に、アクセントや發音を示すにフォネチック、サイソカ云ふ符牒を附けて得意がる出版者があるが、英和辭典を唯一の手引にする學生等は英字の外に

此の符牒を覺へねはならぬ、然るに此の符牒たるや本元の英字の辭典には採用されてをらぬ、英字辭典を披くようになれば、英語流の音調、發音の表示法によらねはならぬ、して見るに出版者の新らしがる得意は、學生には餘り難有からぬ負擔である、況んや外國語を學ぶ者には出來得るだけ其の國語の氣圍氣に親ましめる必要がある、音符も英語は英語流にして置くことが學習者に利益である、勞に伴はない益、或は益のない勞に初學者を苦しめる氣が知れぬ。

簡易と慣熟との變更は、變更の事故を増すに比して必要と利益のある事に望ましい、簡易や慣熟に厭きて、おもちや半分に事物を變へる浮躁な風潮は、目まぐるしい思をさせて神經衰弱の原因でも増す外に効能はない。

美 術

美學さか美術論さか云ふ學問めいた理窟は知らない、唯一介の俗人として、美術を好愛する者は、時々意外なものに出會ふ、専門的に深入りするに、一般通俗の觀念から餘程懸隔するものらしい、併

し美術を鑑賞する多數人は専門的知識のない者の方が多い、美術家の作品は美術の學問をした者に示す目的に限られたものでなく、一般の俗人は或る種の美術を鑑賞することはならぬと云ふ譯もあるまい、俗物に分らない作品は専門家ばかりに見せるがよい、公開して分らずやの俗物に俗評をさせる必要はあるまい。

彫刻でも繪畫でも、近年殊に裸體が流行する、裸體でなくちや美術の堂奥が示されないらしい、作者は鹿爪らしい顔をして、警察が兎や角云ふ反感や反抗をそゝる様に不平を並べるが、例へば帝展に此の種の作品が出る之を観る入場者幾十萬人中、作者の得意がる妙技を鑑識する人が何割あると思ふか、喜んで観る連中の九分九厘までは、愚劣な感興を満足せしめんとするに非ざれば、分らないまゝに分つた顔をする半可通である、併し之も美術には相違なからう、唯何さなく作者の術氣があつて味噌の味噌臭い所が鼻につく様だ。

裸體はまたよいが、我々に困るのは未來派と云ふ畫や、何年前か故大山公が自分の像を見て、作者の大得意に拘らず、乃公はこんななりんぼうの様な顔をしては居らんと、云はれた類の塑像は、俗

人には先づ之を見るだけの豫備知識がなければ分らない、専門家の捉はれた所往々にして一般人を苦しめる。

何時の事であつたか、癩病患者や、首縊りの繪を書て其の作を競うた人がある、近年又解剖圖を書て得意になつてゐた人もある、描寫其のもの、技巧其のものが美術なら癩病患者を描くも、首縊りを描くも可、肥溜も妙、猫の死んだところも面白いが知らぬが、觀者に神韻を感ぜしめ、快感を起さしむるには、斯る醜惡なる嫌忌すべき物體を描くは全然排斥すべきことと思ふ、教科書か小説講談の挿繪なら格別、美術品として伍列せしむべきものではない、我々一般の俗人は美術は觀て心に淨潔なる好愛を感じる方面のものさ考へて居る、奇を衒ひ新を競ふの極、美術の本來に背馳して、唯其の題材の類なきを取り、其の技巧を誇らんとするは餘りになさけない心情である。

是も所謂思想の混亂が生じた一現象かも知れない、美術家と稱する作者中には餘程普通と違つた意識をもつて居る者ができて、美術家と自尊する反面に、俗情に迎合し投合せんとする卑しからざるに非ざる投機的心掛の徒もあるらしい、こんな作に人の嘔吐を買はんより、何さか云ふ著述者のように

「屁」や「禪」の詮議でもして居る方が罪がなくて愛嬌がある。

洋畫の保存法

我國に西洋畫の行はるゝと既に幾十年、油繪と云へは全國津々浦々まで知らぬものはあるまい、然るに今頃になつて、油繪の保存法が問題で、永久に展觀に供して畫面や畫材に異變損傷を來さない方法を研究せねばならぬ事になつたことは、幾十年の間、畫家も愛好家も随分のんきに日を送つたものである。

此の問題は明治神宮外苑の、繪畫館にあると仄聞したが、當代の大家が心血を傾注して、三年五年或は其れ以上の歲月を費して描き上げ、明治天皇の御一代の盛徳宏業を永遠に傳へる爲、一般に公開し觀覽を許すつもりで出來たものである、然るに日本畫の方は故障もないが、洋畫の方は館内の氣温湿度通風等で畫面に徴が生へるゝか畫布に水分を含むゝか、乾燥し過ぎて質を損するゝかの憂がある。そこで、當事者は此の永遠に傳ふるものを如何にして完全に保つべきやに種々の工夫を凝らして腐心

して居る。そうである、歐羅巴でも亞米利加でも美術館や博物館に、古今の名畫は無數に展觀に供されてある、西洋に之が保存法があるなら我も亦之に倣ふ便があるが西洋には其の心配はないらしい、要するに日本の風土の異なるより來る問題であらう。

我等の経験した小範圍では、西洋の風土は濕潤が少い、西洋の器具は金屬製、皮革製が多い、而して此の金屬皮革の製品はまさしく使用、耐久、體裁等に於て、我國舊來の竹木其他の製品に優つてゐる、柳行李と靴、木履と靴、蝙蝠傘と傘等を見ても比較はできる、ところが金屬や皮革の器具は、我國では錆が出やすく徴が生へる、西洋の實狀と甚しい相違があつて、磨いたり拭ふたり手入れに油斷ならぬ厄介がある、錆や徴の厄介の殆どない西洋が金屬や皮革を廣く用ゆるは自然で、我國が此の厄介のない材料を主として來たのも其の所以がある、金屬皮革の器具が進歩してゐて、竹木陶器類の器具が幼稚であることは一概に言ひ難い。

今日ではあまり建てまいが、煉瓦の土藏は用に適せぬ、此の頃盛になつた鐵筋コンクリートも、大きなビルディングの様に、暖房遮熱裝置の完備してゐるものは宜いが、小さな安普請の住居などでは、

冬夏共に非常な困難を感じるそうた、火事や地震に對しても木造より優つてをる、耐久力も比較にならぬが、嚴寒と酷暑に對する特別な工夫が必要である。

採長補短、模倣も大に可なりとするが、之をするには鵜呑でなく、能く咀嚼して日本化すべき見識がなくては不可ぬ、浮ツ調子の眞似は、思想や學問ばかりでなく、何事にも宜しくない。

専門醫科

何となく頭がハッキリせぬ、身體の調子が良くない、耳鼻科の醫者は鼻が悪いと云ひ、胃腸科では胃が原因だと云ひ、眼科は眼の視力を矯正せねばならぬと云ひ、或は尿、或は血行と、専門の異なるに隨て各其の診る所によりて治療せんとする、患者は此の治療を一つ／＼受けてみても効果がないとすれば結局病は何であつて、如何にすれば快癒するか、各科の専門醫はそれで済むが、患者の身體は弄はれて得る所なし、悪くすると却つて壽命を縮める原因になる。

分科的専門は結構な事であらうが、人間の身體は鼻、眼、胃腸其他具備せる各部分の機官が集成一體をなしてをる、如何なる場合でも或種の外科手術の様に引き離して處置できるものではあるまい集成せられたる一體は、一體として觀察されねばならぬは當然である。一科一門の部分的にはかり考へられては、其の本尊たる全身はたまらない、時計の機械でも、全體の調和を度外視して部分の不良を直すことは出来ない、鼻の醫者は外はさうでも鼻だけよくする、眼醫者は眼だけ、胃腸は胃腸だけ血行は血行だけで他は知らぬとせなれば、患者たる者各科専門醫を歴訪して診て貰はねばならず、診て貰ふ各科の部分はよいとして、之が集まりて全一人を形成して居る、其の集成の調和は何科で診て貰へばよいか、醫術界には未だ全身専門科と云ふ様なものは無い。

又分科専門が流行するが爲に、患者は何科の醫者にかゝればよいかを先づ識別すべく豫備的診察を受けねばならぬと云ふも甚しき煩累である、況んや世間尙ほ未だかゝる識別診察醫なるものはない。如何に専門科に分れても、拙者は胃腸さへ癒せばよい、腦がさうならうと、肺がさうたらうと構はぬと云ふ様な無茶な事は實際にないとは云へ、専門醫にかゝるには何科にかゝるべきかを知らねばならず、其の科にかゝれば外の部分は又外の科にかゝらねばならぬは常人の苦しむ所にして解し難い事

相である。

分析的、解剖的、局部的は獨醫學ばかりでない、一般科學の趨向であるが、其の研究進むに従ひ、其の精細明なるに従ひ分析的局部的の弊益甚しく、草木の研究は竟に花に限られ花の研究は瓣に縮められて、枝葉根幹花實を具備する草木の全體は判らなくなる、専門の學者はそれで宜いかも知れぬが、一般の人間には瓣に對する精緻立妙の説を聞いても其の草木は解されない、今の分科局部的風潮當に大に調整せざる可らずである、醫學をして人間の健康生命に對するものとす以上は、部分の精研に走りて集成一體を忘れてはなるまい。

學理と神經作用

左様な事は學理上有り得可からざる事であるとか、學理上認められぬとか云ふことは能く聞くが、我等は學理の貴ぶべきを知り乍ら、動もすれば此の種の學者の妄斷に反抗して學理上無くても現實界には有ると云ひたくなる事がある、何とか云ふ博士であつたが、澁柿の甘くなるのは澁が無くなるの

でない甘く感ずる様になるのだと云ふ説明をしたことがある、學者としては如何程貴重な説明か知らぬが、味覺で好惡を取捨する我々は、澁を味はずして唯甘きを味ふて居る、澁の存否は我々の柿を甘しと食する上には要のないことである、併し之は例の解剖的分析的の學問では爾か説明すべきもので砂糖にも苦味があり、鹽も甘いが鹹く感ずるのか知れぬが、更に妙なものになると學者閑家具の説明だけとして聞き流しの出來難いものがある。

あらゆる學問に同じ通弊であつて其の最も多い實例を有するのは醫學であらう、斯くくのもの病氣に効くと云ふと、ソナナものは學理上認めないと云ふ、それでも病が治つたと云へば、神經作用たさげなす、此の類の話は随分珍らしくないが、神經でも病が治ればけつこうでないか、如何に尊貴な學理でも神經作用にも及ばないものでは有り難くもない、堂々學科の門を張つても神經作用を左右し得ないで、學理外の療法に効を制せられては一向に頼り少いものと云はねはならぬ、コナナ調子であるから學問で物足りない連中はいろく治療法を流行させたり、下らない迷信が學問の向をはつて、警察の厄介が絶へないのである。

一體今の科學云ふもの、即ち學者の記誦と推理とで生命を保つ科學なるものは、人間を物質的に取扱はんとして心靈的に觀察することを疎にしてをる點と、學科を傳來の範圍内に於ける統一的組織の窩窟に籠罩して、其の闕外に出づるを知らず、傳來の範圍以外に別に研明すべき天地の大なるものあるを知らぬ點とが、依然として學者以外の一般人に其の化育を及ぼす權威がない原由をなしてゐる一切萬事を傳承せる學問の範域によりて闡明せんとするから、現實界の事實まで否定し、神經作用で治つたものは治つたとして是認する氣にもなれないのである、學理で治し得なくとも矢張り學理を捨て得ないのである、愚劣なる迷信にさへ其の尊嚴を冒瀆されるのである。

宗教家の中には稀に宗教を捉へて宗教に捉はれない人が出るが、學者には學問を捉へず學問に捉はれて、其の奴隸に甘じて居る人はかりの様に見ゆる、古昔コロムバスが世界は圓いと云ひ出した時に聖書に背反せる言をなすとして咎責を受けたと云ふが、今の學問も一方には著々宇宙の玄妙に達せんと進みながら、一方には亞米利加大陸のあるのを知らんとするさへ邪説なりとする陋風がある、所謂學理上認め難いこの言は、學理の偏狹を自白する言で、現代學理はコロムバス時代の聖書と同じ様な

滑稽味を有するものこの冷嘲を免れない所以である、修得の學問を更に傳統の範圍外に擴げて、眼孔を四邊に及ぼす必要がある。

運動競技

近年素晴らしい勢で囃されてきた野球を筆頭に、色々な運動競技が、實に滔々として一世を風靡せんとしてをる、若い學生連中は其の面白いこと、教科書と首ツ引きで苦しむの比にあらず、終には學業ソツチのけにして之に全精神を傾倒する、學校は優良選手を有することが、出身者の學業成績よりも大なる名譽として居る、競技に巧みな學生には進級試験や、入學試験の採點にプレミアムを附して優遇して居る、生徒は益々勉強を競技に向ける、學校卒業後の身の始末などは勿論考へには上らない、凡そ物其の極に走りて其の本を忘れる、運動競技の逆上者を除きては此の實狀に對して、學校當事者や學生の心理狀態を疑はずに居られまい、更に之を平氣で見居る社會の先達や、之を囃し立てる新聞雜誌に至りては、其の氣が知れない。

好きで慰めに真似をして居て、資産家の息子が落語家になつて仕舞つた話がある、落語家になつても、一流の真打になり、殆んど一生を其の藝で立て、行くから、また取るべき點はあるが、學生が學業ソツチのけにして、競技に無中になり實力に添はぬプレミアムの採點で學校を出ても、上級學校へ入學の競争試験にはパスすることが出來ず、世の中に出てみても學校の履歴は質看板同様で實價はなく、然らば選手で立つて行かうとしても壯年期に入れば役に立たず、結局は選手でチャホヤせられた身の終り、酒や女に破滅を招いて後悔した者よりも始末が悪い。

運動競技を奨励した趣旨は面白味を加へた體操で、體育の爲である、體育の目的を達するが主眼で競技を練達させること、極言すれば球投げや走りつこの技能者を製造する爲でない、畢竟競技は餘技で本務でない、體育の目的を忘失して遊び事の技手を作るのは何事であるか、況んや此の技を競ふが爲に賭事をするに至りては、興業もの、角力杯と何の擇ぶ所もない、學生なるが故に選手と云ひ、角力取なるが故に藝人と呼びならはした、此の名稱の差は其の技の形を異にしたゞけで、一種の遊藝的職人たる實質は二者異なる所なしである。

角力は技其のもの、性質から、普遍性に乏しいが、運動競技は割合に流行の範圍が廣い、廣いたけそれだけ其の弊害の及ぶ所も多い、更に之が學業と云ふ本務を捨て、熱中する學生社會に行はるゝから困りものである、社會の先達等少しく逆上をさげて考へ直して貰ひたい、競技の職業を増加しても別に人類社會に有難い事もなく、本務を捨て、熱中する若い者を煽動しても功德もあるまい、それよりも彼等が學生々活を離れて、職業競技者として立つて行ける方法でも講じてやつて貰ひたい、職業としては角力取の外に玉突もある、今の風潮が推移すれば競技選手の到達する歸局は自ら知るべきものがある、敬重には値せぬものとなるであらう。

水兵と選手

或る新聞に「眇たる一水兵が世界的選手となる」と云ふ初號活字かの標題で、一水兵より競技の選手の方がさも名譽であり、眞價があるような記事を掲げてゐるのを見たことがある、成程海軍々籍に在りては無名の一水兵で、運動競技仲間に入りては有名な優者であらうが、無名の一水兵たる價値は

果して、太平の餘技たる運動選手に如かざるか、世潮の浮躁、此の新聞流の筆調に憤然たらざるを得ない。

帝國の一水兵たる地位は、此の國家民族の浮沈存亡を擔ふものである、運動界の選手は如何に世界的でも宇宙的でも、太平遊樂の餘技師たるに過ぎない、人生の本義に於ても、國民の分義に於ても、國家民族に奉仕する職分と、看衆娛樂の競技とは到底其の比倫でない、我等は寧世界的選手の技能ある者も、一水兵として帝國海軍に在るの尊重すべきを稱揚せんとする。

元來近時の運動競技なるものは、事實に於て體育と背反し、技巧の専門職業的となり、所謂角力取輕業師と其名と形とを異にして、其の實を同ふしつゝある、人見某と云ふ女子が競走に秀でたりとて、其の社會では盛に賞讃して持て囃して居るが、運動場で走ることが巧なりとて何の公益世務に貢獻する所があるか、其の實質に於て國技館で幕内力士と囃されることの異なる所があるか、我等が太平遊樂の餘技と貶するは社會人生に資らす所なく、而かも青少年時代に濫りに不自然なる筋骨の厄使をなし、壯年期以後に不調和なる一身を持て剩す愚に陥るを覺らぬからである。

餘技ならば餘技たる程度に止むべきであるが、浮躁なる世潮は浮躁なる新聞紙に煽られ、意味もなく運動競技は高尚優越なる人類の一業務なるが如く思ひなされてをる、日々の新聞紙が如何にも社會の大事件なるが如く、紙面を惜まず、記事を高調にして之を掲げることとは、彼の學生を囁り青年を誘ふて、之に耽溺せしめ、一身の計を誤らしめ、社會の流弊を助長してをる、學校も亦此の風潮に後れじと對校競技などに熱中して、生徒の學業を度外視するものもある、由來餘技娛樂に耽る民族は、肝腎の民族存榮の眞劍事には反て怯懦脆弱なものではないか、競技の優者は戦場の勇士にあらず、又建業の達人でもない、スポーツは到底スポーツたるに過ぎぬ、角力輕業玉突より新らしいだけのことである、競技の選手と活動の役者、是れ正に現代に囃される流行もの、一對なり。

重役の罪惡

實業家と稱する連中はよく曰ふ、役人はやり損なつても辭めれば濟むが我々はそんな事では濟まぬと、成程一寸聞く道理あるらしく思はれる、如何にも役人は失錯をして國家民人に害を與へても、

辭める一事で萬事の決済になる風がある、尤も辭めるには單に自決ばかりでない、其の情狀によりては懲戒免職と云ふ役人生活の死刑同様の罷められ方もあるとは云へ、兎に角辭めること云ふことで済むと云はれても仕方はない、責任の決済は退職にありと評して然るべし。

然らば實業家は如何、一二年前の實例で云へは多くの銀行や會社の破綻で重役中には、無数の人に損をかけ、直接間接に國家社會に多大の害を被らせて居るが、其の所謂役人は辭めれば済むが、ソレナ事で済まないこと云ふ重役連中は何をして居るか否何をしたか、辭める丈で済まぬこと云ふ以上、首でも縊つて死ぬか、家財有金を綺麗に提供して親子夫婦乞食になるか、ソレトモ何年前か今は昔譚になつた製糖會社の酒田常明氏のようにピストル自殺でもするか、見渡す所何處にも何會社でも何銀行でも一向左様な沙汰は聞かない、反て部下の支店長とか店員とかに世間に顔向が出来ぬこと云ふて死んだ人があること云ふが、重役連中は自分共の不埒を人がした様に平氣で、何さかして今一度大きな顔をして世間に立ちたいと、藻掻いて整理とか、減資とか、甚しきに至りては預金を切捨てる杯と圖々しく済した事を考へて居る、中には私財提供など、聲ばかりで實は密かに財産の隠匿をしつゝあることも噂された。

れた。

一體實業家と云ふ連中には、概して株主の資財を勝手に運轉して、よい加減に帳簿面を取り繕ふて配當で胡魔化し、お手盛りの賞與で腹を肥し、乃至人の金を預つて勝手に使ひ果し、ヤレ邸宅、ヤレ自動車、ヤレ待合と贅澤をつくし來れる者がある、官吏とか公吏とか云はれる連中は平素規則づめの窮屈な中に在つて、議會や民衆に睨まれて、生活から日常の行樂まで監視の外に在るやうな自由はきかぬ、而してやり損へは責任を負はねばならぬ、此の事情態様は到底比較にならぬのみならず、其の失錯の結末は役人には容赦なく、實業家には何にもない、債權者や預金者が各自の利益を少しでも保護したい弱點から、思ひ切つて決斷を迫らないのを宜い事にして、酒蛙／＼然として居る、彼等が日夜百万苦心なご、云ふのは、此の大失錯、大罪惡を償はんが爲に非ずして、各自が今一度浮び上つて昔の榮華を繰返さんと欲するにあるのである、然らざれば辭めれば更に甚しい失態醜陋が暴露されるからであらう。

實業界と官公署

氣の利た者は役人なんかしない、人材は民間實業界にあつまる、官公署の仕事は呑氣でまぬるい、民間の事業は敏活で的確である、と云ふ様な思潮は随分古くから傳つて居る、手近い處で東京市の事業を見て、殆ど一から十迄するのかせぬのか、著手したが中止になつたのか、やるよ云ふたが其の後どうなつたか、實に其の實行や遅々として、其の竣成や悠々たりである、而して其の事に當つて居る役人と云ふ者は、何事も杓子定規で、自由裁量の餘地もなければ、臨機應變の妙味もない、其の上些細な事まで次から次へ合議を経て上司の決判を貰はねばならぬ、アレデ能く活きた人間に出来るなご、悪口も云はれる程である、潑刺たる生氣、縦横の活機は役人社會に餘り見受られない、之に反して實業界の事業は巨萬の資金を投じて惜氣もなく目醒しい遣り方をする、之に従事する人間は、處務敏速で措畫適當、之をお役所風に比較するよ自動車と人力車程の違ひに見ゆる、眞實事業は民間に限り人材は民間にあつまれるか、進んで皮相を破り眞實相を究めてみたい。

民間の事業は、會社なら重役任せである、株主總會はあれども、多數の株主は議事件目も満足に知らず、會社から往復ハガキで缺席なら委任狀をよこせよ云へは結局世話なし委任狀を送る者十中の七八、總會は開かずして既に多數は重役の意見通りになつて居る、社内に社則はあるが主として、社の備用せる社員を規するもので、重役會は議決と執行との府、何者の掣肘も牽制も受けない主權體であつて、社長と頭取と云へは普通は重役會を左右する實權者である、隨て會社の事業は多くとも十人位の頭數、少ければ一二人の意思のまゝ、事を處し事を進め得て、社員は其の手足となつて頗る自由な手輕に氣兼ね氣苦勞もなく吩咐られた通り働いて行けばよいのである、斯る自由の境地に在りて事業が出来ないよすれは重役以下餘程な低能か、水平線以下の鈍物でなければならぬ。

お役所向の方は前に東京市を引合に出したから、東京市を主として云ふが、當局者が何かするには先づ市會の議決を求めねばならぬ、此の市會が年中市役所の隅から隅迄承知して居る、株主が委任狀を出して済して居るよは雲泥の違ひである、市會の決議が了るよ府知事と内務省、大藏省よかの認可を受けねばならぬ、此の間に原案はドレ丈け修正變更せられるか知れぬ、而して其の認可の下る迄

は提案以後短くて二三ヶ月、長ければ半歳や一年は経過する、愈々實行となること又委員ごか何ごかの面倒もある場合も多いが、之がなくても立案當時ご實況の餘程違つて居ることもある、而して其の日常は監督條規で律せられる、市民も黙つて居らぬ、漸くの事で手を下しても一寸した變更も又候議決を経ねはならぬ、一錢二錢の支出も法規によること云ふ調子、市吏員如何に敏達の英才ご雖、動きのこれぬ舞臺では腕も自由に揮へない憫さがある。

斯く内實を檢索して來るご民間が優秀で傑出して居るでもなく、お役所が別に愚劣で氣が利ぬでもない、舞臺が違ふだけであるごする論結が至當である、併し乍らお役人も實は杓子定規に捉へられて融通の利ぬ人間になり勝で、實業界ばかりがエライ譯でないご同時に、お役所も此のエクスキュースはかりで許されない點は多々ある。

社會事業

我國に於ける社會事業は、政府當路が彼の如く高唱するに拘らず、其の道具建が彼の如く花々しき

に拘らず、全國一般に適切なる効果は舉らない、爲政者は社會の實狀や、世態の變移から其の必要を認めたが、其の施す所は西洋の雛案で、社會相ご施設ご能く適應合致して居らぬ點がある。

第一社會事業、現に爲政者の指示施設を努むる所の社會事業は、亞米利加の如き個人主義の社會に於て發達し効果を舉ぐるもので、我國の如く親戚相養ひ、隣保相扶くる風習の社會には、親子相顧みず、知音相助けざる風俗を以て立つ亞米利加に於けるが如く、公共救濟の必要を感ずること薄く、隨て此の種の施設を翹望する度が甚だ低いのみならず、日常の生存競争の峻烈な大都會地を除きては、國や公共團體が社會事業をするのを見て、不急不要の施設でもするが如くに感じて居る、ソレモ其の筈である、寄る邊のない貧窮者や、厄介者は町内で世話をしたり、篤志の人が面倒を見たりして、其の篤志の人や町内の者は之を一つの善事として之をすることを快しとして居る、詰り個人や町内が自動的に社會事業をしてをるから、態々お役所方面が力瘤を入れて大仕掛にせぬでも宜かりさうなものだご思ふ次第である、だから甚しいのになご政府は遊民を好遇する杯ご見當違ひの蔭口まできく、政府が社會事業に如何に熱があつても、國民の全般には一向に趣旨が徹してをらない。

第二には爲政者は臆病的に、社會事業はコレ／＼の施設をするにあると、保育所とか、合宿所とか職業紹介所とか、産院とか、種々雑多の事項を奨励するが、之に要する資金は地方市町村の負擔にあらずれば、民間の寄附によつてをる、隨て市町村は政府の指圖通り何か社會事業をせんすれば、市町村税を増課せねばならぬ、然らざれば市町村民に五月蠅がられ乍ら寄附金の勧誘募集をせねばならぬ、孰れにせよ歸する所市町村民の懐に影響するので、其の負擔を難有がられず、又かこ顔をしかめて嫌はれる、由來社會事業程實効に比例して金のかゝるものはない、創始的費用は工夫がついても維持經理の年々の費用は容易でない、少數な人間の救済で多數は甚だ輕からざる負擔をする、ソコで地方では社會事業なんかするより道普請でもしたい、泥濘さらへも満足にせずに社會事業でもあるまいと冷嘲される、況んや寄附の目當にせられる様な人は、例外は除て、多くは個人的町内の社會事業出資者である、或る地方の稀なる篤志者は社會事業の寄附勧誘に會して、私共はモット適實に社會事業をやつて居ります、コンナ二階から目薬の様な而かも費用倒れの事業に寄附したくありませんと、拒んだ實例がある。

社會の缺陷は社會自ら補填する義務があること云ふ原則が抑々翻譯ものである、亞米利加や歐羅巴の社會事相に對して、適切を感じる程我國の風俗慣習には感じない、而して多くの社會事業が、其の人を得たる僅少のものを除き、殆どお役所式の道具建で器械的で眞髓がない、かるが故に我輩は社會事業は今の調子で政府が如何に聲を喧して高唱しても、我國では残念ながら普遍的に發達しないと言ふのである。

デパート公營

デパートメントストアが盛になるに伴れ、一般専門の小商店が疲弊するまで、小商店自衛の對策を考へたりデパートメントストアに攻撃の鋒を向けたりする様子がある、個人若くは小資本の會社が各或る品目種類を専門的に扱ふて營業して居る中へ、大資本の百貨店が大仕掛によるづ屋式に商賣を始めた、最初は百貨店は贅澤向のように思はれたが、段々發達してきて、日用食品まで販賣するに至り、客は小さな商店へ行くより大きなデパートへ集るようになった、之では小商人が立ち行かない

大きなデパートは益々大きくなり、小さな商店は益々さびれてくる、資本多少の闘か、商略巧拙の争か、孰れにしても小商店は氣の毒な運命を辿らねばならぬようにも見える。

何でも權勢のある所に反抗敵對するのが、時代の風潮であり、新人の新戦線の様に思はれる此の頃では、此のデパートの顧客吸収に一種の無産派式運動でも起りはせぬか、しかし小商人保護も必要か知らぬが、需用者の利便増進も必要である、此の背反せる兩極の調節は中間に立ちて均衡を誤らぬように考へねばならぬ。

我等の知り得たる所では、大都會の商業組織が個人的から資本合同に進み、品種限定の専門商から百貨店に移ることは、日本ばかりでない、西洋でも同様で、蓋し世界的變遷の軌轍であつて、都市問題の一項目をなすべきものである、之に社會政策の觀念を加味するならば市場問題と同じく扱はるべき要件である、世間ではデパートの繁昌に對する仇怨憎惡と、専門的小賣商保持の對策とには思を致すようであるが、未だ都市住民の共同機關たる、社會政策の市場觀念からは之を考へて居らぬらしい隨てデパートを合同資本の專占物と諦らめ、小商店の對抗自衛策などに腐心して、一種の社會争議を

誘導するに放任してをる。

専門的小商店も立ち行けるように出来れば無論立ち行かせたいが、顧客たり消費者たる多數民の經濟や便利と云ふ事は考へねばならぬ、社會の一般的幸福増進は、資本主と労働者との協調よりも、常用必需品の供給を圓滑にし、價格を低廉にし、購買に便利を計る効益が普遍的で切實である、それには贅澤品を度外視したるデパートメント組織の公共市場を設けねばならぬ、之が公的機關として設けらるれば、一面には合同資本の壟斷も殆ど絶せられ、小商店の個人利害は、大なる市民共同の犠牲として納得することも出来るであらう。

村落は個人で小さく百貨店式、都會は品種によりて専門的分立商店、更に大都會なれば大きく百貨店となる、都市の發達は此れ等の經濟問題と離れずして變化を來す、此の世界的邊移は一步を進めて社會政策の見地より、私人の手を離して公共の經理に委すべきである、常用必需品の供給は収益を目的とする商賣から、需用者を満足させる公企業に移すべきである、時代の新らし味は後れ馳せの物眞似より、率先して自ら範を示す方にある、市場問題は常に鮮魚や野菜の卸賣に止むべきでなく、購

買組合を公共的にし一般に普遍ならしむる組織の小賣百貨市場にまで進まねばならぬ、社會政策とか消費生活問題とかを口にする連中も、瓦斯代や電車賃はかり氣にして、此の大要件たる公營百貨店に想到せぬらしい。

漢字整理

文部省の國語調査會とかの、常用漢字の選定とか云ふものは、良い考ではあるが使用の字數を減少しよう云ふ方へ偏して、滑稽至極なものや、馬鹿／＼しいものを出して來る、意地づくでもあるまい無暗に漢字はかり減するに及ばない、歐羅巴各國の文字にも同じ様な同義異體や、スペルの難澁なものは澤山ある、假名づかひを發音式にするのは便利な時もあるが、漢字熟語の變改に至りては意味の判らなくなるものがある。

字を知らない者や、書くのが面倒臭い云ふ連中には都合がよいか知らぬが、常用漢字制限の風潮に乗じて、一廉の學者や、堂々たる文士までが漢字を假名で済ましたした、日々の新聞を見ても珍らし

くない事ながら三四の實例を擧げると、「女のきよう態」を書かれても前後の文句から考へて狂態か嬌態か分らず、「けふ然たる笑聲」もか「けう然たる女」もか書かれても全くチンプンかん我々には何の事か分らぬ、更におかしなものは「しよ光」もか「くわん境」もか書いて漢字を避ける、本郷區に曙町あり、今の居場所は知らぬが聲樂家に何か環云ふ名高い婦人もある、人名や地名には使用しても熟字には使用しない云ふ理窟でもあるまい、さうかと思ふと斷髮流行の今日でも櫛笄はマダ／＼女の入用品で、其の製作商賣さへあるに「コウガイ町」も態々假名で書く連中もあり、更に甚しきに至りては「偽もう」杯と欺罔を偽妄にした書き方をするのもある、斯様な取柄のない、却て弊のある風潮は文字に従事する人から先づ改めて貰ひたい。

ラテン語が西洋文學の源として尊崇せられ、我が昔時の國文學が依然として一門をなせると同じく漢文學も永久に文學として存することは明かである、常用漢字の制限をして其の語源たり字源たる漢文學と疎隔の度を多くするだけ、漢文學研修の困難を増す、常用文字にむつかしい文字を避けるのは宜いが、意味も分らぬ假名連用の熟字は沒意義である、それ程漢字を避けたくは、そんなむづかしい

熟語を使はぬがよい、苟も其の熟語——漢文學の妙味で言ひ表さんとするならば、其の該當漢字で書いて讀む者に意義瞭然たらしむるが宜い、字を知らないマネをしても別に感心する者もなければ、褒められた新工夫でもあるまい。

異形文字

時代の推移は、用語はかりでない、文體も書風も變はるから、其の推移を否む譯ではないが、近頃流行する一種異様な形の文字、或人は曾て怪文字と呼んでゐた、其の濫觴はたしか活動寫眞の看板や廣告であつたと思へて居る、何分多種異様な字體で未來派の畫模様を見るような、何ぞ云ふ字か分りにくいものもある、其の俗惡な作り方——書き方は云へぬ——は活動寫眞に似合はしからぬこともない、昔なりの角力番付や、芝居の勘亭流に準じて、活動寫眞用の異形文字としておいてもよいが、此の異形文字を興業ものでなく、書家に縁の乏しくもない、各種のポスター類や、堂々たる事務所や書物の標題に用ひる人がある、ペンキ屋や提灯屋にまかせる譯でもあるまい、在來のまじめな讀み易

い字體にしてはどうかと思ふ。

ところが、昨今此の異形字體を、鐵道省や警視廳までが眞似をしたし、東京市の一公衛は此の流の字體で左書に役所名を標示したこともあつた、漢字の字數さへ整理したいと云ふ今日に、楷行草篆隸の五體で澤山である、書風や筆勢の違ふのは仕方がないが、此の上活動流字體まで増さなくてよい、其の活動流も一種ならまたしもの事、めい／＼勝手に作り上げるから幾通りにもなつてをる、如何に習字を疎略にする學校教育を受けたさて官公署の役人までが愚劣な眞似をしなくても宜いでないか。

二重生活

久しく二重生活と云ふ不平を聞く、我々の日常生活に經濟上からも社交上からも、和洋兩様の煩累を脱したいと云ふ議論であるが、さりさて食物も日本風か西洋風かに一定せよと迄は云はない様で、唯衣服の事が主となつて家屋の事が時々附隨する様である、如何にも日本服の外に洋服、椅子卓子の外に疊座敷は、普通の階級では著るものを二重に備へる經濟上の苦痛の外、場合に應じて著換へる手

數も厄介千萬である上、日本座敷に床の間の装置も必要なれば椅子卓子の西洋室の設備も必要なる斯様な二重生活は早くごちらかにしたいと云ふ、一應首肯のできる議論である、處が之を主張する多くの連中が洋風に一定したい連中であり乍ら、尙湯上りに浴衣がけの心地よさを忘れず、箸を取つて茶漬を食ふのを排斥し得ないばかりか、中には待合や料理屋を喜んで小座敷にごてらで胡座をかく寛澗を捨て得ない男もあり、腰掛て居るご冷て困るご腰掛の上に四角にすはりたがる女もある、二重生活の不經濟を論じて、浴衣、ごてら、座布團の類は残して置くでは、結局洋風の單一生活は出来ない、強て言へば二重の量の多少の差に過ぎない。

二重生活は經濟上からも日常煩勞の點からも、出来るならば廢したいが、西洋風にすれば住宅から改めねばならず、住宅から改めてかゝる事は反て經濟上困難を免れない、經濟や煩勞から云ふならば日本の舊來風に統一した方が勝つて居るのは言ふ迄もない、併し日本風にするのが對外的に可ならず云ふならば西洋風に統一することも對内的に可ならざるものがある、洋服を著て椅子卓子による便は明かなるご同時に西洋人の味ひ得ない湯上りの浴衣かけの快なるは斥け難い、洋風の室でストー

ヴに向ふ暖もよいが、日本座敷で座布團上に火鉢を擁する心地もよい、斯く考へて見るご二重生活は反面に甚た便利があつて我々は年を逐ふて二重生活の苦よりも、其の時に應じ處に隨つて便なる方法に慣熟しつゝある。

畢竟和洋兩様の生活状態は、偏頗にして單一なる拘束を脱却し各人個々に適意の長を取つて其の便益を得る風俗を馴致しつゝある、此の複雑はやがて我々日本人の衣食住に獨特の長を誇り得べき道理であるご見てよい、眞の新主義は靜止したる箱詰式の觀念には存するものでない、複雑混交の間に取舍去就を良くする事が進歩の善なるものである、早く一樣にしたいと云ふのは、長短得失の考慮の足らぬ輕躁であつて、二重生活が齎らしつゝある實際的効益に尋思せぬ短見たるを免れない、二重生活を禮服から平常著まで同じ様に用意するか、孰れか一方を取り揃へて一方を略するか西洋風の室を用意するかせぬかは、各人の經濟状態に應じて自ら定まるべきものである、急拵への單調一律主義は多くの場合に極端の弊に陥り、後日に至り復舊や改修を要するに至る、兎角人間は既に有するものは其の長を忘れて其の短のみが思はれ、未だ得ざるものは其の弊を見ずして其の利に惑はされる弊がある

巡査の白服

茲に何年來か、我輩はもう更へるたらうと思ひつゞけてゐたが、依然夏になると巡査に純白の服を著せる、文化の中心らしく威張つて居る東京丸の内黒上衣白ツボンのサラリーマンも多く見受ける。朝鮮の風は別として、白服は亞米利加邊でも一種の贅澤著物で、汚れ目のたつたけ、洗濯を頻繁にする、随て幾著も用意のある洗濯賃お構ひなしの金持でなくては著られない、白服の汚れてゐるのは見る目にも快きものでなく、見すばらしいものである、官費でせめて一週間目位にでも洗濯してやるなら格別だが、薄給の巡査には自費で常に洗濯して清爽の氣分を保つことはできない、随て汚れたまゝ、見すばらしい風をして、警察官の威嚴や品位を著物で傷けてをる、そこへ一般のサラリーマンまで夏は白でなくてはならぬかの様に、最も汚れやすいツボンを汚れの見へる白にし、上衣は汚れてもわからぬ黒色で氣取つて居る。

醫者や衛生學者は黒色は日光を吸収するから暑い、白色は反撥するから暑くないと云ふが、夏の炎天下に白い著物の日光に反射する實況は見る者に眩しい暑苦しい感を與へ、著て居る當人にも暑つそつた、元來白色は果して屋外炎天下の著物に適するか、往年海水浴にて耳に海水が入るは危険なれば脱脂綿を耳に詰めて游泳せよと新聞紙上で注意した醫者があつた、其の言ふ通りにすると、海綿の様に水を含み易い脱脂綿は反て耳の中へ海水を入れる媒となつて困つた人がある、其れこれを一様に見る譯ではないが、専門家の言ふことは往々案外なことがある、白服の適否も實際的に研究しなむの必要がありそうた。

印度の熱帯地方では、鼠や薄茶色の、方が適してをると云ふ、印度で白服を著て居る者は恐らく印度に慣れない人であらうと聞た、日本では灼熱印度にまけない季節の屋外勤務に、白服を著せてをる、そして見すばらしい汚れを目立たせてをる。

文 學 病

理智——生れてから薰習せられた、對境の覺知から得た判釋力とでも云ふ様な、語を更へて云へば

三段論法式に推度する頭の働きて萬事を解かうとするなきけない哲學や人生觀に捉はれて居る程憐なものはない、何でも自分が考へて推理して會得するのを最上唯一の道と心得、此の考や推理が自分の對境から得たる淺慕な、而かも窮屈なもので、此の外に天空海濶、無礙自在の働があることを知らないのは、如何に新らしがつても微が生へて居る陳腐な思想である。

理智萬能、その總てを否認するのではないが、自分の推理や會得を唯一に頼む結果は、妄念や、空想の病に罹り易く、昨好今惡轉々止まない自分の思慮を天地一貫の理論と獨斷したり、劣情慾念を人間生存の本能と誤解したりする、斯様な思潮は二三千年程も前のヘレニズムにヘライズムを取り混ぜた五もくの蒸し返して新鮮味がないばかりか、鼻もちもならない古いものだ。

芥川と云ふ文學者が自殺したが、其の遺書と云ふものを見れば何の事はない、一言にして評すれば分らない事を書き列ねたものである、氣の毒な事であるが惜しい哉有名な文學者にして人生觀などは不徹底至極である、文學者でなかつたら新聞紙も神經衰弱とか、氣が狂ふたとか書いたかも知れぬ、文學者なるが故に其の筆や文字を以て圈外の人には分らなくてもサモ意義あるかの様に世間に思はせ

る、而して此の眞似までする者が出てくる、文學も結構だが、人生を行詰りにする自殺の宣傳なんかになるのは難くない。

之で想ひ起すのは、先年有島武郎と云ふ人が、人の細君と情死したことがある、其の當時ヘレニツク宗の連中は頻に之を感歎して戀愛のクライマックス杯と正氣の沙汰とも思へぬここまで臆面なしに公言した、誰かの言草ではないが、三助お鍋の情死は痴情の果と云はれ、文學者の情死は戀愛のクライマックスと云はれる譯が分らぬ、小説を書たり文學を談したりする人間には、其の罪惡の寛大なる所以は今の理智でどういふ推理によるのか、文字を弄する者に何故に痴情や劣情がないとするのか、文字弄舞の弊毒實に甚しと謂はねばならぬ。

商賣とは云へ、不徹底なる人生觀や、文字と舌頭との哲學に迷ふて、人間としては其の心性に殆ど何の修練も加へてゐない連中の書いたものを、際物師然と大きな廣告をして賣出す本屋も本屋だが、之を隨喜して買ふ文學病人にも困つたものだ、彼等は眞個人生の大事實を知らない、唯讀んだり聞いたりして、彼方へ引かれ、此方へ引かれ、其の時々の感情や妄想で風のまにまにマゴついて迷ふて居

るのである。

藝術と人格

有島武郎が情死した當時、其の筆になつた文章が學校の教科書中にあつたので、之を削る可らず藝術は藝術として貴ぶべしと云ふ主張があつた、コンナ主張が教育者と稱する連中にあるから、學校教育ではダメとなつて、公民教育とか成人教育とか云ふものが一層必要になつて來る。

其の人物は如何に醜劣でも、其の作品がよければ宜しいと云ふなら、文學者も世間の職人や藝人と異りはない、文字なるが故に貴く細工物なるが故に貴からず、三味線乃至端唄なるが故に卑しき理窟はあるまい、學校が藝や職だけを教へて他を顧みぬなら、其の作者の人格は問はず其の作品の秀逸を取つて可なり、若し學校が知識を併せて人間の性格まで教導する目的をもつて居るならば、其の作品如何に秀逸なりと雖人格の醜劣なる爲め、教材に用ゐられずと擯斥する方が教育の趣旨を實地に表現する所以ではないか、之を教科書中に存することは、人格や性行はさうでもよい、藝術さへ上達すれば

は名譽であると云ふ様な感じを若い者にもたせる、極端に云へば人の妻と通じて首を縊つても、文章が上手なら宜いと云ふことを教へると同じ事になる。

事態は丸で違ふが藝術は獨立だと云ふ様な思想で識者に指彈させた話は、彼の朴烈の悖逆事件を調べて寫眞を撮つてやつた立松と云ふ元豫審判事の細君の獨唱とにある、事情は兎に角立松氏は社會の難議を被つて、氏自らも社會に遠慮して居た、内助の妻、夫婦一體とするなら、細君も亦夫君と共に適當な時機まで慎んで居てこそ婦人らしくもあり、細君らしくもあつたらうに、亭主は世間で日蔭の姿になつて居つても、私は藝術を以て立つから別だと云ふ様な調子で乗り出し、ソレを煽つて、サモ一大善事でもある様に肩を持った新聞まであつた、人格性行と藝術を没交渉にするなら、文學者も藝術家も平たく云へば藝人職人である、藝人職人の仲間に入れられるのは嫌だ、崇高なる藝術など、其の品位までも高めたる地位に置きたければ、人間たる心靈や性能に大なる修養と鍛練を加へて、其の藝術の秀でたる如く自己を高くするがよい。

曰く學問の獨立、曰く藝術の獨立と勝手に都合のよい屁理窟をつけて、勝手に脱線したがる人間が

多い理智世界、併し彼等の心の底に立入つて見ると、實は彼等はコンナ臆面なしを云ふの調和のされない悶々の惱みがあり、誠にたよりの憐れな心情の持主であることは、恐らく間違あるまい、感情や衝動からきた念想を、一廉の理想や道理である様に思ふて居る間は人間はダメである。

成人教育

曰く成人教育、曰く公民教育、社會組織の現員に對して共同生存の平準を得せしめんを努めて、一人前になつた人間を教育しようとする、成人と云ひ公民と云ふ蓋し其の教育の趣旨は同じものと見て差支ない、之が英國あたりで組織たてられ實驗せられたとしても、其の必要は我國に於ても同様で、寧ろ一層痛切の度が加はつて居るかも知れない、決して等閑に付すべきではないが、果して其の目的を達するや否やは、我國に於て殊に疑はしい。

其の教育される成人が果して教育を受けるや否や、其の教育を受けたる成人が果して修了者たる素質を持し得るや否や、此の教育は見聞を廣くする智識一偏の教育ではない、社會集團の現員國民とし

ての精神を加味しての教育である、此の精神が今の成人に注入せられ涵養せらるゝ見込は甚だ薄弱である、此の精神さへあれば態々成人教育さか公民教育さか云はずとも、其の足らざるを補ひ至らざるを導くことは、困難ではあるまい、然るに此の精神なるものゝ本源が、人間の純正なる心性にある點に於て、現代式理智主義と甚だ趣歸を異にして居る、即ち理智主義は現實、慾望、享樂、感覺満足となりて崇高神秘とも云はるゝ純正無雜の良能を悪化して居るが故に、推理的言説としては至當の事と認めても、之を實行するには興趣をもたない結果となる、今の理智は官能による感覺満足に傾きて此の外に享有せる人生至高至尊の良能なるもの、理智を滅却しても蔚然として人間たるを保たしむる本來を遺忘せしめ擯斥せしめてをる、之が所謂思想の悪化となりて民族亡滅の極に向ふも覺らず、戀愛至上となりて人生破壊の果を知らざる因由で、成人や公民の教育を高潮せねばならぬ様になつた次第である、此の因由を如何ともする能はずして口授教育なる末節の手段をかり、理智的に教導せんとするは本末を誤る甚しきものである。

小學校で、先生を畏敬して居る純真な子供時代に啓發し培養し化育して置くべきを、修身や倫理を

切實學問同様に扱ひ、成長して益も用もない事物を教へ込むに力を盡し、中學時代に教師排斥、同盟休校を敢てする素地を作らしめ、高等學校以上では愈々以て學藝偏重、人格度外に仕立上げ、而して一面に成人教育公民教育と云ふて騒いで居る、かくの如く觀來れば今の教育は子供の時から人間としての心性を破壊亡失することに骨を折つて置いて、大きくなつてから急に其の破壊を修理し亡失を回收せんとあはて、居ると評せざるを得ぬ、成人や公民の化育が必要ならば小學校や中學校からやるべきで、成長した後枝ぶりや幹を矯め直すことは、植木屋でも御免蒙る所である。

更に最も切要なるは、新聞紙や雑誌で盛に成人を教唆するものもある、其の効甚た大にして勢熾盛、少々の水を注いでも役に立たない、成人教育論の大なる顧念を要するは正に此の點にもあることを切言する。

所謂思想善導

思想の悪化、混亂に驚き、之を善導匡救する手段方法を思想に求め、所謂思想を以て思想を導かん

とする爲政者の立案は全然不可なりさせぬ其の必要は認められるが、此の手段方法に限るものとし、如何にも最良唯一の策なるが如く考ふるに至りては、迂拙効の期し難きを指斥せざるを得ない。

今日の混濁せる思想そのものは、即思想によりて誘ひ導かれたものである、思想が思想によりて悪化せらるゝところがあるが故に、又思想によりて善導せらるゝところもあるには相違ないが、悪化せられて又善導せらるゝものならば、善導せられて更に悪化せらるゝ虞もあるべき筈である、悪化せらるゝ前の思想は淳良であつた、初から悪いものは悪化される譯がない、然らば善導しても悪化は免れない、善悪の化導は循環際涯ないばかりか、善導の思想と悪化の思想と紛争紛議、其の化導の對象たる民衆は、兩思想の取捨に惑ふて一層混亂歸趨なきに至る奇觀を呈することも無いとは云へまい、是れ畢竟理智の判断を以て比較考量さるゝ思想と思想とを對立せしめ、理智判断で取捨去就する思想を以て思想を征せんとするからである。

理智判断には時の感情も加はり、環境の事情も加はり、年の老少や身體の強弱も加はり易い、否此れ等のものを全く去れば理智判断は或は存在しないかも知れぬ程、恃みにならぬのみならず、冷靜と

か純正さか云ふても萬人萬様、其の面の異なる如く其の判断も同じくない、此の恃み少き理智判断によりて取捨せらるゝ思想——各人各個の思索念想によりて構成せらるゝ其の時と處とに於ける考——を以て、之と同一の素質なる思想を導かんとするは賢明なる法策とは云へぬ。

我等は思想の悪化混濁と云ふよりも、人心の頽廢惑亂と云ひたい、人間の思索念想は人間の心性靈妙の根源より動き、思想そのものは獨在のものでない、だから其の根底たり依據たる心性の薰育啓發が問題の根本である、心性の薰育啓發は一切萬事を頭腦に訴へる現代式科學流儀の偏僻に墮するを廢めて、一面天賦天眞の情操に修練を加へるに在る、倫理修身の教まで學科にして、生徒に睡む氣を催さしむる教育法を改良し、兒童を理智に導くと同時に其の性情を發揮せしめ、知識の標高は人格にあるの風を示すに在る、授業技術手を養成するに專にして、其養成せらるゝ者がマルクス崇拜者たり戀愛至上主義者たるを等閑に付し去るが如き師範教育を革正し、精神的感化力ある眞の教師を養成するに在る、彼の一方に新聞雑誌の煽揚を警戒し、一方に演義講習の手段を取るが如き、皆此の根本の施爲に伴ふべきものである、思想を以て思想を導くこと云ふも亦一の思想たるを免れない、之を最良唯一

の手段とするは其の理智甚だ至らざるものと評せざるを得ぬ。

デーと時の宣傳

安全デー、蠅取デー、兒童愛護デー、標札掲出デー、酒なしデー、まるでデー、屋のやうだ、模倣も多くなれば流行と呼ばれる、流行には軽浮な感じはあるが、眞摯な觀念は乏しい、デー舉行の眞意は一般の注意を深刻にして平生の習慣を誘致しようとするに在るらしい、一日でも半日でも、眞個其の心意を之に注ぎ、平生の疎虞を戒むる手段にするのは非議すべき事ではないが、近頃の様にデー又デーの浮ツ調子は一般的に注意喚起の効力も薄いやうに見ゆる。

安全デーだけ交通に注意して、デー以外は注意せぬ譯でなく、愛護デーだけ兒童を可愛がつて他の日は虐待する意でもないが、酒なしデーの外は酒ありデーで、蠅取デーの外は蠅取らぬでよいデーになるのは事實である、全體デーの催しが軽々しく、デーの名稱が形式的で精神的に反響がない、同じ事でも克己週間さか、事故絶止日さか云へは用語からして主觀的に内省を刺戟する、詰らない枝葉の

事ではあるが、デーが花火線香に了つて跡を留めないのは、此の邊の末節にも全く關係のないことはない、其の名稱から、其の舉行の状態まで眞摯な氣分を缺いて居るを謂ふてよい。

名稱はデーを附してなかつたかも知れぬが、時の宣傳と云ふものもデーの種類である、此の日は目標になる様な時計の誤差を検査したり、往來者の時計を標準時計に合せさせたりして居るが、是も時の貴重なこと、時を守ること、云ふ趣旨が徹底せぬのみか、其の時を正しく知る方法は丸で抛却不問に附せられてをる、目標になるやうな時計の誤差を調べあるいたり、其の日だけ標準時計に合せたりした處で、時を正しく表はすには何の役にも立たぬ、其の日だけ時を正すことは平常の時計のくるひには何の益もない。

多くの人は實驗して居る筈だが、時計屋は器械のよい時計は賣るが、指針の正しい時計は賣つて居らない、此の時計は器械は上等ですと云ふから、指針は勿論正しいと早呑込するに實際は大間違で、時計屋は器械は保證しても指針は保證せぬ、換言すれば器械の堅牢や運轉は大丈夫でも時刻は正しくない、二度三度時計屋の手を煩はしても遅速の免れない例は珍しからぬ、我々は時計の誤差や、其の

日だけの正指針よりも、せめて一週間や十日位は遅速の生じない時計を供給して貰ひたい、寒暑や位置の變動によるくるひは別として、常態に於ては時を正しく指す時計を望むのである、貴重な時確守すべき時を知るべき時計が不正確なる指針を常態とするに、デー／＼式に時の宣傳をして何の効益を擧げるつもりか。

停車場の時計は汽車の發着に大關係がある、最も時を正確に示さなければならぬ大切なものである近頃到處に電氣時計を採用させて、誤差のない様に勉め、電氣時計は正確なりと誇つて居るが、實は帝國第一の東京驛の電氣時計も、各ブラットフォーム悉く同一と保證はできぬ、東京驛、品川、上野と一々検査して見るも一與、三十秒毎に一齊に動く時計でも決して常に正しく同一に指針を廻轉して居らぬことを知るであらう。

時を知るべき時計を正しくせずして、時の宣傳をする、デーを形式に舉行して眞義を顧みぬ、もつとシツカリして貰ひたい。

表 情

六四

故醫學博士高木兼寛男から聞た話であるが、男が英國に留學した時、病院で英國婦人が分曉に際し悲鳴號叫の甚たしいのに驚き何ぞ云ふ意氣地のないことかと思ひ、日本婦人の忍耐強き美風を心に誇つて居た、歸朝して後其の誇さした日本婦人も追々悲鳴を揚げ號叫憚らない實例に會し、其の悲鳴號叫が教育を受けたと云ふ、學校出の婦人が多くなるに隨つて増したこのことであつた、理智偏重が精神の緊張を弛めるかどうかの問題は暫く措き、表情と云ふ點のみから見ると其の苦痛をありのまゝ表示する偽らざるものであらう、近頃浮はつた連中が態ざらしく、一の技巧として齒の浮くような表情をするより、餘程眞に近いかも知れぬ、残念な事には人間が弱くなつて、底力の強味も忍耐力も美風も亡失して居る。

元來表情は西洋人の特色で、喜怒哀樂の情は、何でもかでも頭をふり、手を振り、身體を動かして表示に努める、嬉しいことでも驚たことでも彼等は意識の知覺に止めておくことのできぬ方で、すぐ

身振りで表はす、之は彼等の習慣性で一つの風俗であるが、我々日本人には餘りに仰々しく騒々しくて、馬鹿げて見ゆることもある、それ程外部に表はずから、内心も餘程銘記印象を深くして居るかと思へば、表情の後は忘れたやうになるが普通である、我輩が倫敦に居つた時、寄寓して居た家の人々を劇場につれていつたことがある、行く時も歸つてからも一同の喜び方、難有がり方は大變なものであつた、サテ翌朝になると昨夜のお禮百萬遍は何處へ吹き散つたか、記憶にも無い様子で難有うの一口も出す者はない、つまり彼等は飛び上つたり、雀躍りしたりして喜を發散させてしまへは濟むこと云ふ風である、表情で一切は了つて心意には残るものがないこと云ふ風である。

然るに近頃例の新らしいと稱して天井裏の煤や縁の下の蜘蛛の巣まで珍重がる連中は、頻りに西洋人の眞似をして嘔吐を催すやうな表情に憂身をやつたがる、表情も悪くはない、眞情の發露抑へんとして抑ふる能はず、自然に表現するのは宜しからうが、腹の中は左程でもないことを、態ざ仰々しく言葉と身體のこなして見せようとする、芝居や活動の役者が演て居るのを見ても、一向に似合はしからず反て見物人に氣恥かしい思ひをさせる、それを普通の紳士淑女と云はれる連中が、西洋人が和

六五

服を着て箸を持つたより不恰な様子で、直傳でもない真似のまた真似をする、西洋人は傳來の習慣風俗であるから總てが自然に調和する、日本の新らしがり屋は態と真似るから表情の妙味がないばかりか、折角の感情發露も下手な表情でブチこわして、滑稽味もない索然たるものとなる。

喜怒哀樂の情は普通に於て自然に外部に表現はするが、人間の大事は喜怒哀樂に捉はれてならない時がある、情そのものすら抑止せねばならぬ習練が必要である、情の表白に技巧を弄したり、腹にもない輕薄お世辭を身振りで見せたりする修業は、人生を通じて殆ど益のないことである、女子分婉の苦痛も強忍以て克つべし、男子生死の關頭も從容として處すべきが人生に欲求すべき要事である、それ迄の習練はなくとも飛び上つて喜を表はすの、嬉しさの掩ひきれぬ風情を、しぐさで愁歎するの、黙つて哀愁に沈む自然を、ごちらが真か考へてみるが宜い。

頭 と 腹

頭の好いのが持て、腹のシツカリしたのは大分閑却されてゐるが、頭の好い云ふのは明敏な方

で誠に結構なことであるには相違ない、社會と人事とを問はず明敏に待つ所は實に多いが、明敏は才氣に現はれ、才氣には規矩準繩のなが常である、頭の好いのを貴べは機鋒縱横、舉措俊快で、凡庸の徒輩を後に瞻若たらしむる、其の才氣煥發の有様は人間として敬重するに餘りあるが、悪くすると輕薄浮ツ調子更に一轉するご狡猾なる、世間の詐欺師は大概頭の好い連中であるのは深く省せざる可からざる點である。

畢竟明敏は軌轍のないものである、才のまゝに働くものである、學問をして頭の好い云はる、人は本を讀んで能く暗記し能く講釋しても人間と云ふ通義に於ては何等の重きをなさず、政治家で頭の好いたけの人は術策自在、衆議を翻弄し得るが、其の施設に何等の生命を寓し得ない、其の他何れの方面に於ても頭の好いは重寶なれど、唯頭が好いたけで其の人の明敏は幻華の如きものに終らざれば悪い方に延びて行く、人間は頭だけでは物足らぬ、人間を完成するには頭の外に腹が大切である、頭ばかりに重きを置くから益もない學說や思索に逐ひ廻はされて、緊りのある方途に進む事が出來ないのである、頭ばかり發達させ補助人形の様になつて、其の脚下に力が無くなるのである。

腹のシツカリしたと云ふ方は剛健で膽玉の方になる、自然に其の處する所、向ふ所に根柢あり實力ある表現を示す、頭の好い方の輕快に比して重厚であり、俊敏に比して從容である、悪く云へば鈍いと思はれるが、其の底力の重みは自ら動かし難き威權を具してをる、腹にシツカリと落ちつきをもつて居れば、脚下をフラ／＼させて方角に迷ふたり、耳目に惹かれて心を奪はれたりする心配は少い、腹ができて技藝に熟すれば技藝も手先の巧妙以外自ら神を傳ふるものがある、學者も政治家も成敗共に其の本來を傷はずして風格を遺すこととなる。

東西古今無數の人、頭だけと腹のできてをるを考査比較して見れば分る、腹の方は直線が多く、頭の方は曲線が多い、腹の方に案外馬鹿正直があれば、頭の方にコソ／＼泥棒や搔ッ拂ひの敏いのである、腹と頭と共に成就し得て初めて眞の大丈夫と許されようが、此頃のやうに何でもかでも頭を第一にして腹を顧みなくては、腰のすわらぬ福助ばかりが跋扈して世間が一層フラ／＼してしまふ、福助よりも布袋を尊重する様にならねば新時代の匡救は出来ない。

袴を著て座つて居るより、腹を突き出して袋を背負ふた方が好いと云ふのではない、福助ばかり重

寶がられてゐては据りがわるくて、脚下が覺束ないから、布袋と福助を一身に兼ねよと云ふのである、無理な注文かは知らぬが、如何に明敏でも事に當つて腰が抜けては見られた態ではない、天地動轉し來れども我は我なりの氣格を養はなくては役に立つまい、アタフタと學説や思案に終生を疲らして歸する所を知らない連中は、暇つぶしに少し腹をこしらへて然るべしと忠告する。

生んが爲

品性操行の墮落を慨して、或人は女子は生んが爲に貞操を賣り、男子は生んが爲に良心を賣ると云ふたが、生んが爲に貞操を賣る者が綺羅に憂身をやつし、生んが爲に良心を賣る者が安逸を食つて居つては生んが爲にあらずして生る以上の慾念を満さんが爲である、生ると云ふは容易でないかも知れぬが、ソウ／＼貞操や良心の安賣を勉強せずとも出来る、乞食の生んが爲に食を乞ひ立ん坊の生んが爲に車を押すの類ならば、如何にも生存の爲と承知が出来るが、身邊を裝飾して虚榮心を満たし、浮華放縱の劣情を飽かしめんが爲にするは、生ると云ふ基礎が立つて後の事で生んが爲ではない、虚榮

や放逸は生き得て後の欲望である、生んが爲なご、憐れげな宥恕を含む口上は虚榮放逸を生存其ものとすする妄言で、「生んが爲」の濫用である。

生は總てのものに勝る大事である、生んが爲には虚榮も放逸も捨てざる可らずなるのが通態である、虚榮も放逸も捨て、衣食住の好惡も無くなり時には命がけの戀愛も忘れて後、初めて生んが爲の手段が出てくる、生んが爲にパンを求めると云ふ中には、手にパンを持ちながら更により良きパンを欲して居る者がある、より良きパンを求むるは生んが爲に非ずして、生きて居る以上の欲望を満足させんが爲でないか。

達人は節の爲に生を捨て、凡人は生の爲に總てを捨てる、是は眞に生と死との關頭に立つた問題であるが、戀愛痴情の爲に生を捨て、虚榮放逸の爲に總てを捨てるは、自制なき慾念に捉へられたる愚物の惑である、幸福を感情の満足、欲望の充足と間違へて居る者、生を享樂、本能本位に託せる舊式の蒙昧者流である、元來欲望には量に於て際限がなく、種類に於ても底止がない一を得れば二を望み二を得れば三を欲して止まらず、昨日は甲に憧憬れ今日は乙に趨つて轉々する、克己の志ある者は之

を能く調節制御して自ら誤らざるを勉めるが故に其の生を傷けずして其の身を全くする、然るに彼の享樂主義、官能満足主義の蒙昧人種はレフアインせられた新人生義を知らずして、何でもかでも勝手に生んが爲として醜態と苦み悶て居る、而して其の苦悶が生きて居る爲にして、生んが爲でない事に氣づかず、氣のついた時には生は苦なりと死にたがる様になる、此の流の連中も畢竟自ら己を率ふる所以を知らず、自ら己を持てあまして居る憐れな連中である。

満足

満足を求めて止まざる者は、常に不満足に悶ゆる、元來満足と云ふものは果して有るものか無いものか、若し有るとすれば持続性のない一時のものである、欲求が満たされた當座のものである、欲求は決して底止するものでないと共に満足も終局がない、何でもよい三度の食事を得れば他に望なしと思ふて居た乞食が、不足なく三度の食事を得るようになる、其の當座は満足此の上なしと喜んで居るが、いつの間にかもつと美味いものが欲しくなり、襤褸著物が厭になつて、せめて季節々に相當

した木綿著でもよいからゝ慾念が動き、著るものに不自由なくなれば、露次長屋にでも住みたくなり衣食住が兎に角さゝのへは、もつと好い著作、もつと好い家、更に家財道具と結局満足に際限がない満足は欲求が充足せられた時の感情で、人間の欲望が、情識と共に轉々底まらざるを知らば、満足は其の時の感情に過ぎないことは自ら明かになる、然るに人間は満足なる一事に一時の好感情をもつ爲に醒醒して、欲求の際涯なく到底安住すべき満足の存在せざることを悟らない、不満足は環境にあるでもなく、對手にあるでもなく、正しく自己の欲求にあることを知らば、不満足に煩悶する代りに自己の欲求を調節制御するが賢明にして捷徑である、満足を得る才幹も努力も足らずして、徒に不平や憤恨に走るは、自家の一片影に齊しき欲求の爲に、自家の全體を抛却する愚をなすものである。

満足に持続性のないと同時に、其の原因なる欲求も定著的のものはない、つまり人間の情念は動轉して靜止せぬ、其の時、其の處、其の境遇次第で變る、此の情念の一幻影たる欲求も、如何に變轉するか保證はできぬ、若し夫れ終始一貫、永久不渝の望ありせば、我等は之を志望と呼んで、情念發作の欲求を區別しておきたい。

親 孝 子

最高の學府を出て、社會の上面に在る人が嘗て、老親を大切にして及ばざるなき奉事をして居る人を見て、親を大切にすることを云ふ事も一種の道樂であると思ふ、道樂でなくはあれ迄にできないと云ふ事があるが、近頃又或る中學生が、親孝行なんて本當にせねばならぬ義務があるんですか、と眞面目に質問したのを聞いたことがある、古昔から能く俺が生んでくれと頼んだのではない、自分達が勝手に生んで置いてうるさい事はかり云ふ、と親に喰つてかゝつた馬鹿者より、其の質問が眞面目なだけ聞き流しにできない、之と同じ様な疑問を抱く者、或は更に進んで親孝行は錯誤思想なりと歐米の個人風俗を早呑込せる者は現代に相當多いことであらう。

法律が盛になつて、動もすれば權利義務の語が濫用せられる、文字語句は末さは云ふものゝ、其の字句の意義は往々事體を飛んだ錯誤に持ち込むことがある、人生自然の性情までが權利や義務で解釋されるに至りては、痒いところを搔くにも、疲れて寝るにも權利と義務と云はねはならず、戀愛

も好悪も権利か義務かを定めねばならぬ、権利と義務とは法律以外では定規のない理窟で、得手勝手
に議論のできるものである。

痒いから掻くの権利あり、掻かざる可らざるの義務ありと要もないことを考へずとも、自然に手が
動いて掻いて事は済む、親が子を受する、子が親を慕ふ、男女が相愛する、我等は此の間に権利も義
務も認めぬ、親子の情、男女の愛と云ふ様なものは、法律も何もない原始時代からの事實で、文字も
言語もない禽獸まで通用の性である、之を理窟や議論で解説せんとするならば、其の事實の眞實に遠
ざかるのみである、親に孝行を強ふるの権利もなく、子に孝行をすべき義務もない、唯親子相愛の眞
情があるだけである、此の眞情は學問で涵養せられたのでもなく、理論で誘發せられたのでもない、
古人の『かほご迄偽り多き世の中に子の可愛さは眞なりけり』とかいふ歌があるが、學問も議論も一
切交ふる所なく、而かも油然として起る性情の、そのまゝ發して弊なく害なきもの、日月の運行、四
時の代謝と其の本を同じくせる誠である、男女の戀愛、性慾も學問議論を交へぬ自然ではあるが、發
して弊に陥り害を招くものは慎み制御せねばならぬ。

親の子を愛し、子の親を慕ふ誠は實に人生の大道をなせる天眞である、無心にして之あり、無意に
して動く、子として此の性情を外面に現はすのを孝行と名づけ、妄念に驅られて此の性情の發露せぬ
のを不孝と呼んでをる、子が親を慕ふ権利も、親が子を受する義務もあるのではない、勿論道樂や面
白半分から出るものでもない。

何でもかでも科學的、論理式に解説するものと誤る結果が、人生本然の問題まで興味のないものに
したがる、我々が酒を呑んで陶然たる心地、すき腹に飯を食ふ心地は、學問や思索から出たものでは
ない、人生の本然を生後習ひ覺へた思考力によりて解釋せんとする一中學生の間は、現代の弊所弱點
を表白してゐると謂つて可なりである。

一 夫 一 婦

議論は際涯がない、一夫一婦を天地の公道なるが如く説くのも議論で、戀愛至上主義者の三角戀愛
四角戀愛も議論、純正戀愛とか、性慾本能とか云ふも、そう云ふ人達が考案した議論である、議論の

多い世の中で、黒いも白いも規準がなくなるほど八方から雑多な説を聞く。政治界の理窟仆ればかりでなく、人の倫常問題まで理窟で紛糾してをる。

一體夫婦と云ひ、戀愛と云ひ、性慾と云ふものは理窟で云へば、別々にも存在する、又一つになつて分界線のわからない時もあるが、要するに人間の其の時と、處と、状態とで、念想意識に起伏隠現する模様によるので、十人よれば十色、十年経ては百色の議論が成り立つかも知れぬ、我等も暫く此の議論仲間に這入つて、思ふ所を言ふならば、一通りは理窟で釋き議論で説くが、歸結は人の情操で定めねはなるまい。

夫婦と云ふは法律が定めたにしても、習慣が作つたにしても、男女間の繼續せる關係であるが、戀愛と云へば内的發作の感情に屬する、性慾は欲望の情念である、之を男女間に限りて用ゆれば、此の三つのもの屢同時に交錯して分別し難いが、孰れが先で孰れが中後と順序も定まつてをらぬ様であり又三者の一角が孤在して、他の二者と聯絡を有せず終ることもある、畢竟内的單獨に發作するものとの外的對手を要するものと、法律や習慣に保持せらるゝものと、各質を異にして、心意の動きかたで、

之を綜合したり、分離させたりして毎に趨舍を同くせぬからである。

夫婦と云へば例外はあつても普通戀愛も性交も伴ふものであるが、戀愛と性交とは必ずしも夫婦と云ふ人定的の關係連鎖を生じない、此の男女の關係を一と一とに止むるや否やは人の心性の流露で定まる、之を限定せんとするは人の觀念が編み出した道徳論で、法律が之を支持してをるのであるが男女人口の比較が同じようでも、獨身者の統計は違ふ、何故に一夫一婦でなければならぬか、一夫一婦の人定的外觀關係の繼續は何故に貴ぶべきか、戀愛も性交もなくとも人の倫常として之を天地の公道とせねばならぬか、と議論を詮すれば一向根據の分らないものである、一夫一婦論の向ふを張つて慾念満足から出發した放縱な多角戀愛論の公唱されるのも無理はない、理窟を第二にすべき情操問題天真の發露で定まるべき事柄を理窟で捏ね上げよとするからである、議論沙汰は兎角好天氣まで曇らしてしまふことがある、天地の公道は議論で説明できるか知らぬが、議論で公道は作れない、事理を究むるは水源を窮むる如きものがある、源窮まつて水窮まらぬを知らば、舌や筆の端ばかりを頼みにして威張つてみても仕方あるまい。

廢娼運動

七八

一方にはモダンガールや、カツプエーの女給等が勢を張ると噂されるは、一方には古い廢娼運動が繰り返される、世の中は何時も矛盾と撞著との難處であるが、廢娼運動ほど明白な様で徹底しないものは尠からう。

今は昔、東京府會は時の名士連が出て居て、娼妓か貸座敷かに課してある税を、不淨の課税、官の徴すべきものに非ずと云ふ議論をして廢止し、賦金と云ふ名義で徴收することにしたと云ふた、税と云ふ名稱は廢されたが、賦金も矢張り賦課徴收するもので、名稱を變へただけ、實は依然として官の收入になつて居る、廢娼運動も娼妓と云ふ稱呼を冠せらるゝものを廢する趣意で、賣笑婦とか賣淫とか乃至貞操濫賣のモダンガール等を社會から驅逐しようとするのではないから、此の運動が功を奏して役所の帳簿や鑑札に娼妓貸座敷など云ふ文字を除き得ても、稱呼の異なる賣淫婦は依然として存する譯である、僅に娼妓の二字を公の文書から除くが爲に、年々暇をつぶして同じ事を繰り返して奔走する

より、其の實體を除くべく除き得ずとも其の制滅禁遏の方法を講じてはどうかと思ふ、公に取締のできる娼妓を許してあつても、取締に困る私娼は隨處に聚散を縱まにして居る、經濟上の通則ではないが需用があるから供給もある、供給があるから需要も増す、公の文書から娼妓の文字を除き得て實收何がある、表面を綺麗にすれば裏面はさうでも宜いでは意義をなさぬでないか。

殊に近頃は戀愛主義を人生の至上本能とする言説が公行せられて、官能満足を高尙な人生本能らしく都合よく應用せられ、貞操濫賣も盛になつて居る、無識階級では之を多情とか不身持とか呼んで卑むが、有識階級では純眞の戀とか三角戀愛とか勝手な言辭を附會して恬然として居る、婦人連中は男子が悪いと罪を男子に歸するが、男子から云はすれば誘發魅惑の罪を女子に歸する、此の混濁縦横の社會に公娼はかり廢してみても、貧弱な看板を撤去するだけの事に止る、看板が悪いと云ふても實況は既に看板以上に露呈公表せられて居るではないか、世間で廢娼可否に頭をヒネル人が少なくなつただけ公娼なんか大した問題でない事實を證することも見られる、人身賣買がさうのさうのさ云ふが、歐羅巴邊で云ふホワイト、スレーヴ式が何處がよいか、公に取締の出来ない密娼は我國にも隨處にある、

七九

人道問題なら公娼と同時に密娼の方に注目する要が多くないか。

廢娼不可なりと云ふのでない、名稱除却は何の効益があるか、寧効果期し難しとせしめても、人の道心を支ふべく努力して貰ひたいと云ふのである、一種の嫉妬心から發した婦人の廢娼排妓運動家などは特に反思して考慮すべきである。

カツフエー女給

カツフエーの女給問題が大分八釜しくなつて來た、以前は遊蕩兒も態々吉原さか洲崎さか云ふ様に限られた一廓に足を運ぶか、警察の目を偷みつゝ淺草の魔窟にでも通はねはならなかつた、それだけおつくりで時間つぶしであつたが、今の様に隨所にバーやカツフエーが公然店舗を張り、便利に都合よくなつては、遊ぶ者も繁くなり、誘惑せらるゝ者も多くなる譯で、學生のカツフエー通學ばかりでなく、一般的に警察も骨が折れ、父兄も心配が絶へまい。

何處の國でも、國民が國家の進運に驕り、太平に狎れると、音楽、舞踊、遊戯、輕文學から淫文學の様なものゝ盛になり、人の精神的緊張味が弛んで、内省克己が薄らぎ現實的、快樂的思想に走り如何にして倦くなき享樂に浸らんか官能満足生活を第一とするようになる、我國民は今方に希臘以來世界の立國民族が時々演出したる歴史を繰返して居る、此の一般的物欲時代にカツフエー女給の盛況が現はれるは當然で、ダンスホール、競技コート、ミュージックホールの盛なると共に、人工藥物の性慾刺戟劑などが、憚る所なく天下に廣告せらるゝ等、安逸遊惰的舞臺の道具が既に遺憾なく揃つてをる、獨カツフエーの女給ばかりが問題でない、併し國民を斯くの如く官能生活に向はしめ、精神訓練を抛却せしめたのは小學校から培養した理智偏重教育の成果である。

我輩は此の生きた人間を枯木か石の様に見るのでない、精神的に緊縮しても、人間の自然は自然たらしめねはならぬが、それには自ら程度調節がある、遊戯が餘閑の事ではなく職務の如く、音楽や舞踊が娛樂を越へて社會人生の要事なるが如く、被覆の下におくべき事を公然露呈する等の放縱は、人間を唯官能満足慾の動物となし、人の人たる心的方面を没却する慾念本能思想の大なる過誤を指彈するのである。

カツフェー女給問題、抛つておく事はできまい、警察も厄介な骨折であらうが、其の骨折も其の時の効果よりないとしたら、全く繩を拂ふようなものである、スツリート、ガールさへ出現せる今日、全滅を期せられず、驅逐も効が擧らねさすれば、二枚鑑札式にでもするか、一局に聚めて隨處に自由に散飛させぬ方法でも講じねはなるまい、人心廢れて西洋の弊所弱點を輸入模倣する亞片中毒的文化の現代、此處にも彼處にも世話の焼けるものが多いことかな。

婦人参政權

随分古い問題ではあるが實現するまでは新らしいように騒がれる、衆議院議員に對する參與の權利も勿論要求されることであらうが、前議會には恰も東京市會の疑獄と解散とに際し、婦選獲得同盟なさができて、市會議員の參與權が相當に烈しく運動せられ、政府や政黨の一部にも實行賛成者があつたと云ふが、如何にも女なりさて男に勝つた者もある、男には賢明も闇愚も問はず權利を與へて、女には之を與へない、不公平と云へば不公平である、徴の生へた女權論や同權論を持ち出さなくても、

普選を迷惑がつたり、選挙の何ものかも知らない男の多くに權利を與へるならば、理解もあり、常識もある女に權利を與ふるは至當である、併し此の理解もあり常識もある婦人だけに權利を與へて、之を有効にすることが出来れば、法制の趣旨も立派に貫徹し得るが、普選と同じく、一般平等に與へるに云ふならば、大に考慮すべき點がある。

政黨者流が國利民福に大そうな施設であるかの様に宣傳した普選の結果は如何であるか、此の結果が將來に齎らす成績は如何であるか、全国市町村會を通じて慎重冷靜に考察する必要があると同時に其の權利を與へられたる者の實狀も審にして、現行の普選制度の優劣長短を判してみたい、今婦人に一般的に權利を與へるにせは、一般婦人は此の權利を行使するか、之を行使するに適當なるを得るか選挙は情實や請託がなく公正に行はるか、婦人の参加した効果が果して實現するか、現行普選に疑義を抱く我等は此の諸點に就て肯定するに躊躇せざるを得ない。

婦選論者の言ふ所は概して散漫空疎であるが、中に婦人の利害を有する市政の内容とする消費生活の諸問題には其の當事者たる婦人を参加せしめねはならぬと云ふ一事がある、具體的の實際問題とし

ては分らぬが、此の主張は獨身獨立の婦人で男子に代つて處辯せしめ得ぬ、男子と共同して利害を受けぬ立場から言ふらしいが、消費生活には普通の家庭に於ては男子は婦人より資源の供給で痛切な關係にある、又消費生活と云ふたところで、マサカ瓦斯電氣料値下げの類ばかりでもあるまいが、市町村會を通して如何なる事を成し得るさせるか。

次には婦人は公務に就て利權の誘惑を受けず、酒席で腐敗を招くことがないから、清白を期し得ると云ふ事がある、婦人が利權の誘惑を受けぬと云ふは今迄公務に就て之を受ける機会がなかつたので、婦人の通有性と云はるゝヴァニチーや偏愛は、利權でなくとも誘惑の感受性は充分ある、又男と同じく待合や料理屋で公職を汚す動機は少いかも知れぬが、衣裳や粧身具では飛んだ無理をすることもある、萬引は由來男よりも女に多いと云はれる。

要之婦人の選舉權、被選舉權は之を與へて誤用されず、害用されないか、問題で、同權論や對等論を云爲する要はない、無暗に投票者の數を多くし、議論好きの婦人を議席に著かせること云ふだけならば、煩冗を増すばかりで効益する所はあるまい。

普通選舉

政黨者流や言論社會が囃し立てたる程全國民に反響のなかつた普通選舉は、當時政府が記念メダルまで製造したが、買手は豫想の三分一もありしや否や、元來今日の普選制度は國民の大多數が希望したのでなく、寧ろ國民や輿論を背景にしたがる政争屋連中に熱望せられたのである、欲するものを與へて善く之を利用せしむる趣旨でなく、無關心の者に強ひて與へ自ら之を利用せんとする肚裏に出でた觀がある、宜なる哉、普選によりて選舉權を賦與せられたる大多數の國民は、選舉名簿に登載せらるゝことすら知らない、喜んで權利行使をした者は、マルクス流派に煽られた連中位のものであらう棄權が多かつたさか少かつたさか詮議する人もあるが、實際を知る我等には選舉名簿に登載せられぬ者が如何に多きかの懸念がある。

普選の結果、議員の素質如何は、府縣會、市町村會から衆議院總選舉の狀況に徴して既に明なる所で多言を要しない、普選の結果が階級闘争に公式的戰場を供與したことも言を俟たない、煽動政治家

の奇功を博する機會となり、恒産恒心を貴ぶ思想を破毀に導く等の缺點は明である、普選を以て庶政の更新、國家社會の慶運を將來するなど、考ふるは甚しき空想誤見である、普選の効益は屈伏せし無産階級——租税を負擔せざる國民——に、其の鬱憤を暢叙せしむる排氣瓣たる點にあつて、所謂内亂の切實制度と評された議會政治と同工異曲である、國政としてデモクラチックの政策である、其の制度が國利民福を直接産出する所以はない。

普選の根本義は斯の如しとして、之が實施方法に政府は大なる矛盾と缺漏を遺してをる、即ち選舉有權者たる者を知るべき途を開かぬことである、國家は戶籍法と寄留法とを面倒な法令を定めて國民の身分居所を明確にすることを務めながら、選舉法では有權者を是等の法令にもよらず、本人の申告にもよらずして名簿に登載せしむることとした、爲めに戶籍法寄留法の威信は薄くなりて實行一層困難となり、名簿作製の職に在る者は何の據る所もなく、多大の勞費を投じ乍ら漠然たる住民調査をなし、杜撰孟浪の餘儀なき結果を編製して居る、随つて我國に適法なる普選有權者數が幾許あるか正確な數はさておき、正確に近き數も知り得ない、唯議に杜撰孟浪なる名簿登載の員數を擧げ得るのみである。

みである。

次には普選を市町村に及ぼした點である、國政に對しては理由あり、府縣政に對しては暫く看過するが、市町村政治はつまり町内寄合政治で、道普請をする、學校を建てる、塵芥の始末をするに費用がある、之を負税者に課するに云ふ相談會で、税負擔者に發言權を與へることは當然であるが税を負擔せぬ市町村民にまで無制限に發言權を與へて、無産階級を有産者征服搾取の地に立たしめるが如き過激思想の實現に便路を開くが如き制を立てたのは早計であつた、無産者が有産者の壓伏の下に在るも不可ならば、無産者が有産者を制壓搾取することも不當である、佛蘭西、以太利のある都市の如き社會主義現出が我國の自治體に實現することは中正を支持せんとする我等の與みせざる所である、市町村會に斯る早計な輕擧を敢てしたる政府は、商工會議所の如き一段のデモクラシーを要するものは一般の小商工業者に何等の權限も與へて居らぬ。

産兒制限論

八八

人間の數が無際限に増加しては小にしては一家として子女の教養に困る、大にしては國家として國
民生活の食糧に困る、更に大にしては世界として人類生存上の難事となること云ふ説は、一應道理ある
憂慮で、此の憂慮から考へ出された産兒の調節又は制限も、佛蘭西流の模倣に一概には排斥できない
さりさて賢明高遠なる法策も首肯し得ない、貧乏人の子澤山は古昔から悲哀な事例を遺して居る一
家の慘事であるが、大局から觀れば其の子澤山は自ら始末がついて居る、國民生活乃至世界人類の生
存問題に至りては、人口増殖に伴ふ新なる問題だけに自ら始末がつくこと簡單には済まされまいが、産
兒の調節や制限が果して適應せる對策なりや否やは考究すべき點である。

産兒制限論は人間の數が殖り過ぎては食糧が足らなくなるから、殖り過ぎないやうに生産を調節す
るがよいこと迄は考へたが、現代人の食糧とする穀肉魚菜果實等の外には人間の食糧とすべき物は無い
かどうかは未だ考へて居らず、現代の食糧品種は未來永劫の食糧品種なりや否やも考へて居らぬ、先

年米騒動や米價騰貴に際し初めて産米不足を知つて驚いた時は、住宅の拂底、諸什器類の商賣繁昌ま
で件ふたが、三四年経て貸家は到る處にでき、米の産額不足の痛感も忘れられた様になり、商賣人は
不景氣とこぼし出したるが如き變態の事例は暫く措き、人類の食糧は太古草味の時代より現代に至る
迄決して同じ品種目に限られず、其の調理加工も、殖産收穫の方法も古今甚しき相違のあるのは言を
俟たない、若し人間の食糧品種が永遠に現在の如く、其の殖産收穫も永遠に現在と同じとすれば、水
陸の産物は人間増殖の無際限ほど無限とは想はれないから人間は食物の爲に互に生存を危殆にする譯
である、然れども若し人類が過去に經來りしが如き變遷推移を將來にも有すべしとせば——宇宙萬有
の變移は永劫の常態なれば——ノアの洪水は別として太古水草を逐ふて生を營みたる祖先が、一處に
定住繁殖して食に空乏を感じざるに至りし歴史は、將來の増殖する子孫に其の形様を異にして繰返さ
るゝを無しとは言はれない、田畑も近世開墾によりて廣大なつた、開墾すべき地積の盡くる事のみ
を憂ひて發展の途を講ぜざるは、開墾して廣大ならしむることを知らざりし時代の蒙を笑ふ資格がな
い、人間が空中を飛行することは前世紀には夢想空望であつた、現代の知覺經驗で將來を律するは甚

八九

た至らざるもの言はねはならぬ、人間の歴史と宇宙の變移は由來窮通自在である。

食糧品の不足は憂ふるが、水や空氣や日光には心配しないらしい、人間が増殖しても水や空氣が不足する、日光が照被力を減ずることは思はれないからであらう、人類の生産は元來大自然の作用である産兒の調節はしても性慾の制限はなしに済す云ふような、人間の虚偽なる細工は實は道理あるらしく聞へて根據のない淺薄な思索である、産兒制限論も更に研磨考究して、換骨脱胎し、人間の産れる數を減ずるより人間の食ふべき物の開拓に向つて進むか、強健なる體質と羸弱なる體質との自然淘汰を研究するに如かぬ、地球も、食糧も、人の食味も、人の生存擁護も、總てを現在の通りと限定するから、産兒制限と云ふ退嬰萎縮の窮策に陥るのである、我等は民族闘争の現世局に處して、民族衰替を招くが如き制限論を聞くは、食糧の憂慮よりも更に重大なる憂慮として居る。

アメリカニズム

探長補短か、採弊捨利か知らぬが、日本のハイカラは、頭や髻は佛蘭西、ネクタイや靴は亞米利加

著衣は獨逸、話の中に時々挟むは英語といふ鹽梅で、萬國式の五もく型であつたが、近來は大きな建造物から、シヨウウ井ンドーの陳列、洋食のコース、行儀作法まで亞米利加式が多くなり、歐羅巴では赤毛布同様に見た赤色のネクタイも大分見受ける様になつた。

米國は商賣や出稼の關係、交通の便等から自然接觸も多く、其の風物の輸入せらるゝは當然ではあるが、其の國民性や風習は餘り感心しない、實用主義、實利主義、殖民的雜種雜居氣分等からくる亞米利加風は、米人自ら云ふ如く甚だ淺膚なところがあり、輕佻に失し易い、日本に於ける亞米利加崇拜の連中は、屋内で床の上に痰を吐く、吹殻を投げる、禮服などは用ひない、最も滑稽な無作法は、政黨内閣の參與官をした人だが、此の人若かりし時に、洋服の外套がはりにドレッシング、ガウンを著て氣取つた事さへあつた、人間の模倣心は自分の遭遇した事物を取り入れるもので、其の遭遇は自分の投じた環境にあるから、如上の不行儀が米國全體の風俗ではないが、兎に角歐羅巴各國の、奥底のある節制のある風に較べるさ、甚だ蕪雜なものである、同じ英語國でも英吉利の堅實にして重厚なる紳士風は、米國には不向である。

此のアメリカニズムの輸入は、思想問題を別にしても、日本人を節度なく、放縱浮華に向はせる、日本人に米國風を加味すると、米國の長所に向はずして、日本人自體が墮落する、商賣や出稼の利益には、此の墮落が避く可らざる附物ではない、慎戒すべきは自家の本來を忘失して他の物まねする事である。

パ、パ、マ、マ

數は少くとも今でも此の類はあるに違ない、往年亞米利加へ移民を盛に送つた時、其の移民は東京附近では新潟縣や長野縣の田舎から募集された者で、汽車で横濱に運ばれ、横濱の状況も碌々見ずして直ぐ船で亞米利加に送られる、即日本の山間僻地電燈もなく水道もない地方の見聞よりもたない者が一躍米國を見る、悲哉彼等は日本と云ふ故國に對する理解は、新潟長野邊の僻地に關するものよりなく、素養も勞働移民のこころ、小學程度を出てゐない、此の狭少淺薄なる智識の持主は、米國の宏壯なる建物から、機械的設備から、觸目一として驚魂駭魄のたねならざるなしと云ふ有様で、やが

て故國を懷想するに天淵月窟の差、早い話が桑港と信州の山の中の村落との比較より智識の働かない彼等は米國の事物に驚歎すると共に、米人を優越人種として崇敬し、米國の言語風俗を尊ぶのみならず、中には米國の國體や政體まで無上の良制なるが如く妄信し、其の結果自ら卑みて故國を輕侮し、我が國體まで劣れるものと思ひなすに至り、日本人であり乍ら、其の精神は全く米國人と異らない者となつた例が随分多かつた。

此の連中が聞き囁りで、ブローケンな英語と日本語をゴツチャにしやべる、子供等にはババのママたの言はせる、本人等が之を世界最上の國土の風と得意がるに拘らず、我等は氣耻かしく同胞の爲に冷汗、時に嘔吐を催すほど厭であつた、其の上彼等が米人の下に奴隸流に働いて居るのを見るに、國家の汚辱であるように感ずることあつた。

今日では移民も送れず、此の種の事例も大に減じてをるのみならず、米國の共和的氣分より、一層危激な露西亞の共産主義に惑ふ者ができたが、往年聞て齒の浮くように厭氣のした、子供にババのママたの呼はしめる風が、今日は堂々たる上流家庭に流行してをる、さうちゃん、かあちゃんでも、

こ、ち、や、ま、か、あ、ち、や、ま、でも子供の可愛らしい言ひ方はある、労働移民の先蹤を追ふわけでないとしても、此の二語だけを赤ちやん英語にしなくても宜いでないか、洒落れたつもりか、ハイカラなつもりか知らぬが、當年の労働移民を想ひ出して下卑た感じがする。

現 代 相

時代の相は時代の人心の反影であり具象である、流行風潮は初めは一人二人より少数の先驅者を作り、何時かはなく一般的になるに、最初少数の先驅者が奇異の眼を以て見られたるに反對に、其の流行風潮に同化せぬ者は時代はづれと指斥せられる、流行風潮の滔々たる勢は、女が寒天零度下の風雪中に脛から下をスタッキング一重で凍えさす位は勿論、生命にも換へる思ひをした頭髪を斷つのも珍しいことでもなからう、況んや男が腹の据りがなくなつて、頭の重みで脚のフラつく位は怪しむに足らぬかも知れぬ。

時代相に反抗して狷介自ら得たりとするのも感服する程の事でないかも知れぬが、時代相に捉はれ

て流行風潮の是非長短得失も分らなくなるは甚だ感心せぬ、我々は現代の時相に對して深刻なる省察を費すことを忘れてはならぬ。

現時代の相は總ての事が、人の感興をそ、り、人に衝動を與へる風にできてゐる、人の感興は醒め易く衝動は永續せぬものである、隨つて次から次へ目先を變へて、場面を新らしく、曲譜が單調にならぬやうに務めねはならぬ、新聞の記事を見れば標題は大活字でさも大事件で怪奇である如く、雑誌の廣告を見れば丸で居ても起つてもをれぬやうな文字が百花燎亂の有様で記されてある、書物でも、商品でも、宿屋でも、遊覽場でも、殆ど是れ以上の文字言語はあるまいと思はれる吹聴の仕方、昔から諺に云ふ賣藥の廣告など迎も比較にならぬ、而して之を見る者は廣告で飛び立つ思ひをした程の内容實質がなくとも、廣告の幻惑暗示に支配せられた心理状態で、失望もせず腹も立てず、其の中から何物かを搜め出さんとする風もある、が此れ等はすぐ變つたものに轉々し、決して同じものを持續はせぬ。

目先が變らねは感興をつなげぬ、場面が移らねは衝動を新にすることが出来ぬ、文藝の作品も學者

の講説も、華やかに起伏波瀾多く、新奇な趣向で次から次へ倦怠を招かぬ方法を取る、大衆も其の變轉を送迎して喜んで居る、恰も活動寫眞そのまゝが今日の時代相である、活動寫眞はじつとした處はない、其のフラツシユと共に瞬間刹那を轉々變動させる、今日は實に活動寫眞的時代相である、而して其の活動寫眞そのものも次から次へ異つたものを取り換へる、其の映し出す所も亦専ら人の感興を衝動を喚ぶ脚色である。

活動寫眞的時代相、即ち是れ動的人心の具象であつて靜的反影でない、波瀾曲折を喜びて平安蕩々の趣がない、人心の動搖、輕佻、淺薄、華奢を表はして、沈着、堅實、剛健、素朴の氣風の無いことを示して居る、此の結果として現代人は不平を訴へ權利自由を主張して、紀律を守り共同の寧福を計る所以を知らず、現状を打破し平等を欲求して、守成安分の理を解せず、他を攻撃して自ら勤めず、自己の要求を固執して他の要求を顧慮せず、社會の共同生存を口にしながら、自己横暴を逞しくせんとする、元來動態は善良なる進歩のみでない、狂動は破壊崩落を招く、靜態は死靜の沈滞でない、熟慮は是より生ずる、我等は此の現時代相こそ動轉變革せざる可らざるものと思ふ。

行き詰り

近來よく行き詰り云ふ言辭を聞く、思想界も行き詰つた、文藝も行き詰つた、財界も政治も、社會のあらゆる方面行き詰らざるなしといふ風である、それ程行き詰つたなら、展開もせず、遷移もなく、動作もない死水のようなものであるかと思はれ、總ての事物は動きつゝ移り行きつゝある、天地の自然も同じように四時の運行するように變化を示して居る、唯其の變化が徐々として自然の序次を踏んでゐるから、一擧して乾坤新なり云ふが如き耳目の驚異を來さないだけである、思想界も情念あり意識ある人間を、經濟的有機物扱ひにするマルクス主義は、夢想者流の溺惑を除きては漸次一般に冷視せられて來る、享樂本能、物質萬能も人生を眞に満足せしむるに足らぬ自覺が擡頭しかけて來る、戀愛ものか人情ものでなければ相手にされなかつた小説も、時代もの所謂監ものに席を分たざるを得ざるに至り、財界も政治も、大人が老人になり、子供が大人になり、赤ん坊が育つと同じような調子で絶えず變遷して居る、如何なる英雄豪傑の事業も過去の歴史として見れば擧手投足の間の一世を驚動

したように見ゆるが、現在の事實としては歩一歩實に悠久の感があるは免れない、況んや英雄豪傑もなく、群小蠢動して日夕に悶々焦つて居る時代としたら、社會も人事も一足飛びには秋から春にはならない。

元來近時の行き詰り云ふ語は、新生面を開きたい、何か一變化を來したい、耳目に驚異を與へたいとの煩悶焦思から出た語で、社會一切の境地が死息したと云ふ意味ではない、つまり行き詰らないものを行き詰つたとして居るに過ぎぬ、だから其の行き詰りなるものは社會の事物に在るに非ずして藻掻き焦つて居る連中の心意識中に在るのである、何か新らしく變つた事を考へて、其の考の甘く出ない人間それ自身が行き詰つて居るのである、自己の行き詰りを自己以外の事物に歸した言辭で言ひ現はすから妙な誤解に陥つて、變轉推移せる社會の流れに同して波を起す所以の活機も捉へ得ぬのでないか、我等は先づ此の行き詰りと云ふ連中の行き詰つた考を捨てて、これを警告したい、自己の行き詰りさへ捨つれば社會萬般の事物一として展開されざるはないとの覺醒が得られるであらう。

學校の教課目

廣くして淺きは竟に得る所なきと一般、寧ろ狭くして深きに如かずの歎を發せしむるものは、今日の小中學校の教科目である、文部當局や所謂教育當事者は、あれもこれも種々雜多の課目を網羅して居るが、之を學ぶ兒童や生徒が果して能く其の教授の趣旨に適合する効果を收めて居るかどうか、小學校の教課目十一二、男女中等學校の教課目細別すれば二三十あり、之を通覽すれば孰れも必要なものに相違ない、之を一通り覺へさせて置くことは、結構至極であるが、之を教へられる者は少數なる優良生徒を除きては、唯其の方面の多きと部門の夥しきに苦しみ、結局總てに對して頗る不完全なる習得をするに了つて居る。

文部當局は實際如何なる秀才の集合か知らぬが、彼の夥多の部門に渉れる課目が、一般生徒に徹底して學はれ得るにせざるならば、成人の空想を少年兒童に強ゆるものである、蓋し文部の當局者でも教育當事者でも、自分等が編成した彼の課目を通して知つて居る譯ではあるまい、普通教育であるから

國語も必要、漢文も必要、英語も代数も理科も動植物も、成人たり秀才たる自己本位に羅致し來つて、之を十把一からげの教授方法で生徒に詰め込むべく工夫し、詰め込まれたる生徒は試験だけは済まし得たが、過ぎ去つて後は唯茫然として其の得る所を知らない、前年誰であつたか中學英語廢止論を公表したが、其の當否は暫く措き、現在の八百屋兼荒物屋式の教課目は大いに整理減少する必要がある、脂肪も必要、蛋白も、澱粉も、水分も、糖分も鹽分もビタミンAもBもCも、尤もらしく考へて無暗に詰め込んでも胃は馬鹿になつて働かない。

課目の整理減少に次で、更に重要な事がある、實際の教授に於て小學校に對しても、體操理科さいふ方面に文部省も府縣も多く力を用ひて居り、圖畫、手工、唱歌さ云ふ類にも注意を費し修身さか倫理さかは殆んど顧みられず、裁縫、算術、綴方さ云ふ様な實地必要の免れぬ方面は多く疎かにせられて居るのは、現今教育の大なる弊失にして、國民教養を誤る理由である、小學の理科などは讀方の中に挿入する程度でも済む、體育の美名を冠して遊技を教へる體操は少年兒童を體育以外の餘技に導き易い、小中學生が進んで上級校に入るも、家業に従事するも、理科の實驗室で手品のまねごこみや

うな實驗をしたり、テニスやダンスのまねをして遊んでは居れない、學校で習ふた畫や紙竹の細工物や、唱歌では我國民は日常をすまして行くことは出来ない、修身に生命あり血脈あるの薰習を加へ、算術、作文、裁縫、家事に實地應用の効を挙げしむる事が緊要である。

過多の課目を並べて、力を實用以外に費す、今の學校で堅實さか忠誠さか剛健さか云ふ効果を挙げ得ぬは當然である、試に生徒の意嚮を聽てみても分る、多くの女學校の生徒の好まぬ科目は家事、裁縫好むものは遊技、唱歌の類、中學校の生徒は多く運動を好んで修身を嫌ふ、小學校が兒童成績の展覽會を催せばさなきたに見易い圖畫、手工が人目を惹くべく陳列せられる、教育の實際此の如くにして思潮の惡傾向を憂ふる文部省は自ら作りて自ら苦むものなり、帝國民族の前途一大覺醒を要するは此の教育にある。

小學教育

小學校の兒童には、校長や教師は全能の標的で畏敬尊崇の中心である、教師次第で兒童の性行は大

概矯め直すことも出来れば、腦底深く指針を刻み込むことも出来る譯である、然るに兒童は小學を卒業する頃から肅整の氣分を薄くし、中等學校に入りては益々放縱になり、節制も秩序もなくなる、單に裏面ばかりでなく表面にも公然として紀律などに服従せず、教師の排斥、同盟休校など、反抗脅威を逞ふして學業まで等閑にする、勿論中學校の教師等には學藝教授の知識は有つても、人を統制化する品質を缺いてある者のあるにも因由するが、生徒たる者の心性素質に節制秩序の無いのが主因である、世人は動もすれば漫然之を時代思潮の罪に嫁し、時代そのものが生徒の品性を自然に然らしめたる如く考へるが、成程時代思潮の結果と云へば云へぬこともない、併し其の時代思潮は第一に小學校と云ふ畑で素地を與へ、第二に中等學校で發芽させるのである、時代思潮其ものは聲も姿もない、之を聲や姿で傳播する者が學校にあるのである、小學校の先生で良い先生とは如何なる人か、學校側から云へば、最も上手に生徒に教科目を覺ゆさせる人、父兄側から云へば自分等の子供を可愛がつて呉れる人である、最も上手に覺ゆさせる人は授業の技能の巧みな人で、子供を可愛がる人は父兄の機嫌を取るに巧みな人である、アノ教師は成績がよいと云ふは五十人乃至六十人の兒童の全部若くは全數

に近き割合に兒童をして教ゆる所を記憶せしめる點で率直に言へば授業の技術の巧拙である、兒童の品性や行狀に對しては何等の感化力もなく、唯知識を詰め込むだけである、加之更に大に寒心警戒すべき事は、此の授業技術者は師範學校で養成せられる間から、社會主義や戀愛至上主義などにかぶれて居る者もありて、此れ等の思想觀念が自然に兒童に反映する事も決して珍らしくないことである。

父兄に評判のよい教師は、多くは眞に良い教師でない、兒童が腹痛でも起した時に、お宅の坊ツちゃんがお加減が悪い様ですからお連れしましたと云ふて家に送つてやるか、お嬢さんは學業操行共に實によくお出来ですと褒めでもすれば、父兄間に於ける教師の評判は直ぐよくなる、但し其の評判する父兄は通學區域内の有力者さか有志者さか云はるゝ連中で、其の日暮しの連中ではない事を知らねばならぬ。

授業の技術者、父兄の機嫌取りが持て囃される、此の故に多くの教師中に常識を逸した者もあり、氣狂じみた者もあり、ヒステリー患者もあり、教師自ら人格品性の外に居る、我が國民教育の基礎斯くの如し、其の卒業兒童が如何に能く教目を記憶しても、人として處すべき所以に習はざるは當然で

ある、借問す全國幾千萬の學校中、我等這般の苦言を無用とするもの果して幾許ありや。

訓練なき學問

現代の學校教育法は、概して方式教育と云ひ得る、即其の教授は事物の理論とか法則とか形式とかに重きを置いてをる、彼の體操とか遊技とか云ふものを除ては、數學でも、理化學でも、裁縫でも、工學でも、醫學でも、實地應用の實習訓練よりも、理論方式の講義の方が多し、此の結果として學校出の人材は學び得た理論方式を、實地に應用する習練を積まねばならぬ、少し極端に云へば學校は墨水練を教へる、總てを然りと云ひ得ずとも其の大部分は僅かに實驗の形式を経たる講義の記憶學問である、天才とか秀才とか稱せらるゝ稀有の優良生にあらざる限りは、學校教育を其のまゝ、實地應用に移し得ない。

手近い實例であるが算術を教ゆる小學校の先生の算盤勘定には間違珍らしからず、裁縫を學んだといふ生徒に運針や仕上げの熟れた者は尠い、政治學を修めた者勿論政治家に非ず、經濟學を修めた者

財界の景況を解せず、工學を修めた者煉瓦一つ手にしたることなく、甚しきは人の健康生命に關する醫學を修めて有り觸れた病氣の判斷もできぬ者のあるは普通の事で、心理學の大家が妻子を捨て、他の有夫の女と戀に迷ひ、哲學の專攻者が人生を悲觀するが如きは異とするに足らぬ、所謂知識教育、智育偏重の結果は、學問と實際の人生乃至實社會とを疎隔せしめ、縁遠くする、記誦の學問は斯の如くにして往々筆舌の外に出でぬ。

斯く訓練を輕視せる教育法は、倫理、修身、道德と名くる日常の實踐躬行によりて其の學習を表現すべき、人間處生の軌範までも、方式講義の學問とし、之を教ゆる人も之を以て率ゐ導く觀念なく、之を學ぶ者も理化や博物の實驗ほどの面白味も感ぜぬ、隨て人心は頽墮する世道は弛廢する、共產論や社會主義を讀んで、其の空想妄念が實現し得る如く惑ふて、我が同胞民族に對する反逆的陰謀を企てる學生まで産出するに至つた。

今日各種學校で熱中する體操遊技に實習訓練が必要ならば、他の學科にも實習訓練は必要である、體操遊技にのみ實地の練達を欲して、算術や裁縫や乃至道德修身に實地の踐行を期せぬ現在の學校教

育は、辭典的人間を作り出して、活用的人間を疎略にする、筆舌を弄ぶ學者を作つて手足を動かす學者を作らぬ、其の究局が頭の人はできるが、腹の人はできぬ事になる、教育法は博くして淺きよりも狭くとも深きを主とするが現代社會の擾々たる弊風を救ふ所以の主たるものではないか。

寺院と僧侶

耶穌教は我等に理智のまゝに諒解せしめんごし乍ら妄信を強ゆる所あり、孔子教は漢文學者の手に委せられて形而下の規箴が主となり、章句の解說に走る、佛教は法門無量と唱へらるゝだけありて、其の通路も門戸も多く、我國に宗派と稱せるものゝみに就て見るも、人々各其の擇ぶ所より進んで堂奥に向ふことができる様である、然るに其の佛教が今迄議論や説法に於て耶穌教に押され、文字章句に於て孔子教に先んぜられ、人間の實社會に於ける實生活に甚だ縁遠きものとなり、死して後に用あるものゝ如く思ひ做され、知らぬ者は死人を佛と呼んで佛は甚だ縁起の宜しくないもの、線香は如何な名香でも不吉陰氣なもの、珠数は芽出度い時には禁物とするに至つた。

近時少しく佛教の眞諦が講論的に説かれて、幾分讀書階級に理解を興へる様にはなつたが、一般にはマダく抹香臭いのが人間の一大事に關係ある最勝尊貴の消息に附隨してゐると思はれない、何も馱線香や屑珠香が難有い譯はないが、之が佛教の或る形式に使用せられると云ふ觀念が全く穿き違はれて、葬式や法事の道具と思はれてをる、即ち佛教と云ふものは葬式や法事に入用なものとさせる因襲は改まらない、隨つて寺院は葬儀取扱所、僧侶は葬儀取扱係と見られてをる。

明治維新の廢佛毀釋が崇つたと云ふが、成程之が一つの原因かも知れぬが、廢佛毀釋は一時の變で之が熄んで既に數十年、今頃まで餘焰が燻つておりはすまい、假に其の餘痕癒にざるものがありても、之が爲にお寺は葬儀所、坊さんは葬儀係で、お布施の勘定をして居らねばならぬ譯はない、お寺や坊さんがコンナ風だから、佛教までがたわいもない人たまして、もある様に誤られるのである、生きた人間に必要なお経までが、葬式や法事のお唯しと間違へられるのである。

一體寺院や僧侶が葬式を職務としたのは、如何なる由來で、如何なる時代からか知らぬが、大きな伽藍を控へて葬式と墓守をするだけならば、佛教など、實に稱はぬ看板はやめて葬儀執行株式會社

でも設け、數ある葬儀會社と共同經營にでもした方が割がよからう、我等は佛教を葬式の道具と思はぬ、而して佛教をして我々の生存に縁遠からしめたる罪が這種の寺院僧侶に在ると思ふて居る。

宗派互に争ひ、一宗一派の内も亦鬩き、大法の躬行體現はさて措き、布教度生の本義も知らず、人心荒廢世道頹墮、迷妄の知解に惑へる思想混濁の此の現状に當面して殆ど關せざるもの、如く、唯僅少超群の人ありて法を支持するが爲に、未だ全く地に墮ちざるを得るのみである、厄介なる哉法衣の凡俗。

修養の研究

修養と云ふは心に得て體に現はすもので、所謂躬行實踐に成就せられるものである、其の理を會得し、又は其の理を比觀察し、修養に關する論説を記取するも、修養の本來には何の効なきものである、理智心酔の通弊は精神修養の研究とて、人道の研究とて稱して、此の躬行實踐、心得體現の趣旨目的を忘れ、徒に文字舌頭の言説を涉獵して無益の勞を重ねる風がある。

終生精神修養を研究して終生精神の修養に資せずとの歎は、蓋し此の流の研究者が到達する歸局であらう、精神を修養するは如何なる方向に向つてすべきか、之を修養するには如何なる方法を選ぶべきか、這種の疑問を擧げて之を比較考量するとしたら、如何にも研究せねばならぬ氣がするかも知れぬ、併し精神の修養と云へば天賦の心性を磨き出して、外物の爲に自己を動轉させないやうに、自己本來の情意を鍛鍊して明智の働きを自在にするやうに、自ら己を率ゐて日常起居の言語動作にも、不時變災の處身措置にも、天真發露の妙機を失はぬことにある、之をむつかしく考へこんで方向や方法に憂身をやつして居る暇に、何でも適意の持續性ある工夫によりて一日でも二日でも早く實習踐行するに如かない、如何に最良最上の方法や議論を詮議しても、實習踐行せねば修養に於て何の得る所もない。

研究は決して悪いことではない、學問や道理によりては大に研究せねばならぬが、學問研究の餘波が修養にまで及びて、精神修養の研究など、得たり顔に云ふに至りては、疊水練よりも氣のきかぬ話になる、二三年前の時事漫畫に、いつも頭巾や烏帽子を冠つて居る惠比須大黒の頭は禿てゐたか否や

でも設け、數ある華儀會社と共同經營にでもした方が割がよからう、我等は佛教を葬式の道具と思はぬ、而して佛教をして我々の生存に縁遠からしめたる罪が這種の寺院僧侶に在ると思ふて居る。

宗派互に争ひ、一宗一派の内も亦鬩き、大法の躬行體現はさて措き、布教度生の本義も知らず、人心荒廢世道頹墮、迷妄の知解に惑へる思想混濁の此の現状に當面して殆ど關せざるもの、如く、唯僅少超群の人ありて法を支持するが爲に、未だ全く地に墮ちざるを得るのみである、厄介なる哉法衣の凡俗。

修養の研究

修養と云ふは心に得て體に現はすもので、所謂躬行實踐に成就せられるものである、其の理を會得し、又は其の理を比觀察し、修養に關する論説を記取するも、修養の本來には何の効なきものである、理智心酔の通弊は精神修養の研究さか、人道の研究さか稱して、此の躬行實踐、心得體現の趣旨目的を忘れ、徒に文字舌頭の言説を涉獵して無益の勞を重ねる風がある。

終生精神修養を研究して終生精神の修養に資せずとの歎は、蓋し此の流の研究者が到達する歸局であらう、精神を修養するは如何なる方角に向つてすべきか、之を修養するには如何なる方法を選ぶべきか、這種の疑問を擧げて之を比較考量するごしたら、如何にも研究せねはならぬ氣がするかも知れぬ、併し精神の修養と云へは天賦の心性を磨き出して、外物の爲に自己を動轉されないやうに、自己本來の情意を鍛鍊して明智の働きを自在にするやうに、自ら己を率ゐて日常起居の言語動作にも、不時變災の處身措置にも、天真發露の妙機を失はぬごにある、之をむつかしく考へこんで方角や方法に憂身をやつして居る暇に、何でも適意の持續性ある工夫によりて一日でも二日でも早く實習踐行するに如かない、如何に最良最上の方法や議論を詮議しても、實習踐行せねは修養に於て何の得る所もない。

研究は決して悪いごではない、學問や道理によりては大に研究せねはならぬが、學問研究の餘波が修養にまで及びて、精神修養の研究など、得たり顔に云ふに至りては、疊水練よりも氣のきかぬ話になる、二三年前の時事漫畫に、いつも頭巾や烏帽子を冠つて居る惠比須大黒の頭は禿てゐたか否や

の研究に苦勞して居る笑話があつたが、研究熱も方角を誤ると、惠比須大黒の頭どころか雨の降る日は天氣が悪いと云ふのも研究問題になる、斯様な研究は終生はさておき千萬年経つても解決はつきまい、飛行機が悪氣流中も自由に飛行できる方法などの研究とは、同じ研究でも大なる相違である、精神修養の研究は惠比須大黒の頭の研究程愚でないとしても、空腹になつて食物の比較研究に時を移す愚は擇ぶ所がない。

研究は學藝に關する、修養は習修鍛錬である、學藝は理智で進境を見るが、修養は體得體現で全きを見る、何事でも研究が大切であるとして、研究により得られないもの迄研究するは一種の病人である宗教の研究乃至倫理道德の研究は學問としての宗教、學問としての倫理道德で、體得する宗教、體現する倫理道德でないことは明かである、研究せねばならぬものを研究するに非ずして、實踐躬行すべきものを研究に委ぬるは如何に言說中毒の世の中でも、穿き違ひも甚しと謂はねばならぬ、一切萬事研究せねば實行に取り掛れぬと云ふなら、朝起きて顔を洗ふのも、夜寢床に横はるのも研究して後にせねばならぬでないか、そんなに研究したくは、先づ研究の必要ありや否やを研究するがよい。

學問と自己

我等は學問の進歩を讚歎する、人間理智の開明を推稱する、然れども學問を總てこし理智を一切こして人間を其の窩窟中に投ずることに同意せぬ、學問と云ひ理智と云ふは人間の使用するもので、人間を使用するものでない、人間には之を咀嚼し消化し應用云爲すべき主體がある、之を稱して暫く心靈といふておく、人の心靈が主で學問は従である、學問や經驗の聚積である理智に至りては各人の個性で深淺巧拙の差はあるが同じく従たるものである、然るに人が此の學問に使はれ、此の理智に役せられて、之を主宰すべき自己を反て奴隸とする弊がある、つまり主たる自己を没して學ひ得たる所推度し得たる所の犠牲となる、其の状態は酒色で生を損ひ、遊戯で身を誤ると同じく、自己が嗜好するのでなく、嗜好が自己を支配するので、讚歎すべき學問も藥が毒になる。

學問が人の理智を開き、理智が學問を進め、人類世界の利用幸福に大なる寄與をなしたるは明なる事であるが、學問や理智で人の主たるべき心性靈能を善導美化することは一向に期待し難くなつた、

畢竟西洋文化の學問は如何に洗練されても、人間の意識を稱する慾念、本能を稱する情念等に傾向を有するヘレニク思想を脱しない、隨て其の意識本能を稱する人の感覺の——外境の反影として動止する情識の——外に、超越卓立せる人間中心の本來に關しては殆ど及ぶ所がない、だから學問では眞人が作れない、科學では人の精神の薰育は不可能である。

同じ水も牛は呑んで乳をなし、蛇は呑んで毒をなす、同じ飴も孝子は親を養ひ、盜跖は盜みに入る家の戸を開くに用ゆさ云ふが、心性靈能の薰化を缺いた連中が學問をするさ、其の學問が毒さなり、戸の軋る音をさめる用に供される事がある、學問を教育さ云ふ我國傳來の觀念では心性陶冶が含まれてゐた、學問せし人は概して人格の見るべきものある人さされて居たか、近代の學問は理智教授で學問をした人さは物識りさ云ふ意味に止まり、教育さ云へは物識りを作る字義となつた、物識りが當然人格者でないことは人格者が當然物識りでないのと同じことで、其の學び得た知識の外には人の貴ぶべき品性氣格は見られない、故に學問をした人間に市井陋巷の無頼漢と異らない犯罪の破廉恥を敢てする者が出る、理智は善い事にも使へるが悪い事にも使へる、使ふ者の心性次第である、使ふ者の薰

育陶冶を忽にせる結果は、其の甚しきに至りて思想悪化さ云ふが如き、没主心の理智奴隷をさへ産出する。

心性の修練に重きを置くさ、知識の習得に疎さなり、知識の習得を主とするさ心性の修練に疎さなる、兩者共に其の主力を盡すの容易ならざるは東西文明の分岐したる所以かも知れぬが、兩者共に其の平を失はざる修習は可能の事である、況んや我々は學問理智に使はるゝ者でなく、學問理智を使ふ者である以上は、其の之を使ふ我々の本尊主體たる心靈の發揮こそ大切で、先づ自己自ら力を致して之が堅實不動を鍛練せねばならぬ、寄語す世の教育専門家と稱する諸人、這間の消息を諒し得ざれば人間らしき學者は作り出されない、精神文明と物質文明の融合は望まれない。

宗 教

佛教でも基督教でも、宗教として人の率由する所となれるものは、心に得て躬に行はるゝもので、之を得んとして信念起り、之を得て信念成るさ我等は解して居る、而して此の極致の奥に達するには

先づ三昧の堂に上らねばならぬ、信念の成就是三昧で、三昧は宗教の眞諦に入る所以、之なくんば宗教の實義は存しない。我等は考へられる、詳はしくは知らぬが基督教でも神に見れたる時は我と神との別なしと云ふことがある。そうだが、佛教にも多くの經文中に禪定と三昧と云ふ語がある。三昧や禪定が通俗語で無念無想と無我と云へば大體の概念説明となるならば、有私の意識では眞實義を心得する事はできない、信念の發起さへも議論や理窟に墮ちてしまふ譯でないかと思はれる。

然るに多くの宗教家なる先達は、我々に教旨の演義や講釋ばかり聽せて、我々の思量や理解を促すことに勉めるが、我々をして心の奥底に不動不拔の信念を得しめる方法を疎略にして居る様だ、尤も基督教に祈りがあり、佛教各宗派に唱名や唱題があつて、兎に角我々の惑亂せる知覺や、鈍昏な意識を掃ふて一所に向はしむる形式は無いでない、しかし宗教家の先達は之によりて自己統一を教ふるでもなく、知覺意識の紛雜を清掃すべく修習させるでもなく、唯之がゴッドに對する祈願であり、佛に對する歸命であるとして、全く意味のない形式唱和になつてゐる、之では我等の思量する宗教なるものは、藐として雲霧裡にある様で、勿體なさも、難有味も感じられず、演義講釋を聽いた理智は演義

講釋に導かれずして、反て演義講釋に疑義を起し、唱名や唱題や祈禱を理窟のわからぬ詰らない閑事と獨斷させる。

説教を理論的に勉強するのは、基督教のようだったが、近來は佛教も盛に講談論議してをる、勿論此の口で説き文字で教ふるに云ふことは、大切な事で、人は先づ耳から目から入れて心に體するようになるものだから、其の必要は萬々之ありと信する、之がなければ一般には會得する機會も得られず、讃仰する意思も動かない、殊に宗教と云へば科學的に推理できぬ、怪力亂神か荒誕無稽と思ふものがあつて、一種の迷信であるかの様に誤解せる現代知識に對しては、釋義解説の忽にす可らざるは當然であるから、無用どころか大に必要な事には相違ないが、近時の傾向風潮は講談論議に力を用ふるに專にして、宗教を一種の議論か學問かのように思はせつゝある、宗教論、宗教學必ずしも悪いことでない、結構ではあるが、宗教の本義は理窟や議論でない、宗教の眞髓は筆端舌頭には存しない耳目より入りて淺暴な理智判斷にのみ訴へ得る輕小なものでない筈である、耳目から入れて理智に訴へさすことは其の行程手段には相違ないが、更に奥深く人類の心性に反照せしめねばならぬ、體得

躬行の境に進むべき工夫を取らねはならぬ、議論や學問は我々窮極の用ではあるまい。

我國古來の佛教各宗派の祖師方は、實に自ら佛道を心得して體現し、幾百載を経るも人の心性を率ひて、人間生存の軌轍を示されて居る、其の教法は其の時代に應じたもので、説示の全體を通じて時代の變遷に適合するとは言ひ難いが、其の根本義は宇宙始終してをる、宗教改革なきも云ふても、布教説法の様式は改め得ても、人の心性を率ひて、人の本然を發揮せしむる、即生きた我々に生きてゆく道を教ふる極致は天地と共に變易すまい、斯る尊貴の宗教を、理智仲間の學問や議論と混淆させるは、宗教家の先達の失ではあるまいか、我等は耳目に得る議論よりも、中心に信念を持し得る途に就きたい。

道 徳

道德の眞諦は、人の心性を養ふものに相違なかるうが、人心は外面に現はれると、個人の行爲となり、社會の風習となり、所謂風俗習慣をなす譯になる、之が爲に道德は善不善、可不可を外部に現は

れる行動云爲に就て教ゆる方に力が用ひられる傾がある、勿論人間と云ふものは、心を以て形を律するが本であるが、又形を以て心を正すことを忽にしてはならぬから、行動云爲に就て教へ之を心に及ぼすは其の當を得たもので、外より内を正す薰化教養は獨道德ばかりでない、又敢て之を異とするでないが、世間で道德を説き、又道德を規準として善惡正邪を論ずるのを見るに、大概個人の行業、社會の風俗が道德と云ふ定規に合ふ合はぬが主題になつてをる、之が爲に道德も時代人氣の嘲弄に會することがある。

風俗——個人の行業は餘りに細かいから、今は風俗を概括して云ふ——は世態の變遷推移と共に、今昔決して同軌一轍でない、隨て風俗に就て善惡正邪是非を判する道德も、古來一律でなく、民族共通でもない、即近親の交配は今日こそ破倫獸行と云ふが、古昔は一向に不可なりとはしてをらぬ、僕婢は主従の義に則り時に身命をも犠牲にすべきものであつたが、今日は法律上の雇關係となり、七尺下りて師の影を踏まざりしものが、束修月謝の關係となりて教授も商賣同様になりたる如き、人肉を食ふは戦慄すべき背道なりとするも、食人々種は歡喜すべき吉事とし、夫唱婦隨が常道なりとする

は、女尊男卑の國民もあり、觀し來れば風俗に現はるゝ道德の規準は東西古今決して一樣ならず、善惡正邪に同律一貫の則がない。

道德が舊さか新さか論せらるゝは、人の行動云爲に對する規矩たる點に於て、世態の變遷に伴行するが爲である、行爲の規矩、風俗の準繩が道德の總てありとすれば、道德は時代と共に趣旨を異にするべく、之に違ふには餘りに權威がなすすぎる、多角戀愛主張者が野合姦通を非とする道德を斥け、無産優越論者が、主人壓迫を正道とするの類が續出するも、蓋し當然の成行であり、舊道德の桎梏なご、事理不通、頑冥不覺の陋習なるが如く呪咀する者の輩出するも、亦免れ難き所かも知れぬ。

道德が外部に重きをおきたる結果、道德は單に風俗習慣の規準で、風俗習慣と共に變更を免れざるものさせらるゝは、事實拒むことのできない所である、然るに世の先達、動もすれば漠然道德の言辭を弄し、道德立國さか、道德的精神さか力説するが、理智尊崇の新らしがり屋には、前々世紀の音樂を聽く程の興味も起らず、化石した頭で死物を扱ふて居るぐらゐにしか思はれぬ、畢竟道德を説く者にも、道德を嘲ける者にも、其の主とする善惡正邪の決定したる規則が分らぬからでないか、善惡正

邪を各自の理解判断で定めようとするからでないか、更に言ひ換ゆれば善惡正邪を理智の問題にするから、論じ來りて極處を得ず、風俗と道德との別もつかなくなる爲でないか。

道德が其の對物を人の行爲、社會の風習に取つたは決して間違つてをらぬが、道德を説く者が、照鑑すべき定則もない善惡正邪を尺度にしたのは思の至らざる所がある、我等は道德の本據根源を儒教の言ふ「天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教と謂ふ」の一句に求めて、天地大自然を自己の心性に體得せば、百般の道教自ら明なるべしと、文章章句の外、先づ自己の心性を知るに力めば、照鑑すべき定則自ら備はり、如何に世態が變遷しても、親子相害ひ、人々相虐ぐるを是認する能はざる所以を覺るゝと共に、善惡正邪と名くるものゝ細目分岐にも取捨を誤らざるに至るを得べしと思景する。

佛教の消極的

何時誰が言ひ出したか、佛教は消極的である、厭世主義であると云はれる、するゝ佛教徒の先達中

には決して消極的でない、又厭世主義でもないを辯じ、消極の反面は積極なり、厭世主義らしきは佛教一部の應病與藥的教なりを力を入れて居るが、我等は而か言ふ者の蒙を憫むと共に、而か辯する者の勞を惜まざるを得ぬ。

釋尊在世時代の人情風俗を問ふまでもなく、現世當面の人情風俗に徴しても、人の恣縦ならんとする傾向、制御なければ紀律の保ち難き心情に對して、爲せよ教ふる事、爲す可らず教ふる事と孰れが多いか孰れを先にすべきか考へてみれば分る、一體人間には爲せよ教ゆるよりも、爲す可らずと制する箇條の多いは當然である、善事を爲さしむるより、惡事を爲さしめざる事が先である、人類を救済教化するに消極的教條の多くなるは、毫も異とするに足らぬのみならず、積極的に人を助けよと説くべき必要の場合よりも、消極的に人を害する勿れと教ふべき場合が多い、人間の非惡を止め得れば即正善を得たもので、先づ惡を止めて後、善を爲さしむるが、實際人類に對する要諦でないか、止めるべき惡より、爲すべき善が急ならざる限りは、三千年前も、三千年後の今日も勢消極的ならざるを得ない、つまり人間が餘りに作惡に積極的の結果である。

厭世と云ふたさて、社會から脱退して孤獨になれとの意もなく、死んでしまふ方がよいと云ふ譯もない、寡聞の我等も佛教中には人間の濁惡を忌みて、淨潔の境地に向へると云ふことはあると聞て居るが、厭世など稱すべき卑屈固陋の説教は聞かない、之を厭世主義と誤る者はまるで佛教の教理を聞たこともなく、何か一二宗派の我執煩悶を去らせる演義の端でも見損つた誤解であろう、厭世の實際家は反て佛教の眞義を知らぬ人に多く、佛教徒の厭世觀——若し是ありとせば——厭濁自淨觀と云ふが當つてある様に思はれる。

要するに人を殺したり、泥棒したりする者に、人を助けよ、人に恵めよと教ふるか、人は殺す可らず泥棒はなす可らずと教ふるか、朱に交つて赤くなるのを平氣で居る者に、白くなれと説くか、赤くなるな朱と離れよと説くか、孰れが濟度に適切なりやを考へればよい。

就職難

自分が生存せる社會の状態も穢へずして、自己の不滿を社會の罪に歸するに至りては、我儘勝手も

通り越して、寧愚を表白するを謂ふてよい、學校卒業者の就職難が此の兩三年來益々甚しくなつて、父兄が學資を貢いで子弟の立身處世の基本に學校へ入れ、當人も卒業を基本にして世に出んと螢雪の功を積んだが、學校を出ても就職の途がなく、當人の落膽、父兄の失望、全く同情に堪へぬ實狀である、從來久しく學業は立身の基脚となつたに拘らず、今更就職の途がなくては失望も落膽もせざるを得まい、之が爲に或人は社會を何ぞか改造しなくてはならぬと歎聲を漏した。

社會こそよい迷惑である、數年前までは學校出身者の需用が盛で、卒業者の數も過剰でなかつたが逐年學校は増加する、入學者は倍蓰する、而して社會の局面は此の激増を迎へ容れるだけに天地を擴張してをらぬ、歐洲大戰に伴ふ一時の變調景氣は例外で、社會百般の事情態様は進展しつゝありししても、其の進境は到底激増の卒業者を其の優劣を問はず容るゝには足らぬ、つまり需用は限られて供給は過剰になり、粗製濫造が多くなつてをる、社會を何ぞか改造するを云ふても、卒業者の職を作り出す譯にも行かず、卒業者を養つておく資源もない、さりさて現に職に在る者を逐ひ出して年々卒業者を入れ換へてゆく事もできない。

一升徳利には一升より容れられない、之に一升五合容らぬと不平をこぼし徳利を毀はしても詮ない事である、社會の狀態が何時までも數年前の調子であると思ふたが誤で、世態の變遷を無關心で居た結果が、失望や落膽を買ふことになつた、畢竟父兄や子弟の考へ違ひである、今日は既に平凡なる卒業を以て立身處世の基本とする望を持し得ない時代である、自分の考へ違ひを棚に上げて、其の不平を社會に歸するは、如何に同情してみても賛成できない。

罪を社會に歸したり。社會組織の改造を考へたりする暇に、自己の考や針路を變へた方が遂に勝つてをる、自分が此の社會に在る以上は、社會の事情を承知して將來を考へねばならぬ、學校さへ出れば卒業證書さへあれば、衣食は身に具はるゝ云ふ時代錯誤の觀念を去れば、社會は其のまゝでも自己に不平や不満を與へないであらう、卒業者の就職難は自ら好む所に向つて生存せんとする自分勝手な欲望が手傳つて、此の欲望の達成せられぬは、欲望其のものゝ社會事情に副はぬ爲であるを自省せずして、社會が自己の欲望に副はぬと逆憤るものである、學校卒業者も其の志望欲求を更むるの要あり、學校入學者も其の學科選擇に當りて先轍に鑑みる所がなければならぬ。

變移と苦情

東京灣隅田河口は年々三寸、場所により六七寸位埋まりつゝある事實は、東京市で調査されて明確である、殆ど氣のつかぬ、注意も惹かぬ事實であるが、之が何年かの後には洲もできる、陸岸も延びてゆく、勿論水深は浅くなる、之が爲に海苔の採集にも、水運にも不利不便を來しつゝあるのであるが、恐らく誰も此の埋まる自然作用に對して苦情を持ち出した者はあるまい、然るに此の浅くなる海底を埋築して、陸地を作り又は碇繋岸壁でも作るうとする起業者がありしたら、沿岸の苦情は大變で、水産業者も水運業者も決して黙つて見て居らぬ、必ずそれ相當の損害補償を請求する、自然に對しては愚痴をこぼしても、苦情を云ふ相手がない、人爲に對しては假令其の事が自然と同じでも相手があるから、苦情も持ち込む、しかし之も其の起業者が浅くなりつゝある處へ氣長く塵芥や瓦礫を捨て、いつの間にか陸地を作つたしたら、苦情を云ふ人も云ひ出す機會を失つて、自然作用と同じように其のまゝ濟すに違ない、推移變遷は日月を要するも人も自然も殆ど別のない結果を呈するもの

のご謂へる。

歴史は自然力と人力との流れを云ふてよい、之が日月と共に漸々として過去を増し來つた時は、大概な人は自然の勢さか、時の成行きか不可抗のものとして怪まない、同じ人爲でも急に目立つようになれば苦情を招き、人の注意を惹かぬように徐々にすれば自然と同視せられる、苦情を云ふ者の心理は相手があつて、其の事が目立つ時に多く動かし、詮じ詰れば之も人間の感情で、感情が動き出すと色々な議論や理窟が出てくる、過去の歴史に屬する事は如何に感情が動いても、相手のない喧嘩で、議論も理窟も愚痴に齊しい、相手がなければ愚痴の繰言、相手があれば争議苦情、當然のことは云ふものゝ、人間の感情ですることは妙に一貫しない矛盾を具するものである。

處が今は水平社の諸君も、そんな事をする程大人氣なくはあるまいが、一時水平運動で熱して居る時、國民に階級差別をつけた徳川幕府であるとして、今の公爵に談判をした人があつたそうである、如何に家達公が舊幕宗家の當主で、祖先のした政治を云へ、過去の歴史に屬した事、日月と共に自然と異なる推移を経た事に、何とも處置の取りようは無つたであろう、斯様な談判が道理であるなら

は、我等當時の町人も黙つては居らぬのみか、徳川氏に取潰された大名も黙つて居らず、徳川氏も大政奉還の因をなした開國要求の諸外國に苦情あるべく、其の時代の籠屋は人力車や汽車に苦情を持たみ、人力車は電車に、電車は乗合自動車に苦情を持たみ、溯るも下るも際限のない混亂で底止する所はあるまい、大晦日で打切り、明れは正月元日と云ふ気分は曆の上ばかりでない、廣く世態變遷の要津である、水平社諸君の憤恨は故あることながら、憤恨が昂して妙な處へ感情を迷らすは餘りに冷靜を缺いて居る、世態の推移變遷は既往に於て過ぎし年の曆を捨てたる如く、現在未來に於ても爾かあるべきが普通でないか。

民族闘争

古來國家を成さず、到る處に嫌忌せられ乍ら到る處に散在せる猶太民族には、國を立て、同族の共存共榮を計るご云ふ様な觀念は餘程我々ご異つてをるに違ひない、彼等は富力、學問等に於て各國各民族の上に出づるを得ても、民族協同經營の領域を守りて、領域の經營即ち立國成家が同族の安寧幸

福たる根本義は味ひ得ない譯である、舊露西亞を仆して極端なる共產主義の空想を實行しても、虐殺ご混亂ご、空想の不可現を實習したる外、彼等自體にも世界人道にも貢獻したる何物も見當らない、然るに彼等の執拗なる民族性は、世界を通じてソウエート主義に化せんごする努力を息めずして、現に他國民族を惑亂せんごしつゝある、我國に於ける近時の思想惡化は正に猶太民族の述作に惑へるものでないか。

國ご國ごの闘争が權力者の野心のみによりて行はれたる時代は、漸次人種民族の間の闘争に移り來る狀勢がある、他國の征服、領土の擴張が、權力者の功名利福の欲望を主ごした時代は變じて、民族の自衛發達の爲に必要ごならんごする現世界に於ては、民族の協同結合は一層弛解すべからざる緊要を増してをる、民族の協同寧福は國家を形成守護して、内に實力を充たし外防衛の備へを強くするの外途なきは明白なる道理である、君父の讐は三世を経て忘れ去らるゝごごあるも、亡國の恨、被征服民族の苦虐は、子々孫々に及んで絶期のないごごは現實の世界の事相を見ても明かである、民族の協同割據が自然に無用に歸するの時あらはイザ知らず、苟も之あり又之なかる可らざる世界に於ては、

立國成家の大義は決して忽にすべからざる事である、國家は即民族共存共榮の具體である、自由思想家と稱する猶太民族が國家を無用視せるが如きは、民族間の嫉悪を知つて鬭争を知らず、民族の漂流を解して安定存榮を計るを解せざる彼等特有の歴史的因襲に基づく妄想である。

我々日本民族は個々の單位を以てしては、體力に於て歐米民族にも印度人にも及はず、智力や貨殖に於て猶太民族に譲り、勞役勤苦に於て支那人に敵せず、而かも聚合一體の國民としては是等の民族に比肩し優越し、堂々世界に雄風を競ふて居る、畢竟一國一族の根柢深き歴史に育成せられたる、至誠結合の力に由るので、呼んで之を日本魂と云ひ、忠孝と云ひ、愛國心と云ふ、要するに日本國ありての日本民族たる結果である、若し我々にして此の國家なからしめば、我々民族は地球上何れの處に他の抑壓の下に懦々の氣息を保ち得たりしか、民族對峙は世界古今を通ずる事實である、亡國の恨、被征服民族の苦虐は更に民族亡滅の悲惨なきを保し難い、我々三千年來薰化育成せられたる民族は、文筆言論の上に構成せられたる空想に惑ふて、自ら存榮を危くするが如き愚は斷じて排撃せねばならぬ、彼の勞農國の共產主義、社會主義等、國家の根本義を毒せんとする妄念に酔ふて、之が實現を夢

想せんとするの輩は、民族鬭争の世界的事實を忘れ、民族共存の根據を傷けんとする者で、其の罪過容るす可らず、其の狂愚憫むに餘りある。

無 産 派

汎く社會主義と云へば、無政府主義も、民主主義も含まれ、勞農主義、共產主義、勞働主本主義とでも云ふべきものも含まれるであらう、我國で近時無産派と概括的に指呼される中には、例の猶太人により略取經營せられたる露西亞の、ソウエート勞農政府を尊崇して、我が國家民族を殘害せんとする悖逆の兇徒もあれば、經濟組織の現状を破壊して、個人私有を奪取せんとする、財産公有論の狂妄もあり、資本の壟斷を制して勞働價值を増さんとする穩健なる社會政策論者もあり、無産階級を潤澤にする爲、有産階級を壓搾奪取せんとする反抗的氣分に驅らるゝ者もあり、唯譯もなく勞役者被雇者を有利優位にせんとする欲望の實現に専念する者もあり、其の實質は甚だ多種にして一様でないように見へる。

然るに此の多種多様にして異質のものが、一括して無産派と呼ばれ、彼等自らも亦之を意せぬは孰れの主張にも其の程度の差はあれど、經濟組織の現状變革を目的とせる共通點を有する事と、孰れの徒黨にも革命的、反抗的の氣風を帯びてをる事が、互に特立しながら同氣相求め、同類相通する傾向を有する所以であらう、現に無産派中には大衆黨と、労働黨と、農民組合と、社會民衆黨と、か、勞農黨と、一々記憶されない程雑多な名稱に分れて、時には合同するとか分離するとか内輪喧嘩もして居る、内部に這入るの外で見た程無事でもないらしいが、さりさて徹頭徹尾劃然として互に獨立獨行して居ることも見へぬ。

露西亞のソウエト政府の心酔者は、正に國家を覆へし民族を亡ぼす手先をなす者、我等は其の悖狂を憫むと同時に斷して之を攻めねはならぬ、個人の私有を奪取して財産公有を實行せんとするは、人間自然の性情を無視して、當面即座限りの衣食住動物扱をせんとする者、人の本來を基調させる社會は到底此の狂愚の玩弄に委し去ることは出来ぬ、無産階級を救援して有産階級を搾取せんとするは暴を以て暴に代へ、無産階級の受けたる殘虐を有産階級に報いんとする者、今の有産階級が搾取し盡

されて後無産階級とならば、今の無産階級は何を以て報いられんとするか、階級闘争を繰返し、報復を繰返すのみとなる、而かも今の有産階級總てを通して今の無産階級を壓虐してはをらぬ、労働者被雇者を有利優位にせんとする徒に至りては、無産各派の氣勢をかり、之を背景にして己我を満足せしめんとする者、多くは己れを滿せば他を顧みぬ輩かも知れぬ、唯彼の資本壟斷を制して、勤勞價值を適當にせんとする一派は、其の主張頗る穩健なり、社會は漸次此の政策によりて、資本側も勤勞側も相互の安固幸福を計るべきである。

然れども、無産派共通の革命的反抗的氣分は帝國議會の開院式に、國家の典禮に違ふて所定の禮服を著ることに反對したり、東京市會議長に適任であつても伯爵を戴けるが故に柳澤氏に賛成せぬと云ふが如き、偏狹固陋の執著を敢てし、何事も破壊的に振舞ふに至りては、中に取るべく聽くべき主張ありとも、世間は物騒なる悖狂仲間と同視して、嫌忌憎惡の念を増すのみならう、今の無産派は穩健論の組まで唯躍起となつて逆せ上る方は得意で、靜に序次を逐ふて事功を擧げると云ふ方には適して居らぬ様に見へる、間違ふと非國民、賣國奴と誤られる懸念もある。

争議

一三二

小作争議、労働争議から種々大小の争議が到る處に續出して、資本と勤勞との間柄は甚だ險惡になつた、深く其の由來する所を討尋すれば、畢竟各人が自己本來の心性を等閑にし、萬事を理智に求め慾念の充足を本能とする、現代民情の疾患に乗じたる煽動にあるが、争議の當事者は互に昂奮して色々な理窟を言ふてをる、事件の中心が生活で直接衣食住にあるから、相當激烈なものもあるが、時には熱がさめて立消同様になるものもある様子である。

之を煽動教唆した者は、勿論猶太人の思索に成る共產論などに智恵を借りたことであらうが、丸で人間を怨に迷ふた我利亡者のようにして、人に離る可らざる歴史を無視し、一揆騒動の殺伐手段によらずして掠奪を逞くする風を教へたものである、煽動せられて蜂起した連中も、冷静に復るご馬鹿らしくなつて廢めてしもふごこのあるは無理もない、此の煽動を仕事にして良民を惑はし、良風を壞る者は甚だ不埒であるが、茲に又資本側にも此の不埒なる煽動を乗せしむるだけの素因をもつ不都合な

者もある、即資本の力を以て人間を器具同様に扱ひ、収益を壟斷して自己の物欲を満しながら、其の収益を産出するに資本と共に缺く可らざる勤勞を輕視し、或は蔑視して、其の價値に酬みず、資本專横、資本暴君の譏を免れないもの、珍しくない事である。

資本がなければ、勤勞も用ふるに所なく、勤勞がなければ、資本も殖産しない、資本は求むるに難く、勤勞は得るに易い、這般の事理は態々言ふまでもなく知れ切つたことである、求むるに難きが故に資本は得るに易い勤勞よりも上位に在るはよい、資本と勤勞とを協同させて計畫運用する智識経験も貴ぶがよい、しかし獨勤勞を劣等視するは、本來の人間味を忘れて物欲の餓鬼に墮せるものである、社會と人生とは財物はかりで立ち行くものでない、資本者自ら争議の誘發をするが如き居常は嚴に戒慎すべきである。

争議の新聞記事を見るたびに、古昔羅馬か希臘にあつた頭と手足の喧嘩の例や、目と口の争ひの寓話を想ひ出すが、元來社會そのものが相互扶持の聚團で、部分を切り離して其のまゝ別立せしめ難い組織である、資本と勤勞も、協同不可分の關係に於て其の事業を營み、孰れも相倚り相俟ちて一體を

一三三

なすものである、頭ばかり發達させて手足を營養不良にするも不可なれば、手足ばかり強健にして、頭を貧血にするも困る、目が俺が視てやらねは立ち行かぬに、口ばかり美味しいものを食ふといふ様な喧嘩は、相互扶持、組成一體の調和を壞亂し、各自ら己を傷ふて他を害ひ、竟に自他の生存をも危くするものである、お互に自分の能力にはかり心酔せず、其の能力の發揮できる舞臺面を、相手の能力にも思を致すがよい、生存は自分だけの孤立獨在で成し得るものではない。

社會主義の市政

佛蘭西のルーベール市、リール市を筆頭に、白耳義、丁抹、伊太利などに、一部の共產思想を實行せる都市があるをうた、勿論國政でない、市政で出來得る範圍の事ではあるが、其の實行せる項目を見ると、私生兒を生んだ娘は市の救済局にて救助する、貧困の産婦は無料で世話をする、貧困學校兒童には營養第一等の食物及被服を無料で給する、老人には養老年金を與へる、劇場等は所有を廢し貧民には無料で開放する、子供のある寡婦には家も供し病院も無料にする、貧民子弟の學業優秀なる

者には特定賞を與へる、その他種々の件目孰れも貧民又は労働者を厚遇する爲に施設せらるゝものであつて、人類社會の風教も、道義も、進歩發達も捨て、顧みない風である。

人間には其の性情に賢愚、勤怠、強弱、善惡等の差がある、貧富の差も多くは其の性情から生ずるが、孰れにしても同じく社會組織の一員で、其の都市の住民である、政治は正明公平ならざる可らず富者が經濟上の優位を利用して貧者を虐げる事も不都合なれば、貧者が多數の勢力を假りて富者を虐げる事も不合理である、富者の財産がありたればこそ、貧者の救助否寧安樂を計り得たる事實を反顧せば、財産分配の不均衡を鳴らすと同時に、均衡を望む財産の存在を喜ばねばならぬ譯でないか、貧者何が故に貧にして富者何が故に富める、此の懸隔の歴史由來は必ずしも正善なるものでないかも知れぬが、必ずしも邪惡なものばかりでない、人の性情に賢愚、勤怠、強弱、善惡等の差ある以上は、人の行徑同じきを得ず、其の生存行程の積聚に等差懸隔を生ずるは當然である、社會の事情を經濟的に無等差にせんと努めても、人間の性情の差は常に之に逆行して等差を作り出すは必然である、露西亞の極端なる勞農政治、一國の主權を以て強行せる共產主義すら、一向に夢想を實現し得ずして、反

て舊態平調に復するを防ぎ得ない云ふでないか、人類社會の狀勢はあらゆる物質的方面の事情よりも、人本然の性情が大なる根源をなすことを知らねばならぬ。

我國に於ても近時新聞紙の煽揚的筆調によれば、市町村に無産派の進出あり、群馬縣下の或る村の如き現に有産階級に誅求搾取を實行し、小作人や細民に潤澤を施し、其の村税賦課の如きも甚しく衡平を得ないが、村會が無産派の手に握らるゝ爲、有産者は其の壓虐に近き村政の下に屈して居るものである、元來市町村も住民相互扶持の一小社會である、一般共同の發達、幸福、安寧は勞働の外に資産と知識との協力を要するもので、有産者を虐げて無産者を賑はず云ふ單なる事實は、安定せる眞の慶福を齎らすものでない、此の流の市町村が増加して、階級闘争に報復を繰り返すは其の市町村を疲弊困憊に導くのみである、我等は佛國其他に於ける都市は勿論、世界を通じて今の狂妄なる社會主義の末路を急ぐものは、社會主義自體の實行に在り公言する、穩健なる眞の社會政策は仇視の感情を加味したる、殘虐的行動と道途を異にして適實なる功を期すべきである。

學問の獨立

若し町内に俺は獨立の男子である云ふて、喧嘩をしたり、放火、泥棒、殺傷勝手に振れまふ者があるとしたら、町内の迷惑は勿論、此の人間を包容せる社會は打ち捨て、は置かない、獨立でも獨尊でも他の利害休戚と共同の關係を保ち、他を害せぬ範圍に於て主張し實現し得べきものである。

學問の獨立云ふ意義も、また定論を聞かぬが、世間で學問の獨立云ふ連中は、學問が何物にも干渉支配されない云ふのみでなく、學問が何物でも損傷し壞亂して差支ない云ふ意味にも用ひて居る、學問——正しく云へば學說——が、其れ自體では唯文字に記述せられてあるか、習得した人の記憶に存するかで、何も實際に利害の表現するものはないが、之を現實に施行せんとする時は、飛でもない厄介な事を惹き起すことがある、町内迷惑どころの騒でない。

世の中に愚蒙な迷信がある、之も學問と學說と云へば云へぬこともない、其の迷信も唯記録や暗誦だけなら害はないが、之を實行すると、病人の醫藥を遠ざけ、唐辛で燻し殺して警察に世話をや

かせたり、あたらず媛美姫を丙午たさて疎外して孤獨にしたりする、無政府論や共産論や乃至國家解體論なども、記録や暗誦の範域に在るなら、個人も社會も國家も別に被害はなく、迷信溺惑者と同様誰も掣肘したり彈壓したりしない、所謂學問獨立で済してゐてよいが、之を實地に行はんとするに至りては、放火泥棒の近所迷惑が全社會全國家に擴がるよりも厄介な事になり、人類の向上、民族の共存共榮、社會の進歩を壞亂してしまふ。

學問の獨立は周圍境涯を犠牲にして、勝手に亂暴をする意味ならば、社會人類の安寧秩序幸福の爲に斷じて認容できぬ、獨立にあらずして擅恣暴横である、國家の存立發達に逆ふ趨歩は、國民之を亂賊と呼んで彈劾する、由來公共は破壞擾亂の匪徒を許さぬ、區々口舌筆端の屁理窟でない、眞個民族共同の敵である、曲學阿世も宜しくないが、曲學亂世は更に宜しからぬ、獨立と放恣と間違へてはお互に困る。

曲學阿世

昔時は學を以て權勢に阿ねる者があつたが、今は大衆に阿ねる者が多い、正道を曲げて權勢に都合よく説いて一身の利を計るに、批判力の浅い大衆を喜ばせて原稿料を儲けるに、其の差果して如何、曲學阿世は獨權勢に對してのみならず、大衆に對してもある、現時の出版界が如何にして時好に投じ如何にして人氣に合せんかさ焦慮する所、學者も文士も曲學阿世の徒と謂はるべきである。

賣れ行きのよい様に書く、好奇の目を惹く様に作る、戀愛や性欲や過激思想や、書く本人は原稿料の高く、印税の多きを冀ふ、或る學者が妻君に帶や指輪をせがまれて、其の資金ほしさに共産主義の筆を執つたこの噂、必ずしも誣妄ではあるまい、此れ等の事情を知らずして、其の書いたものを讀んで喜ぶ大衆は氣のどくなり、之に乗じて利を射る出版者は不埒なり。

新聞雜誌の筆調

論說では矢張り眞面目に、鹿爪な言論、社會の指導的氣分を持つてをつも、以外の記事では、其の行文筆調全く氣品もなく、操守もなく、如何にして讀者を引きつけんか、如何にして看者を喜ばせ

んかに専らなるものがある、全然社會指導を捨て、營業全幅、お客本位になつて、活動寫真館や人寄せ商賣と異らない感じを與へる、此の種の新聞雑誌が鹿爪らしい論說などを掲げ、眞面目らしく時事を評論してゐるのは、滑稽に見へる様になつてきた、新聞界の墮落か向下か、知らぬが冥々の裡、讀者をして畏敬の念を起さしむる權威はなく、面白半分の慰みものに傾いてゐる。

此の種の新聞雑誌ばかりでなく、或は一般的風潮かも知れぬが、國家の綱紀に關し又は社會の害毒になる犯行を記するにも、其の標題から文句の聯ねかたまで、之を否認咎責する風がなく、反て之に景氣をつけ、間違へは煽てるさういふ調子がある、説教強盜や講談強盜の横行した當時の記事を繰り返して見ても、彼等が大手を振つて強盜をなし、巧に非常線を遁れた事が、一點誅罰の意味なく、寧其の技能を推稱してゐる様な書き方もあつた、讀者の多くは強盜を良い事として居らぬから、無暗に眞似することもなかつたが、それでも新聞で覺へたさういふ眞似強盜もあつた、同盟罷業や、爭議があれは、何たか愉快な事でも持ち上つたかの様に、當事者は勿論其の直接間接の影響を受ける社會の損失など念頭のない書き方をする、先頃私立大學の對校野球競争に、勝つた一學校の生徒が銀座へ出て、

學生の本分も忘れて馬鹿な騒狂を演ぜんとするを、警察が抑止した事でも、堂々たる大新聞までが、「警官二百人出動し、物々しい警戒」を以て警察の警戒が不相應に大袈裟らしく思はせ、又甚しいのは「銀ブラ檢束、學生と市民の受難、警官隊の血迷ひぶり」杯を以て、生徒連中の愚狂は咎めず、警察が無辜の者を困めた様に思はせてゐる、一體學生が遊び事の勝負に逆上せて、カッフエーやバーで酔狂なまねをするのを善いとして居るのか。

何新聞が初めたか、運動遊戯を、スポーツと書き出した、スポーツなるテクニクは運動や遊戯と意義を異にした、高尚なもので、もある様に、知らぬ者を誤らせてゐるが、スポーツは我が國語に譯すれば、マサカ見榮に見せびらかすさういふ意味でなく、運動遊戯の意味に用ゆるに過ぎまい、スポーツを國語させる國に於ても、其の汎く用ひらるゝ語義は矢張り運動や遊戯で、平たく云へば「遊びごと」である、スポーツマンは遊び事の好きな人である、「遊びごと」は運動にせよ、漁獵にせよ閑餘の事である、然るに畏れ多くも、高貴に對し奉り、「スポーツの宮」など、濫稱を敢てし、地方の新聞紙まで、「スポーツの宮」を稱し奉ることを景仰の意を表するが如くに濫記してゐる、其の不謹慎、不眞

んかに専らなるものがある、全然社會指導を捨て、營業全幅、お客本位になつて、活動寫眞館や人寄せ商賣と異らない感じを與へる、此の種の新聞雑誌が鹿爪らしい論說などを掲げ、眞面目らしく時事を評論してゐるのは、滑稽に見へる様になつてきた、新聞界の墮落か向下か、知らぬが冥々の裡、讀者をして畏敬の念を起さしむる權威はなく、面白半分の慰みものに傾いてゐる。

此の種の新聞雑誌はかりでなく、或は一般的風潮かも知れぬが、國家の綱紀に關し又は社會の害毒になる犯行を記するにも、其の標題から文句の聯ねかたまで、之を否認咎責する風がなく、反て之に景氣をつけ、間違へは煽てるさういふ調子がある、説教強盜や講談強盜の横行した當時の記事を繰り返して見ても、彼等が大手を振つて強盜をなし、巧に非常線を遁れた事が、一點誅罰の意味なく、寧其の技能を推稱してゐる様な書き方もあつた、讀者の多くは強盜を良い事として居らぬから、無暗に眞似することもなかつたが、それでも新聞で覺へたさう云ふ眞似強盜もあつた、同盟罷業や、爭議があれは、何たか愉快な事でも持ち上つたかの様に、當事者は勿論其の直接間接の影響を受ける社會の損失など念頭のない書き方をする、先頃私立大學の對校野球競争に、勝つた一學校の生徒が銀座へ出て、

學生の本分も忘れて馬鹿な騒狂を演ぜんとするを、警察が抑止した事でも、堂々たる大新聞までが、「警官二百人出動し、物々しい警戒」を以て警察の警戒が不相應に大袈裟らしく思はせ、又甚しいのは「銀ブラ検束、學生と市民の受難、警官隊の血迷ひぶり」杯を以て、生徒連中の愚狂は咎めず、警察が無辜の者を困めた様に思はせてゐる、一體學生が遊び事の勝負に逆上せて、カッフェーやバーで酔狂なまねをするのを善いとして居るのか。

何新聞が初めたか、運動遊戯を、スポーツと書き出した、スポーツなるテクニクは運動や遊戯と意義を異にした、高尚なものである様に、知らぬ者を誤らせてゐるが、スポーツは我が國語に譯すれば、マサカ見榮に見せびらかすさう云ふ意味でなく、運動遊戯の意味に用ゆるに過ぎまい、スポーツを國語させる國に於ても、其の汎く用ひらるゝ語義は矢張り運動や遊戯で、平たく云へば「遊びごころ」である、スポーツマンは遊び事の好きな人である、「遊びごころ」は運動にせよ、漁獵にせよ閑餘の事である、然るに畏れ多くも、高貴に對し奉り、「スポーツの宮」など、濫稱を敢てし、地方の新聞紙まで、「スポーツの宮」を稱し奉ることを景仰の意を表するが如くに濫記してゐる、其の不謹慎、不眞

面目、是に至りて甚しと謂はねばならぬ、世の品性氣格ある新聞雜誌、少しく思を是に致して匡正に任して貰ひたい。

記者の瀆職罪

印刷公刊物の多い世の中は、公明正大にして清廉潔白な新聞雜誌ばかりでないと同時に、數知れぬ記者中には、社會の指導でも木鐸でもない醜劣な、警察や裁判所の厄介になる者も尠くない、我等は此の種の記者や、其の手になる新聞雜誌に、法律上收賄罪も發行禁止もない放任主義を訝かしく思ふのである。

新聞雜誌を背景にする記者中には、隨分社會道德も禮儀秩序も無視して、自家の職業は勝手放題で天下御免の特權を有するが如く振舞ひ、其の書くことも眞偽お構なしの無責任で、公にも私にも甚しい禍害を與へることがある、然るに彼等は正々堂々たる記者の如く、言論の自由さか、記者の天職さかを口にして、其の筆の結果や餘波がどうあらうと一向顧みぬ、社會が此の放縱暴慢に集團的にも個

人的にも甚だしく困む事實は決して稀有でないが、此の外に此の種の記者は饗應や贈品乃至金錢を受けて、論難すべき事を黙殺し、報道すべき事を握り潰し、普通なれば攻撃するに足らぬ事を悪く書き賞讃の價のない事にお太鼓をたつき、社會を欺き、民衆を傷ひて恬然、新聞雜誌を背景に記者の肩書を翳して横行して居る、是れ實に公の害毒にして國家民人に對する罪惡のみならず、他の清白公正なる新聞雜誌界、記者社會の汚辱である。

記者が公私に對し、自分免許の我儘、横着を恣にする點は、小役人が威張つたり、没常識の過誤をしたりする比でない、而して國法は役人にも、議員にも收賄瀆職の犯罪を規定せるに、役人、議員以上にくわもてを振り廻はし、酒色財物によりて社會民衆を蠱惑する行爲に何の制裁も加へないこと云ふは國法の缺漏で正義の齧蝕である、役人や議員にありては醜行にして、役人や議員以上に威權を揮ふ記者には醜行でない理由はあるまい。

他の出來事なれば大々に、時には煽揚的筆端を弄するが、自社の職工の賃金爭議や同盟罷工は一切紙上にあらはさず、殺人や泥棒でも自社内の事は知らぬ顔で済して居るものもある、此れ等道德的

背反の事も、平素大きな顔をして居る點に對し許し難きものであるが、賄賂で記事を二三にするに至りては、其の害毒到底一般の堪ゆる所でない、此の害毒公行に對して何故に刑罰法が設定されないか立法當局が此の害毒の爲に社會民人の被る所如何を知らぬ筈はなく、公正清白の記者諸君が同人儕輩の威信を失墜する所以を覺らぬ筈もあるまいに、未だ此れ等有力なる方面より、此の害毒匡正の議の起らぬも訝かしき一事である。

政界の議論中毒

何黨が政權を取つても、我々國民は別に有難味を感じたことがない、反て場合により妙な變動の影響を受けて困ることがある、政黨渦中に在つて躍起となつて居る連中は、何かに捉はれて執著して居るから、一かご眞面目なつもりか知らぬが、無關係の我等には何が左様に騒々しくせねばならぬか分らぬ、早い話が政府黨は内閣維持、在野黨は倒閣運動より外に目的はなく、時々樞密院は機嫌買ひ、貴族院は晩蒔きの民衆かぶれ、衆議院は野次馬の喧嘩場と云ふような感を抱かせる、個々には眞に上

御一人の哀襟を安じ奉り、下萬民の寧福を冀ふ人もあらうが、聚團的に見るに其の現はれたる事實が我々を甚だ好ましく方々に傾かせる。

第一政黨連中は年中騒ぎ廻はつて、何もなければ搜し出して仰々しく口を出す、其の中間へ近年這入りこんだのが貴族院各會派の連中で、さなきだに五月蠅い議論中毒を一層煽り立て、居る、全體時代思潮の悪化は、狂妄なる共產主義ばかりでない、何にでも口を出してガヤ／＼騒ぎ立てる屍理窟の紛亂も、人心荒廢の一つである、騒ぐと云ふことは頭のさきに智慧をかぶつて腹の中を空にしてをる人間のする事と思ふが、日々の新聞を見ても煩はしい理窟の捏ね合ひで、其の理窟がどれ程の大事かと思はれ役にも立たぬ益もない、いつの間にか煙のように消へてしまふ、何も知らぬ國民は大眞面目に信受して居る、御本人は疾くに忘れて居ることもある。

黙つて居れない、靜にできない、熟思もできぬ、勿論他に任せても居れない、唯無暗に説を立て議を述べ荷も口を休息させぬ、其の混雜喧鬧、さながら電車が大きな車體で轟々走る、自動車縦横に突進する、自轉車がヨロ／＼縫つて来る、其の中を悠々緩々荷馬車が通る、歩行者がマゴ／＼する街

上の混亂よろしくである、街上の混亂は行通整理も大分できたが、言論には生憎ストップ、ゴーンもないので、横論旁議のべつ幕なしに頻に躍起となり熱狂する、之が君國の爲如何程の煩累贅疣となるかは少しも顧みない、而かも其の躍起熱狂には其の理窟以外に念裡に藏する野心や欲望がある、其の騒ぎは言ふ所の達否にあらずして、野心欲望の成否にある、だから彼等も其の本來の目的に添はなければ昨日の狂態も今日は厄拂ひされた病人の様にケロリと忘れた風になる、要するに政治社會の群生含靈は、時代風潮に捲き込まれて活動寫眞的時代相を描きつゝある、若し夫れ眞に心腹君國を思ふの誠あらは、今の如き愚言蒙論を紛生して輕躁放縱自ら得たりとするが如き舉止はできない筈である。

騒ぎはいつも勢を借るものである、騒ぐ手段によりて目的を達せんとするから、いつでも多衆の聲援を利用したがる、屁理窟に熱狂するだけありて、一人の力と云ふ眞にして大なる特みを頼みさせず大向ふの群衆を釣り込む算段に苦心する、釣り込まれて道具につかはれる民衆こそよい面の皮であるが、國家は其れが爲何一つ益する所なく、國民は弄はれて暇つぶしをしただけ、此の惡風は中央政治界ばかりでなく、今は地方の市町村にまで蔓つて、實地の仕事より議論と紛擾で日を暮らす、當世の

憂は又正に此の騒ぎ立てる議論中毒にもある。

政黨政治

議會政治を無上の良制なりと説たは、將に過去の舊思想ならんとしてをる、之が長所、利益を擧ぐれば國民をして政治に參與せしめ、庶政に民意を容るゝ點にあるが、之が短所、弊害を數ふれば多數——國民の多數でない議員だけの多數——專横で、其の多數を得んが爲に選舉を汚濁にし、民意代表は唯論客の空文字に過ぎず、多數を維持せんが爲に拉致買収して政治社會の節義を壞廢せしめ、國政國策よりも、政黨維持に腐心して居る。

議會政治は大中小の野心非望者が、功利の爲に國政の舞臺面に現はれて、争鬭角逐するものと説明した方が現實に似合はしい感がする、之を有利にすれば不平等の排遣、内亂のなく、づし制度であり、之を有害にすれば衆愚の紛擾、事端煩冗の制度である、萬機は多數の喧騒裏に失はれても得る所はない、寧傑人の獨裁的政治が如何に優つて居るか、眼を高處につけて考察して貰ひたい。

議會政治は政黨政治である、政黨政治は多數包擁を力とする、政黨が地方の地盤を引きつけ、選挙に自黨員を出し、黨員の不平不満を去りて勢力を維持するには、利権と財物とを資糧とする、而して政黨には本來資産もなければ利権もない、之を得るには國家の公器を弄び乃至賄賂を受くに非ざれば遂げられぬ、政治世界の腐敗瀾濁は是に生じ、公人の節義頹廢は是に因する、即ち政黨政治は國家の綱紀を紊亂し、國民の道德を壞廢するものとなる、如今議會政治の状態、口に肅正を唱へても手に汚穢を握る、人心の匡救、思想の善導、先づ議會政治より始めよと云ひたい。

政黨が黨として敢てする所は、又黨員が個人として敢てする所である、中央政黨員が議會政治を悪用する請託は、地方府縣市町村の會議政治にも傳播し、又現にしつゝある、其の收受獲得する資糧は果して政黨の用に供せらるゝか、其の當事者個人の囊中に納まるか、分界の甚だ鮮明ならざること、其の收得の甚だ公明ならざること同じい、政治には勿論權謀もある、清濁の別も顧みられぬところもあるが、徹頭徹尾私曲と請託とを以て此の甚だ不鮮明なる隱事を漁るは、如何に寛宥酌量するも國家公共に貢獻する所はない。

近頃大臣の顯要に聖鑑を辱くしたる人の、收賄事件に對し、世評は唯表面皮相のお座なりが多いようであるが、各政黨の要部に當る諸人、此の種の事に全く無關係なる者果して幾人あるか、現はれたる者は不幸にして、隠れたる者は免れて耻なし、政黨政治の罪惡は正に該事件によりて全豹を知るべき一斑を暴露せられ至大の警策を加へられたものである、若し諸人綱紀の肅正に眞衷を勞するの臣節あらば、先づ黨勢維持の念を捨てよ、議會政治の覇權を忘れ得ざる限りは、眞に肅正の成果は期せられない、議會政治は純良なる國民の厭忌を買ふのみとなる。

地方官吏の更迭

政黨の對立で内閣の轉移を行ふと云ふことは、議會制度の運用には認めねはならぬ事、時に局面一新、人心轉換の効もある、所謂倦まざらしむる方法である、之を必ずしも二大政黨に限るに及ばぬ小黨の分立は此の轉移作用に困るが、三政黨の鼎立でも時によりては妙である、孰れにせよ議會政治の制を存する以上は、内閣當路に入れ代りが行はれて宜しいが、此の内閣入れ代り毎に地方の役人ま

で黨派本位に更迭させることは、黨弊を國民に直接する實地行政に混ざるもので、國家民人の爲に甚だ宜しくない。

米國の大統領選舉や州知事選任の結果が、殆どあらゆる部面に涉りて自黨の人を舉用し、自治體は勿論、中には嚴正なるべき裁判官まで黨用に便にするに聞て居るが、之は殆ど合衆國や各州を政黨の獨占にするもので、獨裁專制よりも甚しい政黨專横で、黨派の都合が正道に代つて庶政を經理する譯である、米國は建國の初から斯るしきたりを馴致して、一部には其の弊害を認める者もあり乍ら、如何ともなし難き國風となつてをる、之が爲に公平なる施設も、正明なる裁判も期せられぬ結果となり、黨派の起倒勝敗によりて昨是今非、前否後贊、其の適從する所を知らぬ事もある、此の事例は政黨政治の實地運用に於て大に戒慎せねばならぬ點であるが、我國にも近年甚しく此の弊風に倣ふ傾向が見ゆる。

政黨が入り代りて内閣を組織すれば、中央要局の異動が行はれるは已むを得ぬが、之が實地施政の機關たる地方廳に及び、知事以下、警察署長までも更迭して自黨の便を計るに至つては其の惡毒を攻

めねばならぬ。

知事や部長級の更迭は單純な動機からしても、從來餘りに頻繁で、二三年と同じ處に置かぬ、本人等も轉々することが陞進の助因ご心得、同じ處に二年も三年も居る様では落伍するご云ふ者もある位である、從て彼等は唯腰掛のつもりで、何か施設事業を企て、其ま、轉じ、著手したま、完成せずして去る、後任者も名利に都合のよい程度で之を繼ぐご云ふ状態で、國政の宣布も、地方の施設も眞に徹底したる事績を擧げ得ない、然るに内閣更迭ご共に、又選舉執行に際し、黨利を加味して頻に異動さす、彼等が職に忠良ならずして、舉用政黨に奉仕するを第一とするは當然である、殊に地方警察署長にまで及ぼすに至りては、職務の公正なく、人民の保安覺束なしご極言したい。

然るに此の地方官首腦部の更迭が、更に進んで一屬官、一巡查にまで及ぶに至らんかその危懼を孕まし來つた、即屬僚連も上長の更迭する毎に方向を變へて勤めざる可らず、正直に上長の命に従へば次の内閣更迭後新なる上長に如何に睨まれ如何に處分せらるゝや分らぬご云ふ懸念より、其の場のよい様に、御機嫌を損ぜぬ様に、つまり類に更代する上長官に忠實ならぬお茶を濁して過ごす事ごなつ

てきた、之が爲内閣は如何に首脳部を更迭しても、其の手足は眞實首脳の意のまゝに動かぬ、故に地方によりては知事が如何に選舉に躍起になつても、開票後の成績は開票前に部下から得た情報と全く違つたものもあり、反對黨を壓迫しよしても案外其の資料の得られぬこともある、之を政黨から見れば手足が斯うあつては其の黨の目的が達せられない、黨の目的の達せられないことは、反て國家の幸であつても、政黨自體は之をもごかしき事として首脳上長更迭と共に手足の從屬下僚まで取り換へたくなるさしたら、役人は政黨關係の者はかりとなり、政治の中正は滅却して、黨の利害はかりとなる、國民は對立政黨に弄はれ國家は政黨に殘害せらるゝ事となる、我等は此の危惧に想到する毎に、黨用官吏任命の害を今に於て防制せんご願ひ、官吏更迭に適當の制限又は保障の令を設定する必要を痛切に感ずる。

減俸問題の餘遺

政府としては勇斷であつた官吏の減俸問題は、撤回して済んでしまつたが、厄介なものを遺すこと

になつたのは、残念至極である。

減俸の是非は暫く措き、一たび内閣總理大臣が聲明書まで發表したものを、其の支配下の官吏が反對した爲に撤回したのは、國政綱紀の上に於て悔て及ばざる事である、元來官吏には嚴めしい成文紀律もあり、民間各方面に勞資爭議が流行しても、官吏社會にはさる風潮は動かなかつた、然るに減俸の一事で、官吏の結束と、反對抗争が勃發した、其の成行の真相は新聞記事より知らぬ我等にわからぬが、天皇の名に於てする裁判關係の司法官の如き、就中強硬であつたらしい、然るに帝國政府の首班に於ては、減俸問題を撤回して、其の反抗を和らげ運動を止熄させたゞけで、其の不穩失當なる態度を全く不問に付してをるから、外觀上部下の騷擾を恐れて一に鎮靜を庶幾する外なかつたものさ見へる、其の結果、官吏結束反抗は、政府に對する大なる脅威力あることを示した、百政の府たる内閣は配下官吏の爲に動かされ、之を動かしたる官吏には何の咎なき事實を公にした、我等の憂慮は實に此の例を繰返されざるかにある、今後官吏社會も亦大中小の爭議を惹き起して、國政の運用と、官紀の肅正とに弊害を及ぼさるかにある。

官吏の減俸、如何なる善巧方便であつたにせよ、随分大膽に思ひ切つた仕事であつた、其の是非の論よりも、其の實施遂行の豪邁なる意氣が、現代の時弊にほしかりし良好の劇薬であつた、然るに突如聲明して人の耳目を歛たせ、忽如撤回して啞然たらしめた、撤回が賢明の處置なら、之を提出せざりし方が遙に賢明であつた、政府の威信を傷け、内閣の輕重を暴露して撤回の賢明を贏ち得たことしたら、當路大臣の中心果して如何。

敢て此の内閣ばかりでない、政黨政治には毎に斯の類の事がある、我輩は黨略の爲に財源を官吏の俸給に求め、其の不人氣に選舉の不利を思ふ黨略から撤回したりさて、我國政黨内閣の常事として看過するに馴れて居る、唯綱紀の維持、人心の匡正に大なる憂を遺したとを嗟歎する、智恵自慢の政黨にして、此の失錯をなしたるは黨自體も心外ではないか、我等も特に一黨に對して此の難議をなすを本意ならずとする。

官吏も甚だ穩でない、苟も國政に任し反面社會に標識たる身を以て、減俸を敢行すれば同盟總辭職をするとか、各地と連絡をとりて氣勢を強くするとかいふは、紀律を紊り本分に戻る舉動である、民

間會社の職工等が敢てする爭議と異らない、靜穩なる手段方法では目的を達成されないとも思へぬ状態の下に、外部の物論を聲援にして、脅威を逞くするが如き舉は、減俸が如何に不合理不都合なる計畫であつても、恕すべき點はない、今日の弊、群衆心理的に騷擾して彌次馬式に暴れる卑怯にある、減俸敢行となれば果して彼等は同盟辭職を實行し得たであらうか、多衆の勢をかるもの往々烏合に類するから此の疑を生ずるが、そんな事は措き、紀律と節制とは善後大切にして貰ひたい、正に是れ國家民人の願ふ所である。

挿畫の人物

藝術的作品は、國民風を表はすのみならず、其の時代の氣風を表はし、作品を見て時代を回想せしむる風韻趣味があるそうだが、そう聞て見る通俗物の我々にも、時代の相違が分る様な氣がする、繪畫、彫刻、文學いづれもどこかに趣が違つてゐて、今人が如何に巧妙に模しても、全然古人の作品と同じ感じは與へない、此の時代の氣風の表はれと云ふことは、國民性や時代思潮を象徴するに相違な

く其の時代の人の氣分を現出してをるのであらう。

其れについて近頃我等は此の表現は何を意味してをるかと思ふしがある、それは先づ日々手にする新聞や雑誌の挿畫である、無数の新聞雑誌を一々見た譯でなく、唯手に觸れたものだけであるが、東京大阪の大新聞をはじめ、流行の諸雑誌に執筆する畫家は、勿論大家名流であらう、其の描寫は立派なものであらう、全體の構圖や運筆は我々批評の限でないとして、其の人物の風采が十中七八までは、言ひ合したようにさげくしてをる、男の方は其の顔つきの筋肉が引きしまつてをる云ふのかかた肥りで脂肪のない健康體云ふのか知らぬが、孰れも頬の尖つたり、眼の鋭かつたり、鼻の突ツ張つたりした風で、神經質、感傷質、昂奮性、刺戟性の風采で、ゆつたりとした趣がなく、さも精神に餘裕のない、鋭角的で豐滿の態でない、女の方は、惻發者、愛嬌者から、流行の肉感的、ダンサー風に傾き、表情的姿態で、外柔内剛さか、貞淑さか云ふ趣が表はれてゐない、此の畫風が大衆向で、執筆者を誘ふのか、執筆者の運筆が自然にこうなるのか、孰れにしても新聞雑誌の挿畫の多くは著しく其の調子を同じくする。

此の餘裕も奥底もない、せかくしい又さげくしたような人物の描かれることが大正昭和の作品の態様であるとするれば、其の時代思潮、國民性、人の氣分云ふもの、何が表現せられた譯になるか文比を誇り、藝術の進歩を誇る此の時代が、感傷的逼迫的で、おちつきのないものこそせられては、誇る文化や藝術の耻辱になる、世の中にはさげくした人もあれば、ゆつたりした人もある、大正昭和の人間が挿畫のような風采ばかりでなく、其の挿畫の表はす物語や小説の時代もギス／＼しない、ふくよかな人もあつた筈たらう、一體此れ等の挿畫の調子は何事を我等に語るか、繪そら事として無關心で看過するには、餘りに畫家の筆が偏しすぎる。

個人が作る時勢

ページ井ンク、ロードは高下駄穿いて歩きにくい、バンド、スタンドで三味線鳴しても音が透らない、ダンスホールの舞扇子も、バーの櫛吞も時勢にそはぬ。

時勢は違つた、社交も、衛生も、遊戯も、お化粧も、身のまわりも、趣味も、嗜好も、法律も、道

徳も、學説も、過去と較べたら違つたものだらけ、居家日常も違へば、人間の氣持も違つてをる、此の違つた時勢はまた時々刻々に違つて行きつゝある、何處まで行つたら止まるか、昨日が古くなり、今朝が古くなり、其の變轉に應じて行く人の忙しさは、一通りでない。

此の時勢さか時代さか云ふものは、元來どこから出て來るものか、詮じつめるに民衆自體が作つてをる、畢竟民衆の意識の變轉が反映表現してできるものである、時の風俗、時の習慣、時の事物は個々の人間の意識から流れ出で、多衆の意となり、藐然と時勢を形つくり、時代を現はしてをる、若し個々の人の意が動かねば、如何に新らしく變つた事物が移入せられても、如何に珍らしく異つた學説が唱へられても、其れが時勢の表徴となる筈もなく、時風も時俗も生れてくる譯はない、個々の人間の意が安定静止せずして、次から次へと氣をさられて動くから、時勢が動いて違つてくる、即時勢の變轉窮りなきは、民意の變轉定らざる所以である、斯の如く各人互に自から時勢を作りながら、各個は反て時勢に率ひられるもの、如く、時勢が違ふと云ふて、其の支配を受ける氣でをるのは可笑しい、つまり自分等が走り出すと、彌次馬がついて來て走り出す、彌次馬の數がふねる、終には自分等

が彌次馬に引かれて一しよに當てもなく走りまわると云ふ調子で、此の仲間はずれになつて、時勢後れさか、狷介さか、固陋かさ云はれるのが嫌になるのである。

しかし根源は各個人の意思の動搖である以上は、各個人が一人々々彌次馬の仲間に入らぬとせれば自然に衆意の傾向が定まる譯である、時勢の變轉を作り出す魁は、突飛で輕躁で變り者であつた、變轉に追隨しない固陋や狷介も、靜定の勢を作り出す魁ならば、少しも耻かしがつたり、嫌がるには及ばない、當てもなく彌次馬と一しよに騒ぎまわるよりも見識が確かである。

變轉したる時の環境に對應してゆくことは、社會の一員として適當の事である、新なる事物、異りたる學説も、之を處理し、之を玩味する襟度がなくてはならぬが、無暗に轉換に憂身をやつすは生き甲斐のない人間になつて齷齪するだけである、文學、遊藝、技工、出版物等をはじめ、何さかして早く新機軸を出そうと、焦つて居る様子が目まぐるしい位であるが、如何に焦つても寸法の違はぬ限ある人間同士の智恵で、限なき人間の満足は買はれない、早いテンポだけで音楽の曲はできないに、眼や耳や口や鼻の感覺を自己の良能と間違へて居る躁狂者は、一概にテンポが早いと南京鼠が車を

廻はすような事をして苦勞する、頭ばかりで腹を空にする、自分の氣狂ひじみたことも分らぬ、斯くて社會的に經濟にも風教にも不安動搖を増すばかりである。

生る權利食ふ權利

人は生きるの權利あり、人は食ふの權利ありといふ言葉があるが、生きねはならぬ、食はねはならぬこの意味かも知らぬが、權利と云ふ法律語——でなければ正當に要求する力ある主張といふような言ひ表はしをして、口角泡を飛ばし、肩肘を張つて他に對つて生きさせよ、食はせよと強要する傾向があるから、言葉尻を捉へるようでも、其の誤を正したくなる「親孝行」の題下でも言ふたが兎角權利の義務たのといふことは、裁判所へ持ち込む事件にあることで、生きて居りたい、飢を癒したいといふ人類自然の欲情にまつはることでない、人類ばかりでなく、蓋し禽獸蟲魚から草木に至るまで生を欲し、生を全くする爲に食養を求めてをるが、之は生物の自然で、生物の側から云へば欲情である、心意の平準を失つた例外者は除き、人は本來死を好まず生を欲し、總てのものよりも生を第一と

し、生の爲に營々として各自の向ふ所に働居る、食物は生を保ち生を全くする物資として求めらる、斯様な事は言ふ迄もない、知れ切つた話である。

いかに權利と高調しても、壽命が盡くれば強制執行で生き延びる譯に行かず、山の中や海洋上で口にするものが無ければ執達吏も差向けられない、人間同士の共同社會に在りて、相手がある時はかり權利を振り廻はして、俺の生きて行けるようにせよ、俺の食へるようにせよと威張る、要求する、強ゆるといふのは權利といふ觀念があるからで、尋常普通の事としては依頼する懇請する哀求するといふ意であるべき筈だ、然るに大威張で強請調子を當然としてをる、若し之を權利など、間違つた言葉で表はさず、自然其のまゝ正直に、生を欲する食を欲すると云はゞ、泥棒でもない限りは他に對つて要求も強請もできず、依頼か哀請かになるであらう、欲するは情で權利は理窟である、欲するが故に權利ありと云ふならば、泥棒も權利の實行をする者となる。

用語は正しくせぬと、用語の含む意味によりて事の眞義を誤る、共同生存の社會で美しい人情の發露から相互救済のできるものを、誤れる觀念から平和圓滿を破つて、喧嘩腰に爭奪する風を招くは、

益々人間を物慾の餓鬼に導く。

一六二

平凡になれ

威張りたがるのか、わらがりたがるのか、惻巧がるのか、何分にも口数の多い、理窟の多い、騒々しい世の中であるが、斯くまで騒々しく喧しくして社会は何の寄與を得、國家は何の貢獻を受けてゐるか。

我等は政治家にも、學者にも、藝術家にも、實業家にも、一日に一度でも一月に一日でも、其の威張つたり、惻巧振つたりする、わらがりをやめて、平凡な人間になることを忠告したい、いくら威張つても惻巧振つても、大概寸法のきまつた人間同士、一日早く考へるか、一二冊餘分に多く讀んだとしても、喧しく口数を費してわらがるだけの價はない、一寸より一寸一分は長いに違ひないが、其の長さの比較は倍でもない、況んや寸と尺との違ひなどは同日の談でない、殊に一寸と一寸との争論や紛議は、世間で云ふ水掛け論と異つたことはない。

思索、考慮、試に見渡して比べてみるに、何處にどれ程違つたものがあるか、前人未到さか、先哲未言さか云ふところで、それが自分だけでなく、アチラにもコチラにも似たものが出てくる、早い話が政友會と民政黨との政見争ひのようなもので、大層喧しい議論を聞くから、大變な懸隔優劣でもあるかと思へば、詰らない右から廻れさ左から廻れの喧嘩で、ごちらから廻つても、さして道程に遠近のないような事である。

元來が喧嘩や議論は、分りきつた事か、五分五分の言ひ分か、お互の好悪感情から出た主張が多いもので、裁判所の證據調べで勝敗を決するような種類のものは少い、それを理窟に理窟をつけ、議論に花を咲かせて躍起となるから、結局何の成果もない事に、騒々しい思をさせる、そんな下らない執著や詰らない意地は捨て、わらがる代りに平凡に還つてみよ、世間の喧し屋の馬鹿さ加減も分り、自分も餘り惻巧でなかつた事が知れよう。

惻巧振つたり、わらがる時は眞の惻巧も、眞のわらいのも分るものでない、山容を知らんさ欲せば山外に出でよさ云ふ、山中に居つては其の山の形は分らぬ、平凡に還つて初て眞の優越が知れる、而

一六三

して平凡に還る其の事が即眞にむらゐ事になる、世間の騒がし屋を驅つて一日黙々たる平凡にあらしめは、天地の黙々として覆載する絶大の眞義も尋思させられように、人間は思念を去つたら生きて居れぬように考へてをる連中には困つたものだ。

都市集中

英國ではエリサベス女王や、何王かの時代に、地方民が倫敦に入り込むのを禁令で制止したが、結局都市集中の弊は防ぎ得なかつた。聞いた、英國の地方民が都市に集まるに至つたは、生産組織の變革から來たことで、器械力が盛になつて人力を要せざる結果、地方民は地方で生活の安定を得べき職業がない、竟に都市に入り込んで衣食を得ようとするに至つたが原因であると言ふてをる、つまり大農組織や器械工場の現出が、地方民を過剰にした譯である、しかし此の原因がなくても、都市が地位名譽、財産、事業、社會的設備供給の淵藪たる事實は、地方民を誘引するに餘あるから、向上心ある地方民は、其の希望を満さんとして四來雲集することゝなるは避く可らざる趨勢である。

我國に於ては英國の如く別段著しい生産組織の變革はないが、近年滔々たる勢を以て都市集中を實現しつゝある、生産組織の變革云ふ程のものなく、又人口増加の激甚云ふ程の事もないのに、東京大阪をはじめ、大都市は地方民の流入によりて、求職過多、無産者救助に困んでをる、殊に東京市に入りこみ來る地方民中には、無職の爲ばかりでなく、地方に於て定職を有しながら、漫然よりよき地位を得んとして、何のあてもなく、男子志を決して郷關を出つと自ら壯にして來る者がある、東京に來てみると、同じように決志郷關を出た者、笈を負ひ來りて學業を卒へた者、職を離れて仕途を搜尋る者が、架空電線の如く叢がつてをる、ほつと出の田舎者は生き馬の目より自分の目を抜かれて驚く形で、百方奔走の結果折角來たから歸る譯にも行かぬと、つまらない心のかゝりから、仕事を還はず身を委ねる、生存競争は激甚で、優勝劣敗も迅速、元來が仕事の數より人間の數の方が多から落伍者は無數で、竟に寢食にも窮して所謂労働者無産階級なるものが増加する、而して之が救済は都市の使命なりと迫られて、都市住民は其の負擔に任ずる、國家も黙つて見てをるわけに行かぬから、之は困つた、何とせねばならぬと當惑する、併し集り來れる地方民は、郷里で缺乏を感じなかつた

衣食の半分も得られず、之を得ても郷里より失費は嵩む、生活は苦しいに拘らず、小さな面目に拘つて都會でまごつく、此の風潮は世界的に同軌であらうが、都市の華美、奢侈、娯樂の社會的供給が、地方民の名譽向上心を煽り揚げ、唆り立てる爲で、爲政者の當に考慮を要すべき風潮である。

元來都市といふものは、悪い方から云へば、概して強健なる地方民が来て、子孫を羸弱にして遺す處、忙しく働いて心身共に隙のない處、上下水道はじめ塵芥掃除など衛生設備は整ふてゐるが、人工的に健康を保持して、天然の力は殆ど及ばぬ處、照明や交通機關や娯樂設備や飲食衣服まで、殆ど備はらざるはないが、頭を鋭くして身體を強くしない處、生産率より死亡率の多い處であり、地方より入り來る人口によりて、其の殷賑が保たれてゐる處である、強健なる田舎人が入りこまねば、國家富強の中心たる都市も、存立發達してゆけないから、集中を否認するは決して宜しくないが、困苦に陥つたり無職者を増加したり、無産勞働大會の景氣つけより用のないような集中は、各日本人の爲にも勿論不得策、都市の爲にも不利、國家として迷惑なわけである、さりとて都市集中防止の指令も、英國の先例は追ひ難い。

自然の成行にまかせても、際涯なき弊害を招くに斷じ難いが、今方に集中の弊に困みつゝある我國都市の救済策は、全効を奏せずとも幾分でも制限の効を擧げる必要がある、社會問題の枝葉——集中した人を救済する——はかりに氣をさられず、集中といふ根本にも何等かの政策を講じたい、勿論之を禁止するは愚人の妄擧であるが、之を制限するは時機に處する所以であらう。

模倣人種

世界で一番模倣擬造の上手な國民は、獨逸人と日本人だと英人は評したことがあつた、聞てみるに獨逸も中々模倣に巧で、其の模倣が大きく、獨逸製として世界に出してもよい有様だが日本の模倣は小さくて上ツべらの細工に止まるから、日本製で立つて行かず、製造元の名義まで冒したくなる様子である、模倣はかりせず、自ら創製せよと云ふところで、何故か古來我國では外來物を受入れる一方で、大威張りで外國にまで押し出す物がない、有るさしたら天産物ぐらゐるかも知れぬ。

學問も、機械も、宗教も、道德も外來物なる上、近頃は風俗や氣風まで外來様に模してゐる、併し

此の外來物も日本流に鍛へなをし、日本流に自家のものとするれば、模倣が模倣でなくなり、自家本來の物になる、つまり我々は我々の素地で咀嚼して消化することが必要であつて、日本座敷の床の間にゴム人形を置物にするような、縞の着物に帯しめて、おかつは然たる斷髪頭をしてゐるような、サラダミ煮魚を一つ皿に盛つた調子は、西洋人がチョン監かつらを被つたより不恰な模倣で、生まかぢりの丸呑み、咀嚼も消化もしない不恰なもの、寄せ集めである、我國の工業製品が、上包まで模造して、小器用にできて、我國人にも適せず、勿論製造元の國人にも適せぬ、猿の物まねと悪口を云はれても、しかたがない。

古い話であるが、日本政府の派遣官が英國かで、或る機械を注文するに、英吉利と獨逸の製造商人から見積書を取つてみると、獨商人の方が英商人の半價であつた、其の差が甚しいので獨商人に安いは結構たか英國製の半價で、できるにはこんな違があるか、餘りに不思議で不安心なので聞いた、ところが獨商人の曰く、英製品は五十年位使用に堪へるであらう、獨製品は二十五年位より使用に適せぬ、價の違ふのは此の點であるが、しかし此の日進月歩の世の中に、五十年も同じ機械を使ふといふ

ことは考へられぬ、其の間に更に如何に改良進歩した新式の機械が發明されるか知れぬ、だから我製品は二十五年の耐用力にしてをると、此の話は又聞きであるが如何にも英獨兩國の國民の氣風を表はしてをると同時に、兩者の長短得失を稽へるに適切な實例である、英國風の濫に動かない所、獨逸風の勢を知るに敏なる所、歴然として睹るように思はれる、然らば我國の製造者はごちらの風に似てをるか、小細工の物まねは巧にするが、英吉利風の漫に世の變動新奇に動かされざる堅實なる力を貴ぶか獨逸風の進歩變遷を見越して對應するか、残念ながら我が製造業者は此の二者の孰れも考量に存すまい、唯模倣の巧妙を得意とするだけであらう。

模倣の價は外形や想像にあるのでない、其の能力實質にあるのである、上すべりの眞似は外様をとり、咀嚼したる眞似は實質をさる、建國以來我々の祖先は、儒教を模すれば忠孝の實踐躬行となり、佛教を模すれば寶祚祝禱の典を具へ、悉く之を日本的に消化して日本の榮養を増して來た、然るに現時西洋文物風俗を模するに及びて、唯其の形に走らされば、日本を外にして西洋其のまゝにしたがる舊弊じみた國粹論者ではないが、自家を慮くして他家の門戸に彷徨し、嚙んで己れを養はず丸呑にし

て己を傷ふ愚に惑ふてをる。

商人の店頭に置く雑貨、工場の爐邊に産する工作、點檢し來れば模擬するに急にして、製作の精神がない、思想も文藝も遊技も悉く是れ不消化のまゝ、腹を素通りさせてをる、祖先に及ばざることを遠くして還なり。

三段論法

人間の理智は何ぞ云つても三段論法の推理が唯一の根據である、學者も論客も天地間に一段論法なき、いふものは存しないと思ふて居るかも知れぬ、三段論法は確に人間が宇宙の玄妙に達せんとする學問理智の究明方法で、今日我々が物質的に進歩向上した道程を辿りし推理法に相違ないが、幾度も繰返す通り、理智なるもの、學問なるものは、又科學なるものは、決して全般に窮局の闡明をなし得るものでなく、三段論法の推理を唯一の頼りとしてをる、一面面のものである。

論理學の初歩入門講釋ではないが、我々が水は低きに流るゝものなりと斷定し、人は死するものな

りと確信せるは、既往現在の總ての水、總ての人に就て其の然るを歸納したる結果で、此の斷定確信があるから、此の水も彼の水も低い方に流れ、此の人も彼の人も死するを決定して疑はないのである故に三段論法に於ては人は死するものなり、水は低きに流るゝものなりといふ歸納の前提が確でなければならぬ、此の前提が誤つてをつては、水は流るゝものなり、之は水なり、故に流るゝものなりと推理しても、路上の窪地に溜つて流れぬ雨水に首をひねる愚に陥る、鳥は空を飛ぶものなり、蜻蜓蝶は空を飛ぶ、故に蜻蜓蝶は鳥なりと論じて動物學者に笑はれる、然るに此の肝腎な前提を得るには、あらゆる同種同類の同様なる特性や、趨歸を綜合し盡さねばならぬ、物質文明の進歩も學問の進歩も此の特性趨歸を究めた程度の深さにある、かるが故に人間の智力といふものは、經驗の積聚に立脚した推理で、經驗の積聚を得られない事體に於ては、全く闇昏蒙昧な譯である、雨の日は傘をさして行く、之も雨は濡すものであつて、今降つてをるのは雨であることを知り、傘がなければ濡れるからで論理式に排列すれば三段論法である、斯の如く理智の働きは前提次第で其の結論が正しかつたり、間違つたりする、そして此の前提の正非は經驗積聚の結果によるから、考へたゞけでは判別できぬ。

學問最高、理智萬能を誇つても、之は甘い、之は好き、之は嫌ひ、之は欲しいといふ様な、人の情念の説明はできない、人は意に適するものを好む、之は意に適す、故に之は好きなりと三段式にしてみても、之を好く道行きは暫く分つたさして、好き其のもの、説明はできない、好悪は人の感情の動きなりと云ふてみても、感情は何たか分らない、感情は人生天稟なりと云ふても、結局感情の解説にならない、心理學者も感情の動止起滅の様は講釋するであらうが、感情其のもの、實質を捉へ來りて明にすることは爲し得まい、生物は死すと決定してをるが、生と云ひ死と云ふ、其の形象は見聞覺知にあつても、其の實質は醫學をさう研究しても解明できまい。

凡そ人智は如何に誇つても三段論法の推理で、其の推理は前提の正非で、前提は生れて後の經驗の積聚綜合に過ぎない、生れる前も分らず生きてをる本然も分らず、死も死以後も分らない、而して其の情念の發作轉動も分らないまゝ、そのまゝである。

我輩は奇言を弄する譯でないが、一段論法でなくは、言ひ表はす事のできない眞理があるを云ひたい、我は生きてをる、之は此の一語で眞理を盡してをる、生きて居る者は動くさか、思考するさか、

衣食を要するさかいふ様な、生に附隨した生の作用は生そのものでない事は云ふに及ばぬ、我は甘いものを好む、之に何の三段論法があるか、寒い暑い氣持がよい不愉快だ、之に何の推理があるか、モダニズムは何にでも理窟をつけたがるが、一段論法には前提も演繹もない。

要するに理智世界と、性情世界と——用語は妙だが——を混同して、物質文明の向上進歩と人生享有の自然と一つにできぬ事を一つにして考へるから、何でもかでも論理式にやつてのけるつもりで、其の時次第な勝手な言ひ分を附會し、反て本心でもない方角に迷ひ出す事になる、宇宙間に一と一と合せて二となり、太陽は照らす、地は萬物を育成するといふような一段論法のある事、之は三段論法で形様や作用を如何に解説してみても、其の本體實質は推理のしかたがない事を知らねばならぬ、理智も必要だが萬能ではない、人生には理智で取りつきようなない窺ひ得ない、而かも單純にして明白なるもの、其のまゝで眞理であり、其のまゝで説明であるものがある、之を手近に求むれば各人の心性や情念の動きを省みても實例はすぐわかる。

生 死

一七四

ナニ人間は一度は死ぬべきまつてを、二度とは死なないさ、元氣よく生死何ものぞ我に於て關心する所なしと云ふ調子で、氣焰を吐て済して居る人が、何かの出来事から急に心もさなくなつて寂寞を感じたり、死を恐れたりして、何たか死の恐怖病にさとりつかれたような弱い心情になる、何の出来事もなくても、年齒既に壯期を過ぎると、妙に脚下が暗くなり、今日は人の身、明日は我身と、知人の死んだのにまで氣をめいらす、之も自己の變轉で、一度は死ぬものたさ済してゐた心が、その済してゐた一度きりの死にビク／＼して惜氣のたが、無理はない、人間には生死に過ぎた大事はない、生死我闕せずと氣を吐たのが酔つはらいの殺威張りで、正氣ではなかつたのである。

人の將に死せんとするや其の言ふやよしと云ふ古語があるが、人の方に死を恐るゝや其の意氣や弱しと云ふ一句もあつてよい、我等も固より死は好まない、死を恐れるが、避け得ざる死にうらたへるは何ものか、生死はたしかに大事であるが、此の大事に面して動くものは何かと反省すれば、自己の

心である、死は影も形もない去來も分らぬ、自己の心が之を恐れるのである、してみると、生死の大事は一心の動きで各自の思念が之を大事にして騒ぐのであるから、生死を問題にする前に、己の心を問題にしてみる必要がありはせぬか。

歐羅巴にも死を學問風に研究した人があるようだが、孔子の未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんぞ云ふた一句の方が死其のものを論ずるには眞諦を得てをるであらう、我國の古聖は生死元是れ雲の往來と一步を進めた道破をしてをるが、雲無心にして岫を出づと詠じた支那詩人の句を想ひ出される、何か知らぬが、何にせよ此の人の絶大の事件は千古の定律で明白なる事實であるが、誰も理窟で會得した者はない、假に理窟で會得しても、免れざる死は、執著の生を奪ひ去つて理窟もへちまもない、而して此の最も好まぬ死を一たび念頭の案件とした時は、意氣も揚らず思案も浮はず、情沈沮喪、世のあじきなさを染み／＼感ずることゝなる、そんな無病長壽の醫方も、若返りの秘傳も、健康を保ち元氣は増しても生命を延長することはできぬ、死と云ふことなどは百年も千年も後のこととして、目前の享樂に狂ひ、當面の満足を逐ひ廻はしてをる無數の人間——情死をしたり自殺をしたりする桁外れ

一七五